# 孤児たちのルネサンス

## トマスの物語

桐生 敏明

プロテスタントに対抗し、
ローマ教皇自ら改訂をおこなった
**シクストゥス聖書**
それがなぜ、葬り去られたのか？
**16世紀末、日本の留学生を包み込んだ**
**キリスト教世界の闇！**

# 孤児たちのルネサンス

## トマスの物語

孤児たちのルネサンス／目次

# プロローグ

一六四一年　長崎

男の額にふわりと一片の雪が舞い降りた。雪は、淡く冷たい感触だけを残し消えていった。

男はふと足を止め、小脇に油紙の包みを抱えたまま夜空を見上げた。深夜のこととて人影もなく、すべての音や気配も絶え、墨を流したような空に、白い小さな点が次第に数を増してくる。目をこらしてじっと見ていると、まるで雪が落ちてくるというよりも、自分が夜空に吸い上げられていくような感覚にとらわれる。

どれくらいそうしていただろうか……。

こうしていると、すべてがとるにも足らぬ心配事のように思えてくるのだが……

しかし、この包み、いったい、どう処分したものだろう。

男の心の中にいつの間にか、ちっぽけで卑小な現実がムクムクとわき上がってくる。

男が盗みの罪で壱岐へ島流しとなったのは、もう十年も前のことだ。それがこの秋、将軍家光様に世継ぎが生まれ

たということで御赦免となった。幼名竹千代、後に四代将軍となる家綱の誕生である。

おかげで長崎に帰ることができたとはいうものの、まっとうな職にも就けず、年越しをひかえ、喰うに窮して本博多町で「加津佐」という南蛮菓子を商う一軒の菓子舗に目を付けた。地味な店構えにしてはよく繁盛しており、どこかおおっぴらで、警戒心がないというのか、要は盗みに入りやすい店のように思えたのだ。

男は「これを最後に」と自分に言い聞かせ、「加津佐」に盗みにはいることを思い立った。

ねらい通り仕事は難なく終わった。

……が、盗み出した品物の中にとんだやっかいなものが混じっていた。

屋根裏に大事そうに油紙で包(くる)まれた、訳ありげな包み。てっきり大事なお宝だと思ったのだが、持ち帰り開けてみればどうも「ご禁制のキリシタン」臭い。持っているわけにもいかず、かといって、燃やそうにも何かの祟りがあるようで、どうにも薄気味が悪い。思い悩んだあげくに、「あそこなら……」と思いついたのが諏訪大社の境内……お諏訪さんは長崎の氏神だ、境内のどこかへでも捨てておけば、伴天連(ばてれん)の魔法や祟りも封じられるに違いない。

あそこなら大丈夫だ。男は心を決めると、降りだした雪に震えながら諏訪大社への道を急いだ……。

◇

　翌朝、諏訪大社の禰宜（ねぎ）の一人が、本殿賽銭箱の上に白い雪のかたまりが乗っているのを見つけた。
　手でそっと雪を払いのけると、油紙にまれた四角い包み。不審に思い社務所へ持ち帰り開けてみれば、何重にも包まれた油紙の中から一冊の奇妙な本が現れた。

　表紙には「BIBLIA SACRA」という南蛮文字が記されていた。

# 第一章　ローマ教皇シクストゥス五世

## 1

一九六八年四月　ローマ

オレンジ色の市電が通り過ぎてしまうと、カメラはその向こうにポポロ門の姿をとらえた。

ポポロ門、正式にはフラミニア門という。その昔、北ヨーロッパからローマを訪れる巡礼たちはフラミニア街道を通り、このポポロ門からローマへ入ることになる。今ではポポロ門を一歩出れば市電やタクシーが行き交い、往時の面影はないが、かつて北イタリアの田園風景の中を旅してきた巡礼は、このポポロ門にたどり着き、門の向こうに広がるローマの偉容に「神の国に来た！」という感慨にひたることになる。

カメラはさらにポポロ門へと進み、その三つあるゲートの中央アーチをくぐり抜けポポロ広場へと出る。広場の中央には、エジプトから運ばれたというオベリスクがそびえ、その向こうには双子教会のドームと、巡礼たちをヴァチカンへ導くための三本の通りが、絵はがき的な均衡を作り出している。

カメラが、オベリスク横手に造られた噴水にズームインすると、若い男が噴水の縁に上ってカメラを構えている。オベリスクの台座には所在なく腰を下ろす若者たち。噴水の周囲には手を取り合うアベック。
……と、広場の路面にポツンと大きな雨粒がはじけ、黒いシミを作った。そのシミがアッという間に広がり、昼のように明るいローマの夕暮れが、にわか雨によってたちまち真っ暗となっていく。
ポポロ門の三つのゲート、双子教会のそれぞれの柱廊、そしてポポロ教会の入り口と、雨をよけられるわずかな場所を探して、観光客やローマの市民が走る。カメラはその中から若い日本人女性にズームアップする。彼女はムダと知りつつもデイバックを頭にかざし、浅い水たまりとなった路面に水しぶきを上げながら、走る、走る……
彼女は、やがて自分の選択が間違いだったことに気づく。
とっさに目指したポポロ教会の入り口に、雨を避ける廂らしいものはなかった。ポポロ門を目指すか、双子教会を目指せばよかったのに……。彼女は扉のわずかなくぼみに張り付いて、少しでも雨から身をかばおうとする。
……と、その背中が、思わず扉を押し開いた。
中に入るや、激しい雨音がぴたりとやんだ。
そこは暗くて狭い空間、横手にはもう一つの扉がある。ためらいがちにその扉も開けてみた。広い静かな空間に広

がる夕べのミサの祈り。ラテン語の響きが、静けさをいっそう際だたせている。

その静けさに異議でも唱えるかのように、彼女のお腹の虫が「クーーッ」と鳴った。

参拝者たちは、広い礼拝堂の前の方の席に固まっている。静けさを破る無粋な音に気づいた人たちはいないようだ。それとも聞こえない振りをしているのだろうか。

彼女は空腹に耐えかねたのか、ソーっと抱えたデイバックの中を物色する。

ガサガサ、ガサガサ、それでも参拝客には聞こえない。

やがて、チョコレートの銀紙をめくる音、まだ参拝客には聞こえないようだ。

（大丈夫みたい、神様だってこれくらいなら許してくださるわ！）

自分に言い聞かせながら、ソーっと口許へチョコレートを運ぶ。

口許のアップ。

その途端、いきなりチョコレートを噛み割る甲高い小気味よい音……

参拝者の顔が一斉に振り向く。そして一斉に人差し指を口に当て

「シーーッ」

そこへ、チョコレートのアップと商品名のクレジットが

挿入される。
　クレジットの後は、彼女を中心に参拝客や神父までが雨上がりのポポロ広場に集まり、笑いながらチョコレートをかじる記念写真風カットで締めくくる。
　背後の虹は合成するしかないだろう。

　のしかかってくるような不安に苛まれ、康男は、真夜中に目を覚ました。
　時計を見ると、まだ午前二時。引き続き眠ろうとするのだが、目は冴えるばかりで、どうしても眠りに落ちることができない。
（撮影は順調に終わったというのに。何だろう、この不安は……）
　康男は、不安の正体を探ろうと、眠れぬままに今日一日のＣＭ撮影の流れを頭の中で反芻してみた。

　当時としては異色の企画だった。ローマといえば、誰もが抜けるような青空を連想する。多くの写真や映画が、そんなローマを紹介してきた。オードリー・ヘップバーンの「ローマの休日」、あの白黒の画面にさえ、多くの観客が抜けるような青空を感じたことだろう。それをこのＣＭでは、ローマの雨をテーマにするという。しかもＣＭ音楽の類は最後のシーンまで使わず、雨の音と、チョコレートをかじ

る音、荷物をまさぐる音、そして静けさ、そんな効果音だけで構成するという。

確かに面白いと思うし、ローマが観光シーズンに入る三月の空模様は、ローマっ子と同じで大変移り気だ。今晴れていたかと思うと、突然、土砂降りの大雨が駆け抜ける。山本ディレクターは、おそらく新婚旅行でこの経験をしたに違いない。それをＣＭに取り込もうというのだが、今は四月、そんなに都合良く雨が降ってくれるだろうか。一部のカットは人工雨でごまかせるだろうが、ポポロ広場の全体をとらえる雨のカットとなると……この撮影、下手をすると、天気待ちならぬ雨待ちの長丁場になるかも知れない。でも海外ロケでそれは許されない。ＣＭには予算というものがある。スポンサーがこの企画が気に入ったからといって、制作費をいくらでも使いなさいということではないのだ。

そんな心配をよそに、撮影初日から「好天」ならぬ「にわか雨」に恵まれた。

その日は、ポポロ教会内部の撮影許可の関係で、どうしても午後四時までに内部の撮影を終えてしまわないといけない。そこで、エキストラの揃う十時までは、ポポロ広場の外のカットを念のために押さえておこうということになった。

もちろんディレクターは、「いくら日の暮れるのが夜の八

時過ぎになるローマだといっても、朝の光と夕方の光は違う」と譲らない。しかし、プロデューサーやスポンサーの意向を酌む制作進行としては、やはり少しでもカメラを回してほしい。

そこで、本番は内部の撮影が終わった後にし、「あくまでもテストカットや予備カットを押さえておく」ということで納得してもらった。

このことが幸いした。カメラマンが、重い三五ミリカメラを肩に乗せている最中に、突然、にわか雨が降り出したのだ。こうなったら朝の光もヘッタクレもない。スタッフ一同（用のない藤プロデューサーまでが）、無我夢中で雨の中をかけずり回った。

「雨が上がる前に」「雨が上がる前に……」

こちらの焦る気持ちを察したのか、雨は上がる気配もなく降り続いた。

しかし、撮影が終了して時計を見ると、なんと一時間しかたっていない。まるで三、四時間が過ぎたような感じだった。スタッフの顔にも、スポンサーの顔にも、びしょ濡れになったモデル嬢の顔にも自然と笑みがこぼれ、不思議な一体感に包まれた。

こうなったら言葉はいらない。まるで何かに取り憑かれたかのように、みんなが一つになって動き、雨の部分を除いて二日半を想定していた撮影が、まる一日で終わってし

まった。しかも一番心配していた、ローマの雨までカメラに納めて……。

　何も心配することはない。みんなうまくいった。まる一日の撮影で、ローマロケは完了してしまった。ディレクターの山本さん、カメラの広瀬さん、ライトの奥田さん、それに鬼フジの異名を持つプロデューサーの藤さんまでが、「今回の制作進行はよくやってくれた」と、天候に恵まれたことまで制作の頑張りみたいに褒めちぎってくれる。

　しかし、日本へ帰る飛行機は、一番早い便で明後日まで待つしかない。カメラマンも撮影結果には自信を持っており、ディレクターも撮り足しや予備カットは必要ないという。藤プロデューサーが大英断を下した。

「明日はローマ観光だ！」

　夜八時、ガイドと相談したところ、グリーンラインツアーズは八時四十五分までやっているという。撮影終了後、みんなが解放感と充足感に満たされてイタリアの夕食を楽しんでいる間、私は日本人通訳と二人で、ファリーニ通りにあるグリーンラインツアーズを訪れた。

　ここもＯＫ！　ガイドを含めて十名なら、マイクロバスを出さなくても、明日の正午に出る定期観光バスに乗れるという。

すべてがトントン拍子だった。やることなすことうまくいく。

喜んでいいはずなのに、何か不安でたまらない。どうしても眠ることができない。

康男の身に異変が起こりだしたのは、彼がこの撮影の制作進行に選ばれ、ローマロケが決定した頃からだ。

康男としては大乗り気だった。

（これで近世日欧交流史のメイン舞台を覗くことができる。）

彼は大阪のＣＭプロダクションで働くかたわら、ある夜間大学の史学部に籍を置いていた。その卒業まであと一年。卒業後は、契約ではなく、晴れてこのプロダクションの社員として迎えられるだろう。後は卒業論文を完成させるだけだ。

彼が卒論に選んだテーマは、『近世長崎における朱印船貿易とキリシタン迫害』。江戸時代初頭、日本におけるキリスト教の盛衰を、宗教史としてではなく、経済史の側面から捉えようという試みだ。

その調査の中で、浮かび上がってきた一人の人物――トマス荒木――日本人としてローマへ留学し、パードレとなって日本へ戻ったものの、帰ってきた頃には日本はキリシタンは禁止。彼も例外に洩れず捕らえられ拷問にかけられるが、多くのキリシタン信徒がヒステリックな拷問に屈せず

殉教していった中、彼だけはキリスト教を捨て、逆にキリシタン詮議役人として生きる道を選んだ。しかも詮議役人となってからもキリシタンに立ち返ろうとしたが、この時も穴吊りの拷問に屈し、再度キリスト教を捨てた。

キリスト教を捨てることを「転ぶ」というが、二度も転んだのは、おそらく、このトマス荒木ぐらいのものだろうか。

康男は、トマスについては卒論で展開しようとする論旨とは直接関係ないのだが、なぜか気になって仕方がない。また、こんな男のことなど触れたくなんかないと思う。ところが、そう思えば思うほど、再三再四、調べている資料の上にこの男が表れてくる。資料に表れるたびに、また自分の意識にのぼってくるたびに、康男は、トマスを否定し続けてきた。

「この男だけはイヤだ、こんな人間だけにはなりたくない」

「こんな男のことなど考えたくもない」

トマスの弱さが苦しかった。そのトマスの弱さを非難するたびに、まるで自分自身が非難されているような後ろめたさを感じた。「自分はちがう」、そう思おうとすればするほど、ますますトマスという人間が嫌いになった。許せなくなった。

康男はトマスを否定することで、自分はちがう、トマスのような人間ではないと思おうとしたのかもしれない。

ローマロケが決まった頃から、康男はよく金縛りにあう

ようになった。ウトウトしかけたとき、何かが身体の上に覆い被さってくるような感覚におそわれ、急に身動きができなくなる。もがこうとしてもどうにもならず、やがて映像までが浮かんでくる。

薄暗い石造りの地下牢のようなところに一人の男が蹲（うずくま）っている。ヨーロッパ人のようだ。男は落ちくぼんだ目で、じっと康男のほうを見ている。

同じような金縛り状態に何度かおそわれた。やがて夢にまで現れるようになった。夢の中で、康男はいろんな町をさまよっている。それはヨーロッパの町並みだったり、中東の乾いた土壁の町並みだったりするが、共通しているのは、どれも無人の町だということ。その町並みをさまよいながら、康男はいつの間にか、地下室へ下りる階段を見つけ、「行きたくない」「行きたくない」と思いながらも、身体は、あの地下牢へと向かっていく。あの男が待っている地下牢へ……。そして、寝汗ぐっしょりとなって目が覚める。

ローマへ来て、仕事の忙しさから、そんなことはみんな忘れていたのだが、今日、ポポロ教会内部の撮影のとき、教会側廊の柱の影に一人の少女の姿を見た。まるで中世の絵画の中から抜け出たような出で立ち。垂れ頭巾が頭を覆い、その白い覆いが整った顔立ちをいっそう引き立てている。

どこかで会ったような、どこかで体験したような感覚。

既視感とでもいうのだろうか。ともかく、あの少女を見てからというもの、またぞろ、あの不安感が再燃した。

## 2

一五八五年　ローマ

この年の四月、ヴァチカンは教皇宮殿の最上階で、一人の老人が息を引き取ろうとしていた。老人は思った。

「八十四年か、思えばよく生きたものだ。ローマ教皇となって十三年、神の僕（しもべ）として、またキリスト教世界の頂点に立って、自分なりにやることはやったと思う。だが本当にこれでよかったのだろうか……。」

教皇は、枕許に集まった枢機卿たちを前に、か細いがしっかりした声で、「自分のようなか弱い人間が、この重任を帯び、今日の今日まで心が揺れない日はなかった。ここに集まった枢機卿の方々にお願いしたい。どうか、自分に対して何か気に障ることがあっても、すべてを心底からぬぐい去り、死を相手に最後の戦いに苦しむ私のために祈ってほしい……」。

そして最後に、キリスト教共和国を枢機卿らに託した。

「私が息を引き取った後は、どんな場合にもその職責を全うするような人間を教皇に選んでほしい」と。

こうして老人は、苦しいながらも、なんとか教皇としての最後の役割を果たし終え、安心したかのように静かに目を閉じた。

　その二時間後、グレゴリウス十三世の崩御が伝えられた。教皇は最後に「日本の少年たちはどうしているだろう」と、実子ソリア公につぶやくように囁き、息絶えたという。老人は、十三年にわたるローマ教皇としての役割から、ようやく解放されたのだ。

　教皇が崩御された。控えの部屋に詰めかけた関係者たちにそのことが伝えられるや、人々の心の中に様々な思惑が駆けめぐった。その多くは次の教皇が誰になるかということに関係していたが、中でもイエズス会総長アクアヴィーバの思いは複雑だった。

　彼が三十七才でイエズス会総長となり、その就任挨拶にローマ教皇を訪ねたとき、グレゴリオ十三世は叫んだ。「若すぎる」と。

　これに対しアクアヴィーバは答えたものだ。

「聖下、ご安心下さい。その点に関しては一年ごとにあらためていきます。」

　グレゴリオはアクアヴィーバの機知を愛した。以来、教皇のイエズス会に対する態度は前にも増して好意的なものとなった。そして四年、日本からの少年使節を迎えるに当

たって、教皇のイエズス会への期待と信頼はピークを迎え、この年の一月には、イエズス会に日本布教の独占が許されるに至った。

そのグレゴリウス教皇が、あっけなくこの世を去ってしまった。

日本から来た子供たちを葬儀に立ち会わせるかどうか。

伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアン。それに付き添いのドラード少年。

アクアヴィーバの心の中に、五人の少年たちの顔が浮かんだ。長旅の疲れから病に臥せっている中浦ジュリアン、その看病をしているドラード少年。また今頃は、メスキータ神父に引率されローマの七つの聖堂を巡歴しているだろう三人の少年たち。彼らはこの訃報をどうとらえるだろうか。

少年たちは、遠く日本からメスキータ神父に率いられ、日本の使節団としてこのローマへとやってきた。もっとも、使節と言うより、イエズス会が東洋布教の成果をアピールするために仕組んだ一大デモンストレーションと言ったほうが適切ではあったろう。

当時、日本にはまだ統一政権が確立していない。名門ではあるが、落ちぶれた大名の子供たちを日本の貴公子に仕立て上げ、日本にヨーロッパの文化とその力を紹介すると

ともに、ローマに対しては、イエズス会の東洋での布教活動の成果を認めさせ布教のための資金援助をあおぐ。

天正遣欧使節は、イエズス会日本巡察士バリニャーノ神父によって、このようにして計画され、大友宗麟(おおともそうりん)ら九州諸大名を名目人に、当時、ようやく日本の中央を制圧した戦国大名織田信長の支援を得て実行に移された。

ローマのアクアヴィーバ、日本のバリニャーノ、この二人の働きにより計画は見事に成功した。教皇グレゴリウス十三世は、日本での初穂にことのほか満足し、少年使節たちを公式謁見し、その席上、日本布教に対する全面的援助を約束した。そればかりか、病に倒れた副使・中浦ジュリアンの身体をことのほか案じ、彼だけを非公式に謁見し、その労をねぎらったほどである。

が、その喜びもつかの間、教皇が危篤に陥り、あっという間に他界してしまった。

次の教皇は誰か？　次教皇が誰になるにせよ、果たしてイエズス会の日本布教に対し同じような援助を取り付けることができるかどうか。イエズス会が日本布教を独占していることに批判の声も強い。これを機に、他修道会が動き出すことは間違いないだろう。しかし、いずれにせよ少年使節たちを葬儀に列席させることは、教皇庁の日本への布教援助を再確認してもらう意味からも、必要なアピールには違いない。

しかし一方で、日本布教区と少年たちのこれからを思えば、参加させるべきではない——そんな思いも出てくる。バリニャーノ神父がメスキータに厳しく注意したことも「見るべきものだけを見せよ。好ましくないものは見せるべきではない」とのことであった。
「この葬儀、何が起こるか知れたものではない。」
　アクアヴィーバの不安は、故なきものではなかった。

　この頃、ローマは反動宗教改革のまっただ中にある。かつて、ルネサンスという巨大なうねりが、ヨーロッパ中を飲み込み、神に頼るしかなかった中世の無力な人間が、やがて、人の力を信じ、その力を誇るようにさえなった。神の荘厳を現せるのは、他ならぬ人間の力だと、建築や芸術に力を競い、あげくは自然の神秘を探り、その中に神の秘密をも解き明かそうとした。結果、占星術や錬金術、魔術の研究が盛んとなり、人々はギリシャの哲学を求め、貪欲にユダヤやエジプトの神秘主義をも吸収しようとした。
　俗に言う人文主義者（ユマニスト）たちの登場である。
　この人文主義の流れから、やがて宗教改革が芽を出すに至る。教会の腐敗を攻撃し、人は教会によってではなく、神の言葉「聖書」によってのみ救われるのだと、当時発明された印刷機と印刷術によって、ルターはその主張を展開していった。宗教改革が、カトリック側からの弾圧を弾き

返し、当時のヨーロッパ世界に浸透していった背景には、この印刷術の普及を無視することはできない。もし印刷機が発明されていなければ、ルターは早晩、異端者として火炙りになっていたことであろう。

さて、カトリック側からも、この宗教改革に対抗する、いわば反動宗教改革ともいうべき動きが起こってくる。ルネサンス時代のローマ教皇や枢機卿たちの中には、ルネサンス芸術の愛好家やパトロンが数多く存在し、ユマニストを自称する研究者たちさえ存在した。それが十六世紀なかば、反動宗教改革の時代を迎えるや、一転して暗い色調が漂い始める。

一五五五年ローマ教皇となったパウルス四世から始まり、ピウス四世、ピウス五世、そしてグレゴリウス十三世と、どの教皇をとっても、厳格にして頑固、生真面目な正当信仰の遵奉者であり、ローマ異端審問所の絶対的な支持者たちばかりだ。

なかでもパウルス四世は、「美よりも徳こそが教皇たる者の関心事であるべきだ」として、その治世には、性的不行跡はこのうえない残忍さで罰せられ、男色者は生きながら焚刑に処せられた。この厳格さが、ローマの市民たちにひどく嫌われ、死去に際しては、教皇の彫像は頭部が叩き落とされ街路を引きずり回されたあげく、テヴェレ川に投げ込まれたという。また、異端審問の行き過ぎを非難されて

いたドミニコ修道会は凶暴な群衆によって襲撃を受けた。
　後に続く教皇たちも似たり寄ったり、ピウス五世は無神論者の追及と処罰に熱心で、ローマ異端審問所の大審問官から教皇に就いた人物で、彼の教皇就任後、異端審問所の権限は増大、その活動範囲は拡大して、その支配がおよばないところは皆無となった。
　幸い、ピウス五世の葬儀は事なきを得たものの、ローマ市民の不満が、いつ、はけ口を求めてあふれ出すか知れたものではない。彫像が破壊されるなどましなほうで、遺骸を放り出された教皇さえいたぐらいだ。
　そこでグレゴリウスはといえば、一五八二年のグレゴリオ暦の制定や、また教会の世界的伝道の功績者（ローマ学院の創立）であったとはいえ、パウルスに勝るとも劣らない正当信仰の遵奉者ぶりであり、決して市民の評判は芳しくない。それより何より、ピウス四世以来二十五年間、何もなかったことのほうが不気味なのだ。
　今回の葬儀では、何が起こるか知れたものではない。その席へ日本の少年たちを立たせて、その席上でもし不測の事態が起これば……アクアヴィーバは思った。日本の少年たちを、この時期、ヨーロッパに連れて来たことが果たしてよかったのかどうか。宗教改革を巡ってヨーロッパは揺れに揺れている。新教側はカトリック教徒を火炙りに、カトリック側はプロテスタントを火炙りにする。フランスで

はユグノー教徒の大虐殺（聖バルテルミーの虐殺）が起こり、グレゴリウスなどは、それを記念してメダルまで出し、大声でテ•デウム（感謝の聖歌）まで歌い出す始末。そんな中、ローマの市民たちは、宗教的正義などというものは、端から信じていない。厳しすぎる教皇庁に対し不満や反発を募らせるばかりだ。

少年たちを葬儀の場に立たせることは、一歩間違えばキリスト教世界が抱える矛盾に、少年たちを直面させることになるかも知れない。バリニャーノは言った。

「見るべきものだけを見せよ」と……。

3

一九六八年四月　ローマ

後ろの席に座っている藤プロデューサーが体を乗り出し、康男をつついた。

「オイ、日本語の説明がついてるはずじゃなかったのか！」

バスの前では、明るい紺のブレザーを着込んだ青年が、陽気な英語を振りまいている。

時折起こる笑い声。康男の回りでは日本人通訳だけが笑っている。

康男と藤プロデューサーが同時に日本人通訳を睨み付け

た。

　日本人通訳は、肩をすくめるばかり。

「なにせ、イタリアは日本のようにきっちり行きませんので……」

「次の停車地で確認してよ。日本語のガイド付きは、英語の倍額料金だよ。」

　康男がブツブツ言う。藤プロデューサーも何か言いかけたが、軽い舌打ちだけを残して自分の席に戻った。

　やがてバスはサン・ピエトロ寺院へと到着した。

　バスがヴァチカンの専用駐車場に停車するや、康男は日本人グループの先頭をきって降りたった。

　と……いきなり後ろから

「日本語コースの方ですね？」という女性の声が追いかけてくる。

　振り向くと、陽気そうなイタリア人女性がこちらに近づいてくる。

「あなた方、間違えました。イングリッシュコースのバスに乗りました。」

　そして後ろのバスを指さし「これからは、あのバスに乗ってください。ほら、日本語でローマ・ヴァチカンコースとフロントガラスに張り紙がしてあるバスです。」

達者な日本語だ。

彼女の背後には、新婚旅行だろうか、若い日本人カップルや、勇敢な日本のおばさんたちのグループが、しっかりと固まって控えている。

なるほど、これで一つ問題が解決したわけだ。

早速、康男等は、その女性の案内に従ってサンピエトロ寺院のエレベーターに乗り屋上まで上がった。サンピエトロからローマの街を一望すると、その景観にクリスチャンならずとも胸が熱くなる。中へ入れば入ったで、ミケランジェロからベルニーニに受け継がれ完成したドゥオーモ内陣の迫力に直撃される。そのあまりの存在感の前に、ガイドの説明も薄っぺらに聞こえる。

上を見れば巨大なドゥオーモが覆い被さり、下を見れば広大な礼拝堂を、豆粒のように見える観光客の群が行き来している。

（ローマだ、俺は今、かつての世界の中心にいるんだ！）

康男はドゥオーモを囲む回廊を一巡すると、クラクラする頭を一振りし、高ぶる心に突き動かされるままに、遙か下に広がる礼拝堂に向かって駆け降りていった。

いち早く下へたどり着いた康男は、礼拝堂の片隅に小さな入り口が開いているのを見つけた。見れば地下へ降りていくコースのようで、先ほど一緒だったアメリカ人観光客

たちが、整列して中へと吸い込まれていく。
　ローマ教皇たちが眠るヴァチカンの地下墓地へとつながっているのだ。
　康男は、その光景に足がすくむ思いがした。
（これって何だよ。イヤだよ、行きたくないよ。まるで夢と同じじゃないか。行きたくないよ。）
　康男の足は、彼の思いとは裏腹に、アメリカ人観光客の後ろに付くや、地下墓地へと向かって早くも歩き始めていた。

　降りきったところから、かつて、このヴァチカンの主であった教皇たちの石棺が通路の片側脇に続いている。康男にはどれが誰のものなのか分かる術もない。中に眠る教皇の姿を蓋にレリーフした豪華な石棺があるかと思えば、飾りも何もない粗末な石棺もある。石壁には、ここがかつてローマの闘技場であったことを示す表示があり、ところどころ、その当時のままの石壁を残して展示している箇所もあった。

　いきなり照明が消えた。
　キャーッという叫びは、アメリカ人女性だろうか。別な方角からは「ドン ムーブ！」とか、「ステイクール！」というアメリカ人男性の声が響いてくる。
　……停電だろうか。

しかし、こんな闇は初めてだ。墨を流したように、まるで何も見えない。
「ドントムーブ」なんて言われなくたって、こんな地下迷宮で灯りを奪われたら、動こうにも動けるわけがない。動くこと自体が恐怖なのだから……。
　康男は金縛りにでもあったように、ひたすらじっとしていた。動けば、自分も含めて何もかもが消えてしまうようで、訳もわからず怖かったのだ。

　どれぐらいそうしていただろうか。
　気が付けば、いつの間にか、ざわめきが消えている。
　光と一緒に音までが深い闇の底に引きずり込まれてしまったかのようだ。
　音ばかりか、周りからは人の気配までが消えてしまっていた。
　闇の底にただ一人取り残されたような感覚。
　――怖い、本当に怖い。
　声を出したいのに、喉がカラカラに干上がったみたいで声を出すことも出来ない。
　こんなことなら、おとなしくみんなと一緒にいれば良かった。

　その頃、上の礼拝堂では（と言っても、三八〇年前のこと

だが)、グレゴリオ一三世の葬儀の準備が着々と進んでいた。

一五八五年四月　サン・ピエトロ寺院

教皇の遺体は、教皇庁式部官の指示で、サラ・デル・パパガッロ（おうむの部屋）と呼ばれる一室に移された。遺体は、ここで近侍の人たちの手で洗われ、香り高い香水で清められる。ついで高価な香油と香膏とが塗られ、そのうえで、教皇の喪服である赤い祭服が着せられる。肩には、パリウムといわれる、権威のシンボルである黒い十字架の付いた白い麻布の肩かけ。頭にはミトラをかぶり、三枚の赤い枕が使われる。すべての準備が整うと、遺体は、棺台に載せられ、教皇礼拝堂に運ばれる。礼拝堂では、参集した聖職者たちによって祈祷が捧げられ、その後、さらに大きな行列がつくられ、遺骸は盛儀を尽くしてサンピエトロ寺院へ移されるのだ。

ここでも祈祷や行願の儀が行われ、遺骸は、中央祭壇の前に柩から出されて安置される。一般の人々に、拝謁し、恭敬し、接吻することを許すためだ。そして、この日から九日間、サンピエトロ寺院は、あらゆる場所が、グレゴリオ十三世の紋章で飾り立てられる。寺院内には、故人を顕彰する祈念碑のような墓標が建てられ、その周囲には、式部官および一般の官職人が、長い大礼服や喪服を着用して立つ。そのほか、参

列するすべての人々に、真っ白な蝋で作られた炬火が配られ、灯がともされる。葬儀は、すべてが厳粛で粛々として進められ、その様子は神秘的ですらあった。

しかし、見かけとは逆に、関係者たちの心は、これからの九日間を思うと一時たりとも休まることがなかった。たまりたまった民衆の不満がいつ爆発するか、そのとき、民衆は暴徒と化し、ヴァチカン宮殿の略奪者となるだろう。聖職者たちは、ただひたすら事なきを念じながら、式を進行することとなる。

葬儀の第一日目、教皇の崩御以来、スイスの衛兵に守られ閉じられてきた大聖堂の扉が、一般告別のために開けられた。

青・黄・赤のユニフォームを着用し、まるでおとぎ話の中から抜け出てきたかのようなスイスの衛兵達の表情がこわばる。彼らは、その見かけとは逆に、世界でもっとも獰猛（どうもう）と言われた傭兵集団だ。スイス傭兵の残忍さは、たとえば腕輪を強奪するのに、相手を脅して腕輪をはずさせる等という回りくどいことをせず、いきなり相手の腕ごと切り落としてしまう。そんな噂が立つほど、スイス傭兵のやり口は荒っぽかった。国の貧しさから来るものだろうが、またそれだけに勇猛で命を惜しむことがない。この勇猛さが買われ、ユリウス二世の頃からヴァチカンの衛兵に採用

され、以来代々、スイス傭兵が、教皇の身辺警護の任に当たることとなった。ちなみに、その派手な制服はミケランジェロによってデザインされたもので、制服の青・黄・赤はメディチ家の色を表していると言われている。

　しかし、そんなスイスの衛兵たちも、この日ばかりは浮き足立って見え、合唱隊の歌声も心なしか駆け足気味に聞こえる。

　やがて、一人の枢機卿が中央祭壇に立った。

　グレゴリウス十三世の追悼演説を行うためだ。

　彼の名は、アレッサンドロ・オッタヴィアーノ・デ・メディチ——この時、四十九才。初代フィレンツェ公アレッサンドロ・デ・メディチの庶出の子と言われるが、父に似ずその闊達な性質は、むしろ大叔父にあたるロレンツォ豪華王を思わせるものがある。特に外交に力を発揮し、グレゴリオ十三世の時代、ローマ駐在フィレンツェ大使としてフィレンツェとヴァチカンを結ぶ絆として活躍したばかりか、グレゴリオの教皇特使として新旧キリスト教の対立に揺れるフランスに派遣され、ローマ教会の秩序を回復することに力を注いだ。このとき、同じメディチ家出身のフランス皇后カトリーヌ・ド・メディチの信任を得た。

　やがてヴァチカンに戻ってきた彼の存在は、いわば片方に大国フランスの思惑、片方に都市国家フィレンツェの意

向を受け、本人の意思に関わらず、陰に陽に教皇庁に大きな影響力を持つ存在となっていた。

　アレッサンドロは思った。
「随分と集まったものだ。しかし、ここに教皇の死を悲しんでいる人間がどれほどいるだろうか。教皇に近い人間は、野心や保身の心を隠しこの葬儀に参列しているし、教皇から遠い民衆は、何か事の起こるのを心待ちにしてここに集っている。」
　彼は、グレゴリオの事績を語りながら参列者の顔ぶれを見渡した。今朝ほどまでがらんとしていたサン・ピエトロの巨大な空間が、今やおびただしい人の波で埋め尽くされている。まず式部官はじめ各国使節や貴族たちの見知った顔ぶれが占め、次第に名も知らぬ民衆がそのかたまりに混じり、後ろのほうは顔も判然としない人の群が、聖堂内から扉の外のサンピエトロ広場へと溢れだしている。
　アレッサンドロは参列者席の前方に目をやった。そこには正装した日本の少年たちの姿があった。少年たちはメスキータ神父に伴われ、ちょうど式部官たちの列から使節団の列へと移っていくあたりに沈鬱そうな表情で直立していた。
「少なくとも、教皇の死を悼む人間がここにはいた……」
　アレッサンドロは思った。そう思って四人の少年たちの

うち一人が欠けていることに気付いた。
「ジュリアンは、まだよくないのだろうか？」

彼が最初に日本の少年たちと出会ったのは、フィレンツェの名門メディチ家が、少年たちの歓迎舞踏会を開いたその席上だった。
少年使節の一行がヨーロッパの土を踏んだのは一五八四年八月のこと。二年半に及ぶ旅程を経て、使節一行はリスボンに第一歩を記し、その後、各地で歓迎を受けながら陸路イベリア半島を横断、アリカンテからは船で地中海を越え、八五年三月、ようやくイタリアはリボルノ港へと上陸した。
ところで当時イタリアは、北にベネツィア共和国とミラノ公国、南にナポリ王国とローマ教皇領、そして、その中央にフィレンツェ＝トスカナ公国が位置しており、フィレンツェの地理的な位置は、そのまま政治的な位置を表していた。イタリアにおける都市国家間の対立は、スペインやフランス、それにイギリスという大国の出現で緩和に向かっていたとはいえ、イタリアにおけるフィレンツェは、北と南のそれぞれの「扇の要」とも言える役割を果たしており、そのフィレンツェを動かしているのが他ならぬメディチ家であった。
かつてコジモ・デ・メディチによって隆盛を見たフィレ

ンツェとメディチ家であったが、数々の政変を経て、今やフィレンツェ共和国もトスカナ公国となり、その君主もメディチ家直系からコジモの弟脈へと移っていた。

アレッサンドロは、そんなトスカナ公国が生まれようとする激動期、初代フィレンツェ公アレッサンドロ・デ・メディチの私生児として生まれた。母親は分からず、父は独裁と性的乱行の末に暗殺された。アレッサンドロの私生児たちを引き取ったのは、ハプスブルグから嫁いできたマルガレーテ公妃だが、彼女は未だ十六才で未亡人となり、やがて父カルル五世に言われるまま、オッタビアーノ・ファルネーゼと再婚するに至った。

その際、前夫アレッサンドロの残した何人かの私生児を教会に預けたのだが、まだ二才になったばかりの彼だけは、アレッサンドロ・オッタビアーノ・デ・メディチというたいそうな名前と共にフィレンツェの育児院に預けられることとなった。彼の素性を表す名前を与えること、それが、十六才の少女に唯一できる愛情であった。

そして今、トスカナ公国はフランチェスコ一世の時代を迎え、アレッサンドロも枢機卿として、ローマとフィレンツェの橋渡しをする存在となっている。

この時期、少年使節一行がイタリアに上陸したのだ。

使節一行はリボルノへ到着するや、このフランチェスコ一世によってピサに招待された。バリニャーノ神父は、使

節一行が教会以外の施設に泊まることを堅く禁じていたが、フランチェスコ一世はそれを認めず、自らの宮殿に少年たちを宿泊させ、
「かくのごとき日本のプリンス、かくのごときキリスト教徒をイタリア全王侯中で最初に迎え得ることは、デウスの格別の恩寵である」と、自ら宮殿の階段を中程まで降りて出迎えるほどの歓迎ぶりであった。あげくは歓迎の舞踏会やら、歓迎の鷹狩りやらと、「ローマへ一刻も早く」という教皇の意向に反し、ピサに五泊、フィレンツェに七泊という思わぬ長逗留となってしまった。その際、アレッサンドロは、ローマ教皇とフランチェスコ一世、両方の意向を受け、ピサでの歓迎舞踏会に出席することになったのだ。

今、グレゴリオ一三世の葬儀の席で、こうして少年たちの顔を見ていると、あの舞踏会のおり、ビアンカ公妃のリードで顔を真っ赤にして踊った少年たちの顔が思い出される。アレッサンドロは、口許がゆるむのを隠すかのように、グレゴリオ一三世がいかに東洋への布教に力を注いだかを説き、「その努力の初穂こそ、ここで教皇の死を悼む純粋な日本の少年たちなのです」と、改めて少年たちを聴衆に紹介し、言葉を結んだ。
と、その時だ。聖堂の入り口で小さないざこざが認められた。

アンブロンシェと呼ばれる黒の喪服にすっぽりと身を包んだ、いかにも不気味な二人連れが、何とか聖堂内に入ろうとして、前にいた職人風の男と諍いを起こしたようだ。職人風の男は、激しく抗議するが、二人の男には聞こえないのか、それとも意味が分からないのか、顔を見合わせるばかり。男は無視されたと思い、声を荒げ、腹立ちまぎれに一人の頭巾を外そうとした。男は必死で頭巾を押さえた。

……が、一瞬、頭巾の下に見慣れぬ東洋人の顔が現れた。

驚いた職人の動きが止まった。

それは修道院で休んでいるはずの中浦ジュリアンとドラード少年の二人だった。ジュリアンには教皇の死も、葬儀のことも伏せられていた。知ればどんな無理をしてでも参加するに違いない。少年たち一行は、幸い熱のため寝込んでいるジュリアンを残し、葬儀の席へと赴いたのだった。

しかし、まわりの様子から、ジュリアンはおおよそのことを察していた。察していて気づかない振りをしていた。みんなに自分のことで煩わせるのを極力避けたかったし、メスキータ神父に話しても反対されるのが分かっていたから……。

「ジュリアン、最後まであなたの身体を案じていたグレゴリオ法王様の気持ちをどう考えているのですか。そんな身体で無理に葬儀へ出ることが法王様の心にかなうことでしょうか？」

「僕は侍だ。グレゴリオ様のご恩には、自分の命に代えても応えねばならない。メスキータ様には、侍の心が分からないんだ。」

　ジュリアンは、みんなが出かけてしまうと、看病のため残ったドラードを問いつめ葬儀のことを確認した。

「ドラード、お願いだ。僕をサン・ピエトロへ連れていってほしいんだ。どんなことをしても僕はグレゴリオ様の葬儀には出なければいけない。メスキータ様には分かってもらえないと思うけど、同じ日本人の君には分かるはずだ」

　ドラードは、葬儀のため人気のなくなったイエズスス会本部を探し回り、聖具室から二着のアンブロシェ（顔まで覆う黒の喪服）を見つけてきた。おそらく宗教劇にでも使うために用意されたものだろう。これに身を包めば、日本人だということは分からない。ドラードは、足取りのおぼつかないジュリアンを抱えるようにして、この葬儀場に望んだのだった。

　サン・ピエトロの入り口は人であふれかえっていた。ドラードは何としてもジュリアンを聖堂の中へ入れてやりたかった。死に神を思わせる黒い二つの塊が、必死でサン・ピエトロの入り口を目指す。そんな不気味な二人連れに恐れをなし、人々は道をあけ、大慌てで十字を切った。こうして二人は何とか聖堂の中へと入ることができたのだが、そのとき、この事件は起こった。

あわてて頭巾をかぶり直したジュリアンは、ドラードと二人してその場から離れようとする。
　それをつかまえようとする男。
　頭巾の中に隠された幼い顔に安心したのか、同情したように人々が叫ぶ。
「放してやれーッ」
　別の声が上がった。
「何が不謹慎だ。利いた風なこと言いやがって！」
「グレゴリオの野郎こそ不謹慎だよ！」
「そうとも、あんな教皇死んじまってサバサバするよ。地獄に堕ちりゃいいんだ。客取らずに、あたいらにどうして生きろって言うんだよ。教会の奴ら、陰でコソコソあたいらのこと抱くくせに……何が不道徳だよーッ」
「そうだ、そうだ……」
　ジュリアンのことが引き金となり、サンピエトロの入り口付近が騒然としはじめた。あわや暴動に発展しかねない勢いだったが、しかし、それも一時のことだった。アレッサンドロ枢機卿の手配により、教皇常備軍であるスイスの衛兵が随所に配置され、騒ぎの原因となった人物はたちどころに隔離するよう手配が取られていた。
「騒ぎを大きくしてはならない。」
「騒ぎを起こした者、騒ぎを煽動しようとする者は、すぐ

他の参列者から切り離すこと。」
　それが、アレッサンドロ枢機卿がスイス衛兵隊に与えた指示だった。そのために衛兵たちは聖堂内の側廊や四十五カ所に及ぶ祭壇ぞいに配置され、聖堂内のどこで騒ぎが起こっても、すぐに対処できる手はずになっていた。
　アレッサンドロ枢機卿の手配が功を奏し、この小さないざこざを除いて九日間の葬儀期間中、ついに暴動らしい暴動も起こらず、グレゴリオ一三世の遺体は、無事サンピエトロの地下埋葬所へ安置された。またスイス衛兵隊に保護されたジュリアンとドラードの二人は、アレッサンドロ枢機卿の配慮により、イエズス会修道院へ無事戻され、すべてがなかったこととして処理された。そればかりか、ジュリアンの気持ちを察し、グレゴリオ一三世の葬儀には、日本からの使節全員が参加したことが、公式記録にしたためられた。

　事件のあった夜、ドラードはジュリアンにそっと囁いた。
「ローマの人は、教皇様を信じちゃいないんだね……」

　その頃、グレゴリオ一三世の棺が、この地下墓所に運び込まれ、身動きのとれない康男の前を音もなく通り過ぎていった。

## 4

　四月も後半にかかろうというのに、ローマはまだ冷たい空気に包まれていた。コンクラーベ（枢機卿会議）の会場に向かう枢機卿たちの列から白い息が立ち上っている。
　九日間にわたる葬儀が終わり、それに引き続き新教皇を決めるための枢機卿会議が開催されようとしている。会場となるシスティナ礼拝堂に、教会の高位聖職者である枢機卿たちが集められ、枢機卿間の選挙によって新教皇が決められるのだ。会場となるシスティナ礼拝堂は新教皇が決まるまで封印され、誰一人として会場への出入りは許されない。この間ヴァチカンは、自国の枢機卿を新教皇にという各国の思惑や個人の野望が入り乱れ、祈りの場から政治的掛け引きの場へと一変する。

　この日、アレッサンドロ枢機卿も、コンクラーベ会場に入ろうとする枢機卿たちの列の中にいた。
　彼が会場へ入ろうとしたときだ。目の前で一人の老枢機卿が激しく咳き込み、思わず扉の前でしゃがみこんでしまった。アレッサンドロはその老人の背中を撫でながら、
「フェリーチェ様、しっかりしてください。死ぬには早すぎますぞ。」

老人は、アレッサンドロに顔を振り向けると、苦しそうに、
「おー、アレッサンドロ殿か。やさしいお言葉じゃが、ご覧のとおり、もういつお呼びがかかっても不思議はない状態でな。また準備もできております」
老いたフェリーチェには、それだけ言うのがやっとだったのか、そこまで言うと、また苦しそうに咳き込み始めた。
コンクラーベに集まる投票権のある四十二名の枢機卿のすべてが、この様子を見ていた。そして、皆が皆、彼が今にも血を吐いて倒れしまうのでは……そんな思いを持った。と同時に、ある一つの思いを胸に抱いた。グレゴリオ十三世の死があまりにも急すぎたのだ。日本の少年使節たちの謁見——ローマはその行事に沸きかえり、教皇は、あの華やかさ、あの明るさを、まるで一人で享受しているような喜びようだった。それが、こうもあっさり死んでしまうとは……。各国の思惑も、個人の野望も、形にするには今少しの時間と調整とが必要だった。そこで誰もが思った。
「フェリーチェなら、もう永くはないだろう。政治的な色も背景もなく、時間稼ぎには格好の存在だ……」と。

教皇選挙が開かれている間、サン・ピエトロ広場は新教皇の誕生を待つ人々であふれかえる。そこには会場内を支配したと同じ野心や思惑があり、少しの毒を含んだ無責任な好奇心があり、そして大小さまざまな信仰心があった。

そんな中に、メスキータ神父に率いられた日本の少年たちの姿もあった。
　メスキータは思う。最悪の場合、この選挙の結果で、イエズス会のこれまでの努力が水泡に帰すかも知れない。イエズス会の東洋布教独占に対する他修道会の批判の声は高い。特にフランシスコ会やドミニコ会の修道士たちは、布教権をめぐって何かとイエズス会と対立するところが多い。もしフランシスコ会やドミニコ会の人間が新教皇に選出された場合、イエズス会の東洋布教独占にヒビが入ることは間違いないだろう。
　そんなメスキータの思惑をよそに、「教皇様はどんな風に選ばれるんだろう」「会場の中はどうなっているのだろう」「どんな方が教皇様に選ばれるんだろう」と、五人の少年たちの心の中は、そんな素朴な好奇心で溢れかえっていった。
　少年たちの物問いたげな眼ざしに押され、ため息とともに、メスキータ神父が口を開いた。
「教皇様の選挙では、枢機卿お一人お一人が一票の投票権を持ち、投票用紙に思い思いの名前を書かれます。記入された用紙は、会場の前に置かれた投票壷の中に入れられます。得票数が三分の二になるまで投票は繰り返され、その都度、投票用紙は暖炉にくべられるのです。決まらなかった場合は黒い煙を、新教皇様が決まった場合には白い煙が……ほら、あの辺りに煙抜きがあって、そこから出るよう

に工夫されているのです。」
　メスキータ神父の指さす方向を見ながら、
「アレッサンドロ様も、あの会場の中におられるのですか？」
　唐突に、中浦ジュリアンが口を開いた。教皇葬儀のとき、病を押して密かに参加したジュリアンをかばい、誰にも知られることのないよう、馬車でイエズス会まで送るよう手配してくれたのがアレッサンドロ枢機卿だった。騒乱の引きがねにもなりかねなかったのに、そのことをとがめる訳でもなく、表ざたにする訳でもなく、ただ「体を大事にするように」と熱に震える体にローブを羽織らせてくれた。
「もちろん、アレッサンドロ様もおられます。」
「新しい教皇様には、アレッサンドロ様になってほしいなあ。」
「ジュリアン……それは神様の決められることですよ。」
　そのときだ。「メスキータ様、メスキータ様」と呼ぶ声がある。声のほうを見ると、一人の修道僧が一通の手紙を手に「メスキータ様、リスボンのロヨラからです。リスボンからです」と、人ゴミをかき分けながら近づいてくる。
　手紙は、リスボンにあるサン・ロケ修道院から、日本人修道士ロヨラにより出されたものだった。
　ロヨラも天正遣欧使節の随員としてヨーロッパの土を踏んだのだが、彼には使節の少年たちとは別の役割があった。

リスボンにとどまり、その地で印刷術を習得すること。それと共に、日本へ持ちかえるべき印刷機の選択に当たること、それがロヨラに与えられた役割だった。

　メスキータ神父が封を開けると、印刷術習得の成果を示すべく、日本語をローマ字に置き換えて印刷したロヨラの手紙が出てきた。恐らくは練習のために組んだ版を刷り上げたものだろう。

「これはロヨラさんが印刷したものです。」

　メスキータは、それを広げてみんなに見せた。

　みんなは、呆然としてそれを見つめた。有馬のセミナリオでローマ字は習ったものの、それを同じ仲間が、自分の伝えたい思いを活字として印刷している。

「なんて書いてあるんですか？」

「マルチノ、読んでごらんなさい。」

　メスキータの差し出す手紙を、原マルチノが受け取った。

　読み進めるにつれてマルチノの目が輝きだした。

「マルチノ、なんて書いてあるんだ。早く話せよ。」

「印刷機購入の目処が着いたようです。手紙によると、商売がうまくいかずリスボンを逃げ出した印刷商がいるようで、その残された印刷機を安く買うことができるようになったとあります。それも二台、おまけに活字のセットまで三セットも手に入るようです。」

「もう手に入ったのか？」
「まだのようです。裁判所の手続き的なものがあるようで……それでも、私たちがリスボンに帰ってくるまでには何とかなりそうだって……。」
「俺にも見せてくれよ。」
　千々石ミゲルが手紙を取ろうとしたときだ。あたりが騒然とし、集まった人々の中から喚声があがった。
「白い煙が上がっています。」
「新しい教皇様が決まったんだ……！」

　リスボンの印刷業者は、商売がうまくいかず逃げ出したわけではなかった。異端の密告で工房が捜索され、印刷原稿の中からルターの著「キリスト者の自由」のラテン語原稿が発見されたのだ。七十年前、宗教改革の発端となった問題の書であり、このため印刷の親方や逃げ遅れた職人たちが捕らえられ、厳しい拷問の末、異端のかどで火あぶりにされた。
　ところで日本の少年たちが喜んでいる問題の印刷機は、このとき、工房から没収された印刷機で、親方や職人たちと共に燃やされる筈だったのを、イエズス会の働きかけで日本に渡ることになったものだ。
　もちろん日本の少年たちは、そんなことは知るよしもない。今の少年たちにとって大事なことは、一体、誰が新教

皇としてあのバルコニーに顔を出すのか……そのことだけだった。サン・ピエトロ広場に集まった人たちの好奇心の渦の中では、それ以外のことはすべてが無意味に思われた。

　しかし、煙が出始めてもう一時間近くにもなるというのに、中央バルコニーはまだ固く閉ざされている。あの煙は間違いだったのか。ひょっとして黒い煙が光の加減で白く見えただけなのかも。
　長い一日が終わろうとしている。陽もようやく翳りだし、同じように人々の好奇心にも陰りが差しだした頃、やっとサン・ピエトロ大聖堂の中央バルコニーの窓が開かれた。
　皆の視線が中央バルコニーに集まる。
「アレッサンドロ様だ！」
　中浦ジュリアンが、うれしそうに声をあげた。
　バルコニーに現れたのは、アレッサンドロ枢機卿だった。彼は集まった人たちを見渡し静寂が訪れるのを待つ。
　やがて静まり返ったサン・ピエトロ広場に、アレッサンドロのよく通るラテン語の声が響き渡った。
「良い知らせがあります。第二二七代の教皇が生まれました。」
　その瞬間、座っていた人々は立ち上り、拍手がわき起こった。修道女たちは互いに喜びの抱擁を交わし、歓声が広場いっぱいにこだました。そして七時二十三分、赤いマント

をまとった枢機卿団と、儀典長の司教に付き添われて、新教皇がバルコニーに姿を現わした。

フランシスコ会のフェリーチェだ。

今にも死ぬかと思われていたフェリーチェが新教皇に選ばれた。時間稼ぎに選ばれたことは誰の目にも明らかだった。ところが……である。新教皇に選ばれた瞬間、今にも死にそうに腰を屈めていたフェリーチェが、背筋を伸ばし大きな声を張りあげ「テ・デウム」を唄い神に感謝しはじめた。先程までの様子とは打って変わって、水を得た魚のように、死にそうなはずのフェリーチェ枢機卿が、活力に満ちあふれた新ローマ教皇としてよみがえったのだ。

集まった枢機卿たちは思った。フェリーチェにいっぱい食わされたと……。

真新しい白の帽子と白のマントも鮮やかに、フェリーチェは、新教皇シクストゥス五世として、やさしい微笑を浮かべながら集まった人々に教皇として最初の祝福を与えた。大聖堂の鐘が鳴り始め、それを合図のようにローマ市内の約四〇〇近くの教会の鐘がいっせいに喜びを知らせ、祝った。

聖なるつむじ風と呼ばれたシクストゥス五世の改革が、今、始まろうとしていた。

◇

　あれはフェリーチェ（シクストゥス五世）が、まだ二十二才の頃だ。彼がシチリアの田舎道を、他のフランシスコ会士たちと列をなして歩いていると、正面から一人の男が近づいてくる。男は列をかき分けるようにして進んでくると、いったい何事かといぶかるフェリーチェの前にひざまずき、
「あなたは、フェリーチェ・ペレッティ・ダ・モンタルト、アンコー村の近くで生まれ、羊飼いをしておられた方……」
　フェリーチェは、男が、てっきり自分の子供の頃を知る故郷の人間だと思った。
「どなただったでしょうか？　でも、どなたにせよ、まずは自分のような若輩の修道士にひざまずくのはやめてください。」
「いいえ、聖下の前ではひざまずかないわけにはまいりません。あなた様は、やがてローマ教皇の座にお就きになる方……」
「………………」
「いぶかるのもごもっともです。私の名は、ミッシェル・ド・ノストラダムス、やがてわが名も聖下の御前に届くでありましょう。」
　男は、それだけ言うと、うやうやしくその場から離れていった。

ノストラダムスが、トゥールーズの異端審問所からの出頭命令を無視し、フランスからイタリアへと放浪している最中の出来事であった。これが、ノストラダムスとシクストゥスの、最初で最後の出会いである。

……が、この日から、フェリーチェの心に大きな野心の灯がともることとなり、その野心が疼くたびにノストラダムスの顔が浮かび上がってくることともなった。

一つの予言によって、フェリーチェの心の中にノストラダムスが住み着いてしまったのかも知れない。

そして今、その野心がかなえられた。

ノストラダムスの名もまた、世に現れ始めていた。メディチ家からフランスへと嫁いだカトリーヌ・ド・メディチスの信任あつい予言者として……。

戴冠式も無事終わり、今日は日本の少年たちが別れの挨拶にくることになっている。シクストゥスは思った。

「こうしてローマ教皇になれたのは、この私が神に選ばれたからだ。決してあの男の予言のせいなどではない。神が私を必要としたからこそ、私は、ローマ教皇の座に就いた。まして異端の臭いをぷんぷん漂わす、あのノストラダムスとは関係のないことだ」と。

「私は神に選ばれたのだ。神は、私に仕事をせよとおっしゃっている。おまえにしかできない仕事をやり遂げるの

だと語っておられる。神が私を必要としておられるのだ……」

「教皇様」
「…………」
「教皇様、日本の使節たちが別れの挨拶に参上いたしました。」
侍従の言葉が、シクストゥスの思いに終止符を打った。

5

ローマのもう一つの顔をご存じだろうか。
我々がカトリックの聖地として、円形闘技場に代表される古代ローマの遺跡都市として、 はたまたファッションやショッピングの聖地として知る以外に、ローマは、その地下にとんでもない世界を抱えている。
たとえば「ローマの休日」で有名な「真実の口教会」。その前柱廊壁に紀元前四世紀頃の下水口の蓋と思われるものが埋め込まれている。このレリーフの顔は、嘘をついた人間の手を噛み切るといわれ、中世に、妻や夫の貞節を試すために使われていた。
正式には、サンタ・マリア・イン・コスメディィアン教会というが、この地下に古代ローマの地下遺跡が広がっている。もともと地下にあったのでなく、古い都市の上に新し

い都市が造成されたため、時代が層を成すことになってしまった。
　コロッセオの西に位置するサン・クレメント教会に至っては、その地下が三層になっており、下へ降りる都度、時代も下っていくという。
　まるで歴史の百貨店——地下二階はミトラ教神殿跡および古代住居跡、地下三階は、ネロ皇帝によって放火されたローマの都市跡でございまーす、と言ったところか。
　ローマには、我々が知らないそんな地下世界が無数に広がっており、そのいくつかが公開されているが、むろん観光ガイドには紹介されていないし、その全貌が明らかになっているわけでもない。
　ローマで地下鉄工事が進められないのは、このためだといわれているし、工事の際に、そんな遺跡にポッカリ出くわすこともあるという。
　ローマの地下迷宮、それは空間的な迷宮を意味するだけでなく、時間的な迷宮を意味するのかもしれない。
　康男が迷い込んだのも、そんな時間の迷宮だったのかも———。

　————金縛りから解放された康男は、思わず闇雲に走り出してしまった。
（あれは何だったんだろう。）金縛りで身動きのとれなく

なったとき、まるでモザイクがかかったような映像が、康男の心の中をぎこちなく動いていった。
　棺をこの地下墓地へ運び込んでくる人たちの行列。
　聖職者と思われる人たちが、両脇に並んだテーブルに向かい合って座っている。
　顔は見えないのだが、なぜか日本人と分かる子供たちの顔。
　そんな映像が、因果関係もなく、康男の脳裏をフラッシュしていく。
　意味のない恐怖が康男にのしかかってくるのだが、身体は硬直状態で逃げることもできない。
　だから、金縛りが解けたとき、何の考えもなく思わず走り出してしまった。
　どれぐらい走ったのか分からない。
　思わず何かにつまずいた。
　低い仕切状の塀にぶつかり、その向こう側に転がり落ちたようだ。
　そこで我に返った。
（落ち着こう。こんな闇の中を走り回ったら、どこへ行ってしまうか分からない。）
　康男は、しばらく動かずその場に座り込んでいたが、
　やがて、仕事用にとペンライトを持ち歩いていることを思い出した。
　胸ポケットへ手をやるが——

（ない！　どこへ行ったんだろう。）

転んだとき、落としたに違いない。康男は手探りで当たりを探すが、見つからない。

次第に焦る気持ちが高じ、またパニック状態に陥ろうとしたとき、手が小さな冷たい感触を探し当てた。

ペンライトがこんなに明るいと思ったことはなかった。

しかし、そのペンライトの明かりに照らし出された世界は、さきほどの観光客のために明るく装われた地下通路とは一変していた。

そこは、地下牢のような閉ざされた空間——正面に、腐りかけた木の扉。右手横に、石の階段が上へと延びている。

階段を上ってみると、石畳の狭い空間がひろがっており、階段はそこから直角に曲がる格好で更に上部へとつながっている。

どうしてこんな空間に落ち込んだのかは全く見当がつかないし、つじつまも合わない。でも、この階段を上がっていきさえすれば、なんとか地上へ出られそうだ。

そう思って上り詰めた石の部屋には、やはり、重い木の扉が立ちふさがっていた。

押してみた。引いてみた。叩いてみた。

そして、叫んでみたが、扉はビクともせず、当たりは物音一つせず静まりかえっていた。

いや、違う。耳を澄ますと、かすかに水の流れる音がする。

康男は、水音に誘われるように、最初の部屋まで降りてきてしまった。

音は、あの腐りかけた木の扉の向こう側から聞こえてくる。

近づいてみると、木の扉には引き手もついていない。中から開けるようにはできていないようだ。指の差し込める隙間はないかと探すのだが、

──あった。

扉の一番下の角が腐っていて、そこから手を差し込める。手を差し込んでおいて、指をかけ、引っ張ってみた。力を更に入れると、バキッと音がし、いきなり扉が内側に開いた。

水音がいきなり大きくなった。

下水道だろうか。水が流れる片側に一人がやっと通れるような狭い通路が付いている。

康男は、ためらいがちに、その通路を水の流れる方向に沿って歩き始めた。

水はテヴェレ川に向かって流れていると思った。なぜか、テヴェレ川に出る直前に地上へ出られるような気がしたのだ。

シクストゥスは新教皇就任に際し、日本の使節たちに拝謁を許し、その席上、日本の教会に対しては全面的な援助を約束した。これによってイエズス会総長アクアヴィーバ

やメスキータ神父の危惧は、ようやくその一端が拭われたことになる。

　四人の使節はローマの市民権を与えられ、その日の午後には教皇から勲章をいただく叙勲式も無事終了した。

　そしてローマを離れる前日、教皇への暇乞いの謁見が許された。

　シクストゥスは、使節に対し、金銀仕立ての刀剣やビロード制の帽子等の贈答品と共に大友・有馬・大村の九州諸大名への正式返書を託し、更に二十年に限り日本の教会やセミナリオに、年額六千クルザードの援助を約束した。

　いよいよ別れ際になって、日本の少年たちを代表して伊東マンショが教皇の数々の好意に礼を述べると共に、リスボンから持ち帰る印刷機と活字セットのことを語った。

「教皇様、おかげで、私たちは印刷機を手に入れることが出来そうです。また仲間の者がリスボンで印刷術も修得しました。これで神の言葉を日本に広めていきます。いつか日本の言葉で、聖書を――イエス様の御生涯を伝えられればと思うのです。」

　その言葉が、シクストゥスの心に一つの衝撃となって走った。

　少し前まで、「聖書」はラテン語以外の言葉に翻訳されてはならなかった。それどころか、聖職者以外の者が「聖書」を書き写すことさえ禁じられていた。

それが宗教改革を経て、ルターをはじめとするプロテスタントたちによって、「聖書」はドイツ語に翻訳され出版された。一部の人にしか伝わらないラテン語でなく、誰にでも分かる母国語で書かれた「聖書」――この「聖書」の翻訳によって、「聖書」が誰にでも読まれるようになったことはもちろんだが、それはドイツ語自体の完成にもつながっていった。

　これに引き替え、カトリック側のラテン語聖書、つまり「ウルガタ」と呼ばれる聖書は、写字生たちの誤写や写し漏れが積み重なり、それが改善されないまま今に至っており、プロテスタントたちへの対抗上からも、早急に改訂版の発行が要求されていたのだ。

　しかし他国語への翻訳ということになると、まだまだ抵抗は多い。そんな中で、シクストゥスは、少年たちの言葉から神の声を聞いたように思った。日本の少年たちの印刷にかける夢を聞きながら、シクストゥスには、その言葉の中に自分のなすべき使命を見いだせたように思えた。

「君たちは神の言葉を日本の言葉に移したいという――

　立派な志だ。世界に神の言葉を伝えるためには、神の言葉をいつまでもラテン語だけの世界に縛っておいてはいけないのかもしれない。

　しかし、だからこそ、その元となる立派なラテン語の聖書を、今こそ完備しなければならない。完全な聖書を世に

残しておくことこそ、私に与えられた仕事のように思う。
　君たち日本の少年が、その使命に気付かせてくれた。」
　そう言ってシクストゥスは、少年たちを一人ひとり抱きしめ、必ず立派な聖書を完成させることを約束したのだった。
　こうして使節一行はローマを離れた。

　それからのシクストゥスは、無我夢中だった。まるで自分の中にある何かの影を追い払うかのように、必死で働いた。
（私は神に選ばれたのだ。ノストラダムスに選ばれたのではない――。）
　シクストゥスは、五年間という在位期間に、サンピエトロ大寺院のドーム建設を完成させ、数百人もの人足を使いオベリスクを現在のようなサンピエトロ広場の中央に移動させ、ヴァチカン図書館を建て、更にはローマの町への給水のため、はるか二十マイルものかなたから谷と丘を抜ける水道を建設するなど、五十年分の仕事をしたと言われている。
　その中で最大の仕事が、ウルガタ聖書、つまり教会が拠り所とするラテン語版聖書の改訂作業であった。
　四世紀、ヒエロニムスの労作とされるウルガタ聖書は、時代が下るにつれ、写字生の写し違い、読み違いが増え、印刷機が登場すればしたで、印刷するごとに、版を重ねるごとに誤字誤植が多くなってきた。宗教改革が始まるや、

プロテスタントは自らの改訂版聖書を持つようになり、カトリックにとっても、信頼に値するウルガタ聖書を持つことが至上命令となっていたのである。

　これをたった一人で行おうとしたのが、このシクストゥスだった。

　在位三年目、学者たちが提出した決定稿が気に入らず、シクストゥスは三百語からなる勅書を発し、学者たちを退け「教会が拠り所とすべき聖書に関する問題を決定するにふさわしい唯一の人間は、教皇、すなわち私である」と宣言した。

　要は学者たちの仕事が気に入らず、シクストゥスは、ほとんど一人でこの仕事に没頭し、わずか八ヶ月で改訂版を仕上げてしまった。

　こうしてできた初稿だったが、フォリオ版（全紙二つ折り版）の初校を受け取った教皇は愕然とした。今までより誤植が多くなり、しかも、聖書の章と句の配列において、おそらく不注意から、すべての章句を落としてしまっていたのだ。

　シクストゥスは時間の浪費を避けるため、みずから訂正作業にとりかかった。インクで小さな紙切れに訂正個所を書き付け、誤植の上に貼り付けていく。印刷業者は次から次と出てくる訂正に、夜を日に継いで働く竜巻スタイルを余儀なくされ、初稿完成から更に六ヶ月を要してこの聖書の改訂作業は一段落を見た。

シクストゥス五世の大勅書は言う。
「充溢せる使徒の力により、ここに宣告し、宣言する。この版は――主からわれわれに与えられた権威によって認可されたものであり、したがって真実かつ合法的なるものとして受け入れられねばならず、公共的ならびに私的な論争、説教、解釈において、疑問の余地なく拠り所とされねばならない」と。

こうして聖書が完成した四カ月後の一五九〇年八月二十七日、シクストゥスは、カピトールの丘の鐘に送られ、この世を去った。天正遣欧使節の少年たち（もう少年とは言えないだろうが）が長崎に帰着した一月後のことである。

その夜、ローマの町の人々の多くは、突然巻き起こった猛烈な嵐に、眠れぬ長い一夜を明かしたという。まさに、つむじ風と呼ばれた教皇にふさわしい幕切れではあった。

# 第二章　消えたシクストゥス聖書

## 6

一六四五年　長崎

九介は不思議に思った。捕らえられてもう一月(ひとつき)になるというのに、ろくに取り調べもされない。捕らえられてすぐ絵踏みの場に引き出されたものの、絵踏みをさせられたわけでもない。

事の発端は、長崎で一人の盗賊が捕らえられたことから始まった。男は観念したものか、四年にわたって重ねてきた盗みの数々を神妙に答えはじめた。記憶は驚くほどに鮮明で、どこで何を盗んだのか、細かな明細まではっきりと覚えており、取り調べの人間が舌を巻くほどだった。そんな盗みの記憶の中に、南蛮菓子を商う店から盗み出した奇妙な書物の記憶があった。屋根裏に隠されていた包みを、何かいわく付きのお宝だと盗み出したまではよかったが、開けてみれば南蛮文字が描かれた分厚い書物。

「あれは南蛮の伴天連のもんに違いなか。どだい、あげなもんを盗んだのが間違いのはじまりじゃった。」

男は伴天連の魔法をおそれ、処分に困って諏訪大社へ捨

てた経緯を事細かに語った。

　この申し述べによって、詮議は、男が盗みに入った南蛮菓子屋「加津佐」におよび、店の主人九介と、その妻千代がキリシタンの疑いで捕らえられるに至ったのだ。

　お白州では、ぐるぐる巻きに縛られた九介と妻の前に、一枚の銅板が置かれた。そこには、幼な子イエスを抱くマリアの姿が彫られている。その時、九介は、
「これで終わった。もう逃げ隠れしなくてもいいんだ」と腹をくくった。
「お姿を踏めない以上、どんなきびしいお取り調べを受けるか知れたものではない。自分にどこまで耐えられるか分からないが、女房と共に、頑張れるだけ頑張ってみよう……」
　そう思った。

　ところが不思議なことに、その日は絵踏みを強要されることもなく、そのまま牢へと移された。それも桜町の牢屋敷ではなく、立山役所の座敷牢に二人して入れられたのだ。きっと他の囚人に教えを説くのを警戒しているのだろう、それぐらいに思っていたが、あれから一月あまり、ずっとそのままなのだ。役人が取り調べに来るわけでもなく、朝夕二度の食事が運ばれてくる以外は、接触してくる者とてない。

　自分でも張りつめた気持ちが次第にゆるんでくるのが分

かる。もしや、捕らえられたこと自体が何かの間違いではなかったのか……。

　しかし、妻は言う。

「お役人方は、こちらの気持ちのゆるむのを待っておられるのです。安心させておいて、急にきついお取り調べをされるに違いありませぬ。おまえ様、何があっても教えを捨ててはなりませぬぞ。夫婦して見事こらえきり、共にパライソへ参りましょうぞ。」

　こんな話をするとき、妻の口調はいつになく厳しくなる。

　九介は南蛮菓子を作らせれば、長崎でも彼の右に出る者はいない。長崎代官村山当安の家に奉公していた頃、当安から戯れにカステラづくりを教えられた。

　村山当安と言えば、持ち前の機知と南蛮菓子いわゆるカステラづくりの技で、肥前名護屋滞陣中の秀吉に取り入り、長崎外町代官の地位まで手に入れた男だ。九介は、そんな当安から手ほどきを受け、持ち前の器用さも幸いして、たちまち南蛮菓子づくりに精通するようになった。以来、当安からも重宝がられ、当安の肝いりで店を構えるまでになった。

　そのとき、「一家を構えるのに女房なしでは」と紹介されたのが、今の妻というわけだ。名は千代、洗礼名をカタリナという。彼女を慕う信徒衆は、「カタリナ様、カタリナ様」と、彼女のことを呼びならわしたものだ。しかし、九介にはそれが何か面はゆく、今も「千代」としか呼ばないし、

自分のことも「ドミンゴ」などと呼ばれるのを嫌う。
　彼女の父は後藤宗因、町年寄り後藤家の縁戚に当たる。キリシタン全盛の頃は、南蛮渡りの印刷術を習得し、長崎にキリシタン版の印刷所を開いていた。あの頃は、長崎外町の代官から内町の乙名衆まで、町中こぞってキリシタンという状態だったが、それだけにキリシタン版の印刷をしているということで、人からは一目置かれていた。それもイエズス会の宣教師たちが、その複雑さゆえにあきらめたという日本語の活字化を、日本人の手で成功させたというのだから、いきおい宗因に長崎中の熱い目が向けられたのも当然のことだった。娘の千代も、幼い頃からキリスト教に親しみ、日本語版の「ドチリナキリシタン（公教要理）」や「サントスの御作業」などは空で暗じているほどで、このため禁教令以降は、ある日本人パードレの薦めもあって殉教の道を選ばず、夫婦共々に隠れとして密かに教えを説いた。
　九介は、そんな千代を嫁にしたのだ。後藤家という名家の出の上に、菓子屋の女房にしておくにはもったいないような美人だった。今でも五十を越えたというのに、何か若やいだ空気を漂わせ、生活を感じさせるところがない。家柄を笠に着ることもなく、普段は至って慎ましやかな質だが、ことキリシタンの教えのことになると人が変わったようになる。このことに関しては九介も頭が上がらなかった。
　たしかに千代の言うように、井上筑後守様が宗門改め役

となって以来、キリシタンに対しても、かつてのような目を覆うようなお仕置きはなくなった。パードレが捕らえられても、奉行所では拘禁するだけで好きにさせておくという。殉教を覚悟していたパードレたちも次第に気がゆるみ、「ひょっとして助かるのでは」、そんな希望さえ持つようになる。そんな折りを見計らい責められると、人というものは弱いもので、少しの拷問でもまいってしまう。

千代のいうように、二人を自由にさせているのも、そのためかも知れない。キリシタンに関しては、殉教者をつくらないこと、それこそ井上筑後守様が長崎奉行所に与えた最優先にするべき方針だった。

「心しなければ……」と、九介は思った。

そんなある日のことだ。役人が二人の着替えを持参し、「後刻、迎えにくるので着替えておくように……」という。

やがて、町着に着替えた二人は牢から出され、役人に導かれるまま、奉行所の裏門を出、近くにある西勝寺という寺へと連れてこられた。役人は若い僧に二人を託すと、あろうことか奉行所へ引き返していってしまった。その僧も、事態が飲み込めず唖然としている二人を庫裡へ案内すると、「しばらくここでお待ちなされ。後ほど、了伯殿からお話があるそうです」と、言い置き去っていった。

## 7

「お久しぶりです」

男は静かに二人の前に座ると、千代を見つめ深々と頭を下げた。

千代は、頭をあげようとする男の顔を覗き込むように見つめた。七十近くにもなるのだろうか、真っ白になった髪は後ろで束ねられ、ひどく老い込んではいるが、穏やかな眼差しにたしかに見覚えがある。右のこめかみに残る引きつったような傷痕は、かつて穴吊りの拷問にかけられたことを物語っている。

穴吊りとは、身体をぐるぐる巻きに縛り付け、汚物を入れた穴に頭を下に吊り下げるという拷問だ。その際、こめかみや耳の後ろに刀で切り傷を付け、血が鬱血して死なないようにする。井上筑後守がキリシタンを転ばすために考え出した責め方で、これにかけられると全身の血が頭に下がり、次第に意識が朦朧とし、やがて頭が割れるように痛みだす。意識が混濁し正常な判断が下せなくなる頃を見計らって、穴の上では鉦を叩くなど大きな音を立て、「転べ」「転べ」とがなりたてる。

「この拷問にかかって転ばなかったやつはおらんぞ。」

「おまえが転んだところで、誰も意気地なしだとは思わん。」

「身体を揺すれ、さすればここから上げてやるぞ。身体を揺さぶるだけでいい。それが転んだ合図じゃ！」
「揺すれーッ、揺すれーッ……」
「転べ、転べーッ」

「トマスさまですか……？」
　その声に、おぞましい記憶がぬぐい去られ、了伯はハッと我に返った。あれ以来、昼といわず夜といわず、あの穴吊りの様子が浮かんできては了伯を苦しめる。
「はい、そう呼ばれたこともございました。……が、今では荒木了伯と呼ばれております。」
「了伯さま……？」
「如何にも、転び伴天連の荒木了伯でございます。」
　三十年まえ、千代に、「死ぬことだけが教えを貫く道ではない、生きて為すことがあるはずです」と、形だけでも絵踏みをするよう勧めた日本人宣教師、それがトマス荒木であった。
　あれから千代の苦しみが始まった。千代は、父やコレジオの人たちが出版したキリスト教書物の何冊かを諳(そら)んじていた。「どちりなきりしたん（公教要理）」「サントスの御作業」「ぎゃどぺかどる（罪人の導き）」「こんてむぷつすむんぢ（世のさげすみ）」……私が死ねば、これら書物と共に、この日本からキリストの教えは絶える。隠れとして生きる人たち

は、私が諳んじる教えを必要としているのだ。
　そのことが千代を支えていた。でも自分は、ただ命が惜しかっただけではなかったろうか。それを——生きて教えを伝える——そんな使命感でごまかしてきただけではなかったろうか。その思いにどれだけ悩まされたか知れない。捕らえられたとき、「やっと苦しみから解放される」、だから、今度こそ決して転ぶまいとかたく心に決めていた。
　千代の表情が思わず厳しくなった。
「トマス様は生きて教えを伝えるよう私を諭されました。教えに殉ずる道は死ぬことだけではないと……。トマス様は一体どのような道を見つけられたのでございますか？」
「…………」
「千代、了伯殿が選ばれた道だ。私たちがそれをどうこう言うべき筋合いではない。」
　九介があわてて千代をたしなめようとする。
　そんな千代と九介の前に、了伯は黙って重そうな油紙の包みを置いた。千代が驚いたように了伯の顔を見る。了伯は大きくため息を付くと、静かにその包みをほどきにかかった。何重にも包まれた油紙がほどかれると、中から大きな文字で「BIBLIA SACRA」と記された一冊の書物が現れた。それは、九介の店の屋根裏から見つけだされたラテン語聖書だった。
「千代殿は憶えておいででしょうか。四十七年前、私がロー

マへ渡った目的の一つが、このシクストゥス聖書を日本へ持ち帰ることでした。」

天正遣欧使節の少年たちがヨーロッパから持ち帰った二台のグーテンベルグ印刷機。以来、この印刷機は、最初は加津佐のコレジオに、後には天草のコレジオに置かれ、この印刷機によって、日本語に訳されたキリストの教えが、またパードレたちの日本語の学習用にと「平家物語」や「太平記」などの日本の古典が、次々とローマ字印刷物として世の中に送り出されていった。やがてローマ字ばかりか日本の文字そのものを活字にしようという動きが、コレジオの教師や印刷に携わる日本人学生たちの中から起こった。

日本語の複雑さ故に活字化は無理だとするポルトガル人やイタリア人宣教師たちの忠告をよそに、日本人スタッフやコレジオの学生たちは必死になって、この目論見にのめり込んだ。

印刷機を持ち帰った遣欧使節の面々、なかでも原マルチノ、中浦ジュリアン、それにローマで金属活字の製造を学んだドラードが懸命に日本語で神の言葉を伝える重要性を説いた。そして西洋印刷物の美しさに魅せられ、コレジオに通い詰め、その習得に当たった千代の父、後藤宗因が中心となってその開発に心血を注いだ。彼らに従う学生の顔ぶれの中に、トマス荒木がいた。千代の兄ミゲルもいた。学生ばかりでなく、日本語と日本文学の教師である不干斎

ファビアンや、ポルトガル人修道士ペレイラもいた。
　ペレイラは人一倍トマスをかわいがった。トマスには、彼がまだ五十を越えたばかりだというのに、もう七十過ぎの老人のように見えた。日本人より巧みに日本語を話すと言われた人物で、子供の頃、リスボンの捨て子院から、東方布教に働くパードレの雑務を助けるためインドへ送られた孤児の一人だった。
　ペレイラは、刷りあがった印刷紙片を整理しながらトマスによくそのときのことを話して聞かせた。リスボンの港に、見送る孤児たちが一列に並び、インドへ旅立っていく仲間のためにわずかな楽器を奏で、束の間の別れを惜しむ。送る者も、送られる者も、二度と会えないことは分かっていた。分かっていながら、「無事に帰ってこいよ」と、秘かに言葉を交わしあった。
　ペレイラは、「今でもあの光景がありありと目に浮かぶ」と、よくトマスを相手に語った。そして、その話をするとき、いつも涙ぐんでいた。その後、急に「いかん、こんなことをしている暇はないぞトマス。ラテン語じゃ、おまえはラテン語を覚えねばならん。日本人の誰より、いや世界中の誰よりうまくラテン語を話すようにならねば……」
　いつも、こうして唐突にラテン語の個人教授が始まった。活字を拾いながら、また印刷紙片を整理しながら……。トマスが仲間の誰よりラテン語に通じていたのも、このペレ

イラの教えがあったからだし、その結果として、日本語版のテキストを収集する目的も兼ねて、トマスがローマへ送られることとなったのだ。

彼らは日本語の活字化を模索しながら、日本語に翻訳するためのテキストとなる原本を求めていた。その第一番は、なんと言っても「聖書」である。彼らは、原マルティノや中浦ジュリアンを通じ、ローマで完全なウルガタ聖書（ラテン語聖書）の改訂が行われていることを知っている。シクストゥスの聖書だ。これを日本語に訳し、日本人の手で造った活字で出版する。

夢は膨らんでいく。

が、イエズス会自体は、このことに対し消極的と言うより否定的でさえあった。日本人の能力を評価し絶賛したザビエルやバリニャーノの時代は終わろうとしていた。むしろ日本人を油断できない野蛮人とする見方がイエズス会の主流となりつつあった。日本人は宣教師とするより、イルマン（同宿）として教会の下働きをさせることが向いている。彼らは野心的でキリストの教えを自らの出世のために利用する。宣教師になりたがるのもそのためであり、彼らには高邁（こうまい）なキリストの教えを理解できない。むしろその奥義を教えれば、野心的な彼らは、キリストの教えをゆがめ伝え、別の宗旨を創りだすことであろう。

これは極端な考え方であり、一方でイタリア人宣教師に

見られるように日本人への好意的な態度もあるにはあるが、イエズス会日本布教区自体が日本人への厳しい風潮の中にあり、日本人会員の不満が常に存在し、ポルトガル系会員と日本人会員の間に軋轢があったことも、また事実である。

したがって彼らの夢に一役買ったのも、イエズス会ではなく裕福な日本人信徒の一人であり、長崎の朱印船貿易家でもある末次興善だった。彼は、ヨーロッパでの情報収集とその情報提供を条件に、イエズス会ではなく、末次家として、ローマへ私費留学生の派遣を申し出たのだ。

「私と、あなたの兄上ミゲル殿が、ローマへの留学生として選ばれました。私はラテン語に精通しているという理由から、ミゲル殿は、お父上から印刷術を習得しているという理由からです。

中浦ジュリアン殿は私に言われました。何としてもシクストゥス教皇様の聖書を日本に持ち帰ってほしいと。」

「……ひょっとして、今まで何も分からずお預かりしておりましたが、これがその聖書でございましょうか？」

今まで黙っていた九介が口をはさんだ。

「そうです。私と、千代殿の兄上がローマへ渡った目的の一つが、このシクストゥス聖書を持ち帰ることでした。しかし、それは嫌でもキリスト教世界の現実と向き合うことを意味していたのです。」

「……トマス様、ご自分の弱さを、キリスト教世界のせいにされるおつもりですか。トマス様の信は、そのようなものに動くような浅いものだったのですか。」
　千代の言葉が急に厳しいものに変わった。
　やがて長い間、諳んじてきた教理入門書「どちりなきりしたん」の一説が、涙と共に彼女の口からこぼれ始めた。
「デウスパーテレの真の御子にておはします神の子、貴きビルゼンマリアの御胎内において、我らが肉体に変わらざる真の色身と、真のアニマ（魂）を受け合わせ給いて、真の人となり給うといえども、デウスにておわします御所は、変わり給うことなく、いつも同じきデウスにておわします也。このビルゼンサンタマリアより生まれ給うを名付けてゼズキリシトと申し奉る也。またこの御出世は人の業をもてのことにあらず。ただスピリツサント（聖霊）の御奇特をもて計らいたもうことなればスピリツサントより宿され給うと申し奉る也……」
「神の子」であると同時に「人の子」でもあるイエスの誕生こそ、「父」と「子」と「聖霊」の三位一体というキリスト教独自の教義の根拠であり、これを過去のこととしてでなく現在の指針として思い浮かべ自分の生活の根拠とすること、そこからキリスト教の信仰は始まる。それはキリスト降誕を紀元〇年とし、彼の殉教と復活を通して「最後の審判」に至る世界観と時間的観念を受け入れることに他な

らなかった。この思想を定着させるために、「言葉によって伝えられる教義」が必要とされ、「降誕祭（クリスマス）」や「復活祭」さらには「洗礼」や「告悔」という儀式が必要とされた。

トマスいや了伯は、千代の声を聞きながら母を思った。母に連れられ行った高槻の教会を思った。そして自分にとってキリスト教とは何だったのかと思った。

8

トマスは生まれたときからキリシタンだった。
父、荒木忠通は摂津を支配する荒木村重に仕えていた。同じ荒木姓と言っても血筋がつながっているわけではない。元は池田姓を名乗っていたが、祖父久左衛門のとき、荒木村重に望まれて有岡城の家老となった。その折り、荒木姓まで賜ったということだが、池田家二十一人衆の筆頭だったという実力と、その温厚実直な性格のためか古参の家臣衆の嫉妬をあおることもなかったという。
トマスの父忠通は、そんな久左衛門が、若い頃、池田の百姓の娘に生ませた子供だという。
父忠通がキリシタンとなったのは、同じ荒木家配下にあ

る高槻城主高山右近の影響によるものだった。忠通は、同じ年輩ながら右近を自らの茶の師と仰ぎ、築城術の達人と賞賛し、その潔癖さがやや煙たくはあるものの右近の人となりにかねてより敬服していた。

　その右近から、自らの婚姻の儀式に立ち会ってほしいと、忠通ばかりか妻の時子までが招待された。結婚の相手は古田織部の妹ジュスタ。織田信長の薦めを荒木村重が取り持っての話であり、いささか政略的なにおいもないではないが、それより何よりジュスタが熱心なキリシタンであることが右近の心を動かしたようだ。婚姻の秘蹟は新たに完成した高槻の天主堂で行うという。

　教会といっても、当時は神社や仏寺をそのままキリスト教会に転用する場合が多く、そんな中にあって高槻天主堂は小規模ながらも、右近と飛騨守父子が心血を注いだ司祭館まで備えた本格的天主堂だった。しかし忠通は天主堂よりも、右近の修築した高槻城に興味があった。高槻城は久米路山に築かれた城だ。久米路山と言っても小さな丘のような小山で、平城にも等しく守るに難しい城である。右近は修築に際し、この欠点を濠を深く広くすることによって解決した。そればかりか内濠外壕のまわりにまだ一つの壕を巡らし、まるで湖に浮かぶ島のような城に仕上げてしまった。

　人は、右近とキリシタンの関係から、それを南蛮わたりの技術であるかのように思う。が、実際は右近が堺に滞在中、

上泉秀綱に教授された築城術に依っていた。

右近にはこういった誤解がつきまとう。右近と付き合っていれば、南蛮の技術や産物、いや何かの折りには南蛮の援助さえ得られるのでは……そんな思惑から右近に接近する者も多くあった。主筋にあたる荒木村重しかり、織田信長またしかりである。右近を友とも師とも思う忠通にしてからが、右近を見る目にそういう思いがないとは言い切れなかった。

忠通は、右近の説くキリシタンの教えは「たしかに道理にかなっている」とは思うのだが、自ら進んでキリシタンになる気はない。特にキリスト教の説く一夫一婦制、しかも一度娶れば離縁できないという教え……このことだけは日本にはあわないと思う。道義的な意味からばかりでなく、政治的にも子孫を残すことを、すべてに優先させなければならなかった時代なのだ。

「右近の説くキリストの教えとやらは潔癖に過ぎる。これではわしのような男は近づくこともできん。」

しかし、高槻を訪れこの思いが一変した。理屈ではなかった。思想でもなかった。今まで目や耳にしたことのない、南蛮の色彩と音に包まれ、キリスト教に魅了されてしまったというのが本当のところであろう。

一五七四年（天正二年）の暮れ、右近とジュスタの結婚の秘跡が高槻の天主堂で厳かに執り行われた。新築された

天主堂の祭壇。オルガンティーノ神父の深紅のマントの鮮やかさ。純白の打ち掛けに身を包んだジュスタの清楚さ。黒いアビタ（修道服）に身を包んだ右近の凛々しさ。オルガンの響き……そこへ賛美歌がかぶさり、やがてよく通るオルガンティーノ神父のラテン語が響きわたる……忠通等夫婦ばかりでなく、列席者のすべてが体験する初めてのキリシタンの結婚式であった。ラテン語の意味は分からなくとも、その簡素さと厳粛さに列席者は感動しため息をついた。特に政略の道具として扱われてきた女たちにとって、キリスト教の示す夫婦の姿は、まさに彼女らが渇望して止まなかったものであったに違いない。

そんな雰囲気に飲まれるように、忠通夫婦はキリシタンとなった。右近の結婚から一月後のことである。そしてその半年後、忠通夫婦に待望の男児が生まれ、高槻の天主堂で洗礼が施された。

洗礼名はトマス、名付け親はジュスト高山右近、洗礼をほどこしたのは、後に安土セミナリオの校長となるイタリア人ニエッキ・オルガンティーノ神父だった。

キリスト教に改宗してからというもの、忠通にとってすべてが順調に進んだ。織田信長はキリスト教を厚く遇した。村重もまたキリスト教を厚遇し、キリシタンに改宗した忠通を重く用いた。村重の場合、それはただ単にキリスト教に利用価値を見いだしたというばかりでなく、高山右近を

押さえておくというさし迫った問題を抱えていたからでもあった。このため忠通は、何かにつけ高槻の右近のもとへ使いに出された。右近を友とも師とも仰ぐ忠通にとって、それは願ってもないことであったが、その裏に隠された村重の意図に気付くことはなかった。

　村重は、信長への謀反の思いを心の奥に秘めていたのだ。その思いが一五七八年（天正六年）秋､具体的な形となった。村重が突如、石山本願寺や毛利勢と通じ、信長に反旗を翻したのである。

　トマスが三歳を迎えたばかりの頃であった。

「村重謀反」の報に接するや、右近は直ちに有岡城へ赴き、村重に対し、何よりこの戦いが不正であり忘恩であることを弁じ、その不利と無謀さを説いた。そのうえで信長への赦しを請うべきだと主張したのだ。右近はこのとき、二心なきことを誓うため三才になる一人息子を人質として村重に差し出した。この右近の誠意に村重は動かされた。たしかに信長自身、この時期、腹背に敵を有しており、摂津という重要な地点を敵に回すことはできない。右近の主張には説得力があり、説得は効を奏したかに見えた。しかし村重は、謝罪に安土へ赴くという土壇場になって「信長が自らへの反逆を赦すはずがない」という恐怖感にとりつかれ、強硬派中川清秀に勧められるまま、有岡城へと帰城してしまったのだ。

こうして、右近も村重と共に信長と戦う羽目に陥った。

村重謀反の報を受けるや、信長は、まず高槻に兵を進めた。しかし高槻城を一目見るなり、その堅固さに驚嘆すると共に、この城をここまでにした高山右近という人物に驚嘆した。まともに攻めれば攻める側にも莫大な損失を覚悟しなければならない。それにもまして戦いが長期化すれば、こちらの自滅にもつながりかねない。本願寺攻めにも、西国の動きを牽制するにも、摂津はその要となる重要な地点である。

信長にとって、早期の紛争解決こそが最重要課題であった。

このため信長が真っ先に手を打ったのが、右近の懐柔である。信長は右近の動きを封じるため、キリシタン宣教師を人質に取った。右近が村重に味方するようであれば、「日本のキリシタンを根絶やしにする」と脅しつけたのだ。言葉だけの男ではない。

かと言って、村重のもとには二心なきことを誓うため、自ら息子と妹を人質に出している。どちらにも動けない右近であった。思いあまったあげく、父ダリオ飛騨守は村重に味方し、右近はキリシタンとしてすべてを捨て出家するという捨て身の道を選んだ。

信長にとっては、それで十分だった。出家し中立を守ろうとする右近を却って重く用い、その仲介に当たったイエズス会宣教師をも、今まで以上に厚遇した。そうすることで荒木側に右近の寝返りを強く印象づけ、その士気を阻喪

させることをねらったのである。

信長は、高槻城に次いで茨木城を守る強硬派中川清秀を懐柔するや、いよいよ有岡城への総攻撃を開始した。降伏の勧告はなく攻撃は熾烈を極めた。それだけに守り手も死に物狂いで防戦につとめ、堅固な城塞と相まって、寄せて側に多大な被害を与えた。

信長は持久戦への変更を余儀なくされた。兵糧攻めにしようという作戦だが、町屋までも城郭に包み込んだ有岡城は兵糧攻めに強く、籠城戦は長期にわたる様相を呈し始める。そんな中、高山右近も封鎖網の一翼を担わされることとなり、やがて有岡城を包囲する旗印の中に、右近のクルスの旗印が翻ることになった。

右近が寝返った……。少なくとも籠城側にはそう映ったし、結果として事実はその通りでもあった。有岡城を守る側にもかなりの数のキリシタンがいる。そして、そのほとんどが右近の勧めで教えに入った者たちだ。

右近が包囲網の一翼を担ったのは昆陽口の砦であり、有岡城からは北西の方角に当たるが、この一角に翻るクルスの旗を見たとき、忠通は何を思ったろうか。「右近だけは」と信じていた思いがぐらつきはしなかったろうか。この戦いへの疑問を大きくふくらませはしなかったろうか。この戦いは本願寺に加勢しての戦いである。キリシタンにしてみれば異教徒に加勢しての戦いであり、戦いの義が立たない。聞けば右

近は、宣教師やキリシタン信徒たちを守るために信長側に寝返ったという。しかし、なぜか釈然としない……

右近は、すべての立場を捨てキリスト教に生きようとしたのではなかったのか。武士というしがらみを捨て、信長にも村重にも組みしない道を選んだのではなかったのか。その男が、なぜ、信長の一武将としてこの有岡城を包囲するのか。

俺はいったい何のために戦っているんだろう。そんな思いに責めさいなまれる日が続いた。そんな矢先、今度は、城主村重が逃走した。「夏には……」と言っていた毛利の援軍は十月に入っても来る気配はない。「かくなるうえは」と、村重自ら「毛利へ救援を求めにいく」と有岡城を脱出したのだが、その村重も尼崎城に逃げ込んだまま動こうとしない。聞けば村重の大事にしていた名物茶器がすべて有岡城からなくなっている。「青磁の花入れ」「高麗茶碗」「立桐筒」「小豆鎖」……何一つ残っていない。

村重に戻ってくる気はなかったのだ。

十月も終盤に入るや、荒木側には裏切りや逃亡が相次いだ。最前線の上臈塚砦も、中西新八郎や宮脇平四郎の裏切りのため、寄せ手の滝川一益の軍兵を戦わずして迎え入れた。

ほぼ一年にわたって頑強な抵抗を示した防衛線も、一角が崩れるや一気に崩れ始める。町に火がかけられ、各砦は本城との連絡が絶たれ混乱に陥る。降伏は赦されず、惨酷

な殺戮が繰り返され、悲惨な報せだけが次々と有岡城へ押し寄せてくる。

こうして三の丸までが信長勢の手に落ちてしまった。

そんな頃、包囲軍の一翼を担う高山右近から忠通へ秘かに一通の書状が届けられた。

忠通とその家族に有岡城脱出を勧める書状であった。

それによれば、村重が尼崎城に逃れたことにより、包囲軍もその半数が尼崎城に振り向けられ、右近も信長の命により、尼崎城を望む塚口の砦へ移動したという。村重の城抜けにより、信長の怒りは並々ではなく、今降伏しなければ、信長は誰一人として生かしておく気はないだろう。こうなったからには、せめて奥方とトマスだけでも脱出させるようにというのだ。

幸い明日は、忠通の父荒木久左衛門に率いられた一隊が、尼崎にいる村重を説得し、尼崎・花隈城を開城させるとの条件で降伏勧告のため城を出ることが許されている。その間は、織田勢の攻撃もストップされるばかりか、久左衛門率いる一隊に注意が注がれ城内の味方の監視さえ手薄になるだろう。この混乱に乗じてトマスと時子を猪名川から舟で逃がすように……猪名川の警戒は右近の手の者が行っているので、舟で迎えに出るというのだ。

その夜、忠通は二人の部下を伴い、時子のもとを訪ねた。

「俺は、明日、親父殿について尼崎城へ向かう。荒木の殿

を説得し、尼崎、花隈の城を明け渡して降伏し、残された者たちの命乞いをしていただくためだ。もし、かなわぬときは、荒木の殿と戦うことになるやも知れぬ。また逆に荒木の殿に合して戦うことになるやも知れぬ。そうなれば、信長殿はこの城に残された者たちを赦しはしないだろう。どんな苛酷な刑を科してくるか知れたものではない。俺はキリシタンである前に武士だ。今となっては、どのような立場におかれようと見苦しくない死だけを願っている。ただトマスやそなたには、自分に果たせなかったキリシタンとしての一生を全うしてもらいたい。」

忠通は、妻時子と三才になるトマスを部下に託した。

翌早朝、久左衛門らが大手口に集結した。降伏勧告の使者として尼崎城へ向かうためだ。その数は三百におよんだと言う。その三百に及ぶ一隊の周囲を見送りの家族たちが取り囲んでいる。

忠通は久左衛門の隣にあって、幼い弟の自念が乳母に連れられ見送りに出ているのに気が付いた。忠通にとっては腹違いの弟に当たる。そっと父の横顔を見た。父久左衛門が幼い自念をどんなに可愛がっているかよく知っている。父はその幼い息子を残して出発しようとしているのだ。久左衛門にしても残された者の運命を考えると、できるものなら連れていきたいに違いない。しかし人質として残して

いく部下の家族たちのことを考えると、それだけはどうしてもできることではなかった。
　そんな父の気持ちを思うと、忠通の心に、何か後ろめたいものが走った。
（時子やトマスは無事に城を抜け出したろうか。）
　やがて大手門が開かれ久左衛門に率いられた一隊が、尼崎城へ向けて整然と出発していった。出発していく久左衛門と、自念の眠そうな目が合った。父久左衛門は何も言わない。苦渋に満ちた顔を背けると、まるで未練を振り切るように黙々と歩を進めていった。
　外は嘘のように静まりかえっている。銃声も、雄叫びも、死を前にした男たちの叫び声もない。ただ一隊の行方を、敵と味方の眼差しだけが執拗に追っていた。
　そんな有岡城を後目に、猪名川を舟で下る三つの人影があった。真ん中にはトマスを抱いた時子の姿があり、その後ろには甲冑に身を固めた老武者が刀を抱えてすわっている。そして舟の舳先では野良着に身を包んだ若い武者が棹をとっていた。

　久左衛門らの一隊は、やがて尼崎の城へと到達した。しかし村重は、降伏を進める久左衛門等を前に、城の門を閉ざして出てこようとしない。そればかりか執拗に降伏を迫る一行にいきなり銃撃を開始したのだ。こうなっては逃げ

るしかなかった。久左衛門の一隊は、尼崎城を前に蜘蛛の子を散らすように四散していった。これを見守る織田勢も咄嗟のことで何が起こったのか分からない。見る間に久左衛門の一隊は散り散りに消えていった。

そしてこの後、ある者は淡路島に、ある者は高野山へ逃れ、一人の男を除いて有岡城へ帰った者はいなかったという。

一説には、この逃走劇は、荒木家再興のため、毛利の援軍が来るまで荒木勢の主だった者を温存しておこうという村重と久左衛門が共謀して打った大芝居だという。しかし、その見返りは大きかった。怒った信長の戦後処理は苛烈を極め、有岡城にとどまった者は、男女子供の区別なく、非戦闘員である賄いの女性に至るまでことごとく殺戮されてしまった……。

話を戻そう。

尼崎城を背景にした村重と久左衛門のやりとりに周りの目が集まっているとき、トマスを乗せた舟は、猪名川を塚口近くまで下って来ていた。……と、そのときだ。

棹を取る若者が注意を促した。あわてて筵をかぶり身を隠す二人。と、前方の薄もやの中から一隻の小舟が近づいてくる。若者は、すわ敵かと身がまえたが、こちらの様子を察したのか、いきなり一人の武将が白地に黒のクルスの旗を高々と掲げた。

「おお、右近様の迎えの方々だ！」
　張りつめた気持ちが一気にゆるんでいく。
　やがて二隻の舟は岸に接岸した。クルスの旗を持った男が岸に着くのを待ちきれずに舟を下り、こちらへ向かってくる。
　男はクルスの旗を傍らの者に手渡し深々と頭を下げた。
　見れば、それは高山右近自身であった。
　時子は驚いた風もなく、右近に深々と頭を下げると、
「右近様のお導きで、私たち夫婦は短い間でしたが、真の夫婦としてよみがえることができました。夫忠通は、今朝、久左衛門様と共に尼崎へ向かいましたが、本心は有岡城へ戻るつもりでございます。トマスを右近様に託しました上は、この私も有岡の城へと戻り、夫と最後まで生死を共にし、夫への愛、ひいてはデウス様への愛を全うしとう存じます。つきましては、この子のことのみが気がかり。厚かましゅうはございますが、トマスのことくれぐれもお頼み申します。」
　時子は、老武者に手を引かれて立つトマスの首に漆細工の小さな聖画入れをかけてやった。かけながら背をかがめると、
「母は、やはりそなたの父上の許へ帰ります。もし、生き長らえるようなことがあれば必ずそなたを迎えにまいります。……が、もう会えないかもしれませぬ。そのことは覚

悟しておくのですよ。この中にはマリア様のお姿が描かれています。さびしくなったら、これを母と思うて生きていってくだされ。」

それは黒漆に金蒔絵で十字が描かれた楕円形の容器であり、蓋を開けると、中に小さな聖画が入っていた。そこには幼子イエスを抱くマリアの優しい姿が描かれていた。

やがて時子を乗せた小舟が有岡城へ向かい帰っていった。
トマスは、右近の手をにぎりながらその姿を見送った。
その胸に、「生きていれば必ずそなたを迎えにまいります」という母の言葉がいつまでも残った。

## 9

信長の苛酷な戦後処理が開始された。
信長は「不憫(ふびん)ながら荒木摂津守や久左衛門を懲らしめるためには致しかたなし」と、生き残った者全員の成敗を命じた。右近にはその忠節を試すかのように猪名川沿いの七松において、名ある武士の妻女とその子供、更には非戦闘員である召使いや若党夫婦まで処刑することを命じた。
一度、権力者に屈すると、妥協が妥協を生んで際限がない。すべてを捨てて出家する道を選んだはずが、信長に仕える

ことを承知したばかりに、主筋に当たる村重を攻めるはめとなり、今度は、生き残った者たちの処刑を命じられることとなった。

これに対し右近が裏切った村重は、人質として差し出した右近の子供や妹を遂に殺しはしなかった。それがキリシタンである右近を苦しめた。キリストの教えを奉じる自分は潔癖でなくてはいけない。戦国という時代が、自分の最も望まぬ方向へ自分を運んでいく。それが結果として、自分の最も忌み嫌う「偽善者」というレッテルを自分に貼ることになる。周りの者も口には出さずとも思っている。「右近は口では立派なことを説くが、いざとなると自分は安全な場所に逃げ込む卑怯者だ」と……。

その通りだと思った。処刑の日も、右近は、塚口砦に作った仮の茶室へと逃げ込んだ。そして、何かに耐えるように、ただ処刑が終わるのを待っていた。そのそばではトマスが、外から聞こえてくる銃声や悲鳴にじっと耳を傾けている。

七松の処刑場は凄惨を極めた。

猪名川を舟で運ばれてきた囚人たちは、母は子の手を引き、まだ幼い子供たちは牛車に乗せられて整然として処刑場に向かう。

……竹矢来が組まれた刑場に入ると、そこには何十本かの杭が打たれていた。足軽たちが、到着した女や子供たち

を無造作にその杭に縛っていく。まだ幼い子供は、杭に縛られた母に抱かせる。

やがて………

「撃てーッ！」というかけ声と共に一斉に銃撃が開始された。

刑場は一瞬にして、悲鳴と念仏と血しぶきに覆われた。

足軽たちが、まだ硝煙の漂う刑場を杭に駆け寄り、死体を杭からはずすと引きずるようにして、大八車へ放り込んでいく。まだ死にきれない女は足軽が槍や刀で殺していく。死体の始末が終わると、次の女や子供たちが引き出され、足下に血だまりのできた杭に縛られる。処刑場のあちらこちらで、この行為が散発的に繰り返され、最初、子供の健気（けなげ）な様子に涙したり、好奇の目で見ていた観衆も、やがて血のにおいに飽き、気分が悪くなって吐く者もあちこちで現れはじめる。

こうして朝から始まった処刑は昼過ぎまで続いたが、このとき処刑された女や子供は、実に百二十二名に及ぶと言われる。

『信長公記』は、このときの模様を、「この光景を見た人は、その後二十日、三十日の間はその面影が目について忘れることができなかった」と言い、あるいは「人々はすっかり肝をつぶしてしまい、目を覆い二度と見ようとする人はいなかった」とも言う。

右近は、茶室の中に聞こえてくる銃声や悲鳴にじっと耐えていた。そんな右近の手を握ってくる小さな手があった。

トマスだった。見ればトマスは、声を押し殺し、恐怖に体を震わせて泣いていた。右近は、トマスを抱きしめてやった。右近の腕の中でふるえる小さな温もりが愛おしく、右近はトマスを慰めることで、まるで自分が癒されていくようにも感じた。

が、処刑はこれで終わった訳ではない。昼からは有岡城で働く五百名に及ぶ召使いたちが四軒の農家に閉じこめられ、戸を釘付けにされたうえで焼き殺された。

またこの三日後、京都六条河原では、村重の妻だしをはじめ､荒木一族がことごとく処刑されたという。この中には、荒木久左衛門の幼い息子自念も含まれていた。

しかし、トマスの父や母の姿はどこにもなく、恐らくは有岡城最後の戦いの中で命を終えたものと思われた。

## 10

トマスは有岡城落城後、高槻の高山右近のもとでほぼ三年間を過ごしている。そして六歳になったとき、信長の城下町安土にセミナリオが造られ、ここに預けられることとなった。

セミナリオの創設は、イエズス会巡察師バリニャーノ神父の働きによるもので、まずは九州有馬に開校し、翌年、信長の許しによって安土に開校される運びとなった。

信長は荒木攻めに果たした高山右近の働きを高く評価し、キリスト教をあつく保護するとともに、セミナリオ建設のため、安土城天守ふもとの土地を与えたばかりか、大工などの手配から万事に至るまで全面的にこれを援け、安土城天守と同じ瓦の使用まで許したという。

右近もこの工事を援けた。

それは、ただ単に便宜を図る、経済的に助けるというばかりではない。毎日のように人夫に混じって材木を運ぶ姿は、まるで贖罪の苦行でも果たすかのようであった。

この時期、右近はラテン語を学ぶようになる。キリストの教えを本当に伝えるためにはヨーロッパの言葉を知らねばならないと言い出し、そして幼いトマスにもそれを勧めた。

「私は西洋の言葉を学ぶには歳を取りすぎた。トマス、おまえはパーデレ様の国の言葉を学び、イエス様の教えを、この国の言葉として伝えていってほしい。」

こうしてやがて出来た安土セミナリオに、その一期生としてトマスが預けられたのである。

校長は、トマスに洗礼を授けたイタリア人宣教師オルガンティーノ神父。生徒は、六歳のトマスが最年少で、最年長が十五歳、およそ十五、六名の生徒が集められた。多く

は戦争で身寄りを亡くした戦国武将の子供たちや、熱心なキリシタン信徒の子弟たちで、なかには自ら望んで入学してきた者もいる。後のことになるが、秀吉の禁教政策に殉じ、二十六聖人の一人に列せられるパウロ三木も、この安土セミナリオの生徒として、この中にいた。

信長の異国趣味がにわかに花開いた時代であった。

巷（ちまた）では西洋風の衣装が取り入れられ、キリシタンでなくてもクルスをかけ、ロザリオを装身具のように扱うことが風潮となった。京都には三層の天主堂がそびえ、町の大通りには着物に首襟を着けた若者や、カルサンを袴代わりに履く人たちの姿が見られた。

安土のセミナリオでも、西洋音楽を学ぶ子供たちの声やオルガンの音が絶えることなく、信長自身、セミナリオを訪ねてはその調べに耳を傾けた。

しかし、トマスにとって、信長の来訪は恐怖以外の何ものでもなかった。信長は感情を表さず、ただ生徒たちの弾く西洋の調べにじっと耳を傾けている。その表情を盗み見るとき、七松で聞いた銃声や断末魔の悲鳴が、トマスの頭の中でよみがえってくる。

――信長様はあの銃声や悲鳴を聞くときも、あんな表情だったのだろうか――。

トマスの頭の中によみがえった銃声や悲鳴は、次第に実体を持ち、トマスの頭からあふれ、次第に辺りを七松の処

刑場へと変えていく。思わずトマスの口から悲鳴が洩れそうになったとき、母の「生きていれば必ずそなたを迎えにまいります」という声がよみがえってきた。

そしてトマスは、その声にしがみつき必至に恐怖に耐えた。

やがて、トマスにとって恐怖の象徴とも言える信長が死んだ。

セミナリオの出来た翌一五八二年、いわゆる本能寺の変が起こり、信長は明智光秀によって京都本能寺に誅せられたのだ。天正遣欧使節の少年たちが旅立って間もなくのことだ。

しかし争乱は京都だけにとどまらなかった。光秀は、本能寺を襲うと同時に、信長の本拠安土をも襲わせ、このため安土セミナリオまでが、このとき、灰燼に帰してしまうことになる。

安土セミナリオの校長であったイタリア人宣教師オルガンティーノは、生徒たちを連れ安土を脱出した。まず小舟で琵琶湖の沖の島へ渡り、そこからさらに対岸の坂本へと逃げる。坂本は言わずと知れた明智の本拠地……。そこでオルガンティーノ神父らは、キリシタンを味方にしようとする明智の手で却って保護され、争乱の中、その案内で京都南蛮寺へと落ち延びることができた。

トマスは、年長のパウロ三木に手を引かれ山中峠を越え

た。途中、何度も何度も安土の方角を振り返った。なぜかセミナリオを離れたら最後、母親も、母親の思い出も大事なものがすべて消えていってしまうような……そんな気がして仕方がなかったのだ。

母が死んだことは分かってはいるのだが、トマスは母を待つということで自分を支えてきた。いや、待つという行為の中に母を感じようとしていたのかもしれない。だから、どことも知れぬ場所へ移動することが不安でたまらない。高槻を離れ安土へ来たときも、この不安を抱えたままやってきた。今また安土を脱出するに当たって、自分の中にポッカリ空洞ができてしまったような不安定さに戸惑い、いたたまれずにいる。

トマスは自分の記憶の中に母の声を探した。

「生きていれば必ずそなたを迎えにまいります……」

その記憶の中に母の声と思いをよみがえらせることで、トマスは自分の不安を癒そうとした。

しかし母の声が思い出せない。心の中を必死になって探しまわり、やっと母の声に行き着くことが出来た。そのときだ。

「トマス、モウスグデス。モウスグ京都デス。大丈夫デスカ？」

オルガンティーノ神父の励ましの言葉が、トマスを現実の世界へと引き戻した。

◇

「十一人のうち一人トマスといふ疑ひびとあり、ゼスス来たり給ふ折節漏れられけるに残りのヂシポロ（弟子）おん主を見奉ると申されければ、トマス御手の疵を見、釘の御痕に指をさし御右の疵に手を入れずばヒイデス（信仰）に受くべからずと申されけるなり……」

千代は目の前のトマスを拒むかのように、二人に背を向け、自分の中に今までため込んできた日本語教理書をつぶやくように吐き出していた。

イエスの十二使徒の一人トマスは、ほかの弟子たちが口にする主の復活を最後まで信じようとしなかった男だ。

「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をその脇腹に入れてみなければ、私は決して信じない。」

そんなトマスの前に復活したキリストが姿をあらわし、「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

イエスはまた、トマスがカイサリア市にいたとき、再び彼の前に姿をあらわし、インド王グンドフォルスのもとへ布教に行くことを命じた。殉教の覚悟がなくてはインドへ

は行けない。

　イエスは、ためらうトマスに「トマスよ、行きなさい。怖れてはならない。私があなたを見守っています。そして、あなたがインドの人々を改宗させたならば、殉教者の棕櫚をもって私のそばに来るのです。」

　こうしてトマスはインドへ赴き、インドで最初の殉教者となった。トマスの伝説は、新約聖書外典「トマス行伝」や十二世紀に成立した「黄金伝説」にも収録され、一五九一年に日本で出版された「サントスの御作業」の中にも収録された。

　今、千代の口から漏れる言葉は、その「サントスの御作業」の一節に違いない。トマスを兄とも慕った千代が、まず最初に覚えたのがこの一節だった。

　……サントウメ（聖トマス）いかに御主、いづくいかなる所に遣わさるるとも、南蛮に至っては御免なされかしと辞退申さるれば、ゼスキリスト汝ともに我も行きて、力を添ゆべきなれば、恐るることなかれ。かの人々をキリシタンになして後、汝はマルチル（殉教者）の位を以て、我が所に来たるべし……

　了伯は千代の声を聞きながら思った。

　右近様はこの聖トマスについて知っておられたのだろう

か。知っておられて、この洗礼名を私に名付けられたのだろうか。もちろんオルガンティーノ師はご存じだったろうが、しかし、キリスト教会が異端として避けた「トマス福音書」の存在についてはどれだけご存じだったろうか。聖トマスと言われながら、一方で異端として避けられた男の本当の姿を、あの方はどれだけご存じだったろうか。

私に名付けられたトマスという洗礼名にどれだけの意味があったのだろうか……。

トマスの心に、異端審問所の牢獄で聞いたジョルダーノ・ブルーノの言葉がよみがえってきた。

「トマス……不可解な名だ」
「君はいったいどのトマスになるつもりだ……」

## 11

「ホテルには帰っていないそうです。」

電話をかけに行っていた通訳の男性が帰ってきた。

康男がを姿を消してすでに三時間がたつ。

康男の捜索のためにと、藤プロデューサーと、この通訳の男性が、ヴァチカンにとどまったが、三時間たった今も、その行方はようとして知れない。

「俺なら、みんなからはぐれちまったら、ホテルへ帰りますけどネ。今晩もあのホテルへ泊まるんだし……まだ帰っていないだけで、康男さんだってきっとホテルへ帰ってきますよ。」

　そうだと思う、そうに違いないとは思うのだが、藤にはなぜか安心できない。

　康男とは、今のプロダクションに入ってからの付き合いだ。といっても、まだ三年目に入ったところなのだが、ずいぶん長く付き合ってきたような気がする。

　決してバリバリ仕事ができるというタイプの男ではないが、責任感だけは強い。この類の仕事では、その責任感の強さが却って仕事の邪魔をしている面もなきにしもあらず、要は手を抜くところを知らない。

「あれではいつか潰れてしまうのでは」と思うのだが、スタッフの連中は、ヤツのそんなところをを信頼している。

　そんな康男が、みんなを引率していて急に消えちまうなんてことがあるだろうか。

　……康男はそんな男じゃない。

　藤には、康男が何かトラブルに巻き込まれたとしか考えられなかった。

　藤信二――かつてはテレビ草創期に、反戦をテーマにした九十分テレビドラマを制作し、芸術祭賞を獲得した。当

時としては画期的なことで、以来、仕事にはめっぽう厳しく、若いスタッフやタレント連中からは、鬼藤として恐れられ今日まで来た。が、それがなぜか長年住み慣れたテレビ畑から身を引き、ＣＭプロダクションのプロデューサーとして再出発することになった。

しかも東京から離れて、大阪支社の勤務を希望したという。

様々な噂や伝説と共に、藤が大阪支社に姿を見せた頃、康男は一年の進行助手の期間を終え、制作進行として一本立ちすることになった。

その最初の仕事が、地方の電力会社のテレビＣＭ、このプロデュースを担当したのが、藤信二だったというわけだ。

企画的には別段これといった目新しいものはない。が、いくつかの厄介な問題が課せられていた。一つは山間（やまあい）を縫うように立つ送電線の鉄塔――この空中撮影が問題となった。この地域は、二つの電力会社の送電線が入り組んでおり、他社の送電線が写らないことが絶対条件とされた。目印となるのは、送電線の鉄塔の形。鉄塔先端のアームに、鬼のように小さな二本の角が突き出ているかどうかで見分けが付くという。

二つ目の課題が、海岸部に建てられた火力発電所の撮影。運行はストップできないが、時節柄、煙突から煙が出ているのが写るのは困るという。環境破壊の原因みたいな印象を与えたくないというのだ。かといって部分撮影でごまか

すことは出来ず、火力発電所の全景が必要だという。
　一つ目の問題は、フィルム編集の段階で何とかなるだろう。
　厄介なのは二つ目の問題だ。この頃の火力発電所の煙突というのは、煙をモクモク吐き出すなんてことはまずない。濾過されて大気を汚すこともなく、煙と言ってもほとんど肉眼では分からないぐらいなのだ。……が、フィルムに写るとやはり煙は見えてしまう。かといって操業は中止できない。
　苦肉の策で、一時間ばかりギリギリまで発電量を押さえてもらうこととなった。
　これならどんなに頑張って煙を見ようとしても、肉眼では見えない。カメラマンもＯＫを出し、ファインダーを覗いたディレクターもＯＫを出した。
　こうして一月にわたる長期ロケも無事終了し、スタッフ一同、意気揚々と大阪に帰ってきたのだが、ラッシュフィルムを見て皆が愕然とした。
　確かに煙は写っていない。しかし、煙突の上の空気は熱せられているため、その部分だけが陽炎のようにユラユラ動いて見えるのだ。
　案の定、広告代理店のＯＫは出なかった。それから二時間近く、試写室は対策会議の場に変わった。撮り直しても、これ以上は期待できない。静止画像にしてしまうという方法もあるが、これだと違和感が付きまとう。一分のコマー

シャルフィルムでは映像が命なのだ。

　カメラマンやディレクターの意見が一渡り出きったところで、康男が藤プロデューサーに向かってポツンと言った。

「煙突から上、ちょん切っちゃったらどうなんでしょう」

　なるほど、最も原始的で、最も効果的な案に違いない。煙突のてっぺんギリギリのところでトリミングしてしまう。これなら不自然さもないし、取り直しも、特殊処理も必要がない。一番安上がりで効果的な方法だった。

　出来上がったフィルム試写では、スポンサーからも代理店からもクレームは付かなかった。

　以来、藤の仕事には必ずと言っていいほど、康男が制作進行として付くことになった。

　しかし、機転が利くと思ったのは、あのときが最初で最後だった。

「あいつは俺が仕込まないと、この世界じゃ食っていけない。」

　それが藤の口癖となった。

　康男は仕事がないとき、広告代理店の八階にもうけられたスタジオへよく行く。そこを根城にしている美術（要は大道具）の連中と雑談するのが好きだった。特にスタジオのホリゾントに背景を描いている美術の伊牟田さんは、若い頃、画家を志望したそうで、よくラファエロやボッティ

チェルリの作品について話してくれる。
　ルネサンス美術の話をするとき伊牟田さんは人が変わったようになる。スタジオのホリゾントの壁に向かい、まるでそこに「ヴィーナスの誕生」や「キリストの変容」が飾られてでもいるかのように滔々としゃべり出す。康男にはあまりよく分からない話なのだが、伊牟田さんがそんな話をするときの熱っぽさが好きだった。
　その日もフィレンツェの話を聞いているときだった。
　藤さんが、ひょっこりスタジオに現れ、康男に「話がある」と言う。伊牟田さんは気を利かして美術室へ戻ってしまった。
　二人になると、いきなり藤プロデューサーは用件を切り出した。
「おまえ、少しは貯えはあるのか？」
「少しは……」
　こちらの懐具合でも心配してくれているのか、いつもの「生活設計」などというお説教話がはじまるのかと思っていると
「三十万ほど、用立ててくれ。必ず利息を付けて返すから」と言う。
「そんな金、ないですよ。十万が目いっぱいです！」
「十万か？　まあいい、その金、俺に貸してくれ」
　藤さんなら大丈夫だろう。いつも世話になっているし、よく飲みにも連れていってもらう。「いいですよ」と気安く

返事を返すやいなや、照れ隠しか、難しそうな顔をして、メモを取り出し、何かを走り書きして康男に渡した。
「金を下ろしてここへ届けてほしい」
「今すぐですか？」
「ああ、急いでいる……」

何がなにか訳が分からず、ともかく言われた場所へやってくると、そこは町金融の事務所。渡した十万円は、藤プロデューサーの借金の利息として消えた。
康男は、藤プロデューサーが東京を離れた理由が分かったような気がした。いつもおごってもらっていて偉そうには言えないが、金遣いがやたら派手なのだ。連れて行ってもらうのは、いつも会員制のクラブ。
そこでバニーガールの娘たちに向かってお説教を垂れる。
「人間というのは、お天道さんが昇って働き、お天道さんが沈んだら休むもんだ。こんな仕事、人間のする仕事じゃないぞ」と始まって、最後は、自分のつくったドラマの自慢話。「○○テレビで鬼藤と言やあ、知らないヤツはいなかったんだ」という展開になる。
康男にとっては、飲みに連れていってもらうより、借金を返してくれた方がありがたいのだが、それから一年以上経つが、返してくれる気配は微塵もなかった。
その代わりでもないだろうが、仕事の上ではよく面倒を

見てくれたし、また信頼もされていた。

（ヤツはどうしちまったんだ。どこへ消えちまったんだ。）

康男は道を失った。
地下水道はやがて足場がなくなり、かといって水に浸かるのもためらわれた。ここまで来るまでに枝道が二カ所ほどあった。一番近い枝道のところへ戻るしかないだろう。そう思って、枝分かれした地下道を進んできたのはいいが、今度はペンライトの電池が心配になってきた。弱々しい灯りの中に進む方向を確認したうえで、ペンライトのスイッチを切り、手探りで進む。しばらくして、またペンライトのスイッチを入れ、進む方向を確認する。
そんな繰り返しでここまで来たが、ここがどこなのか、ただ闇があるだけ……。水の音も聞こえなくなっていた。
何度か目にペンライトのスイッチを入れたときだ。
頼りない灯りが、若い女性の姿を照らし出した。
彼女は突然の灯りに驚いたかのように、康男に向かって振り返った。まぶしそうに眉を寄せたその顔は、まるで興福寺の阿修羅像を思わせるような初々しい美しさに溢れかえっていた。

彼女は、康男にかすかに微笑むと、灯りの輪の中から消えた。
髪を包み込んでいるのは飾り頭巾だろうか、ローブと同じ布が、ターバンのように顔を縁取っており、それが整った少年のような顔立ちを一層際だたせていた。
…………
あの顔にも、あの中世風の装いにも見覚えがある。
どこで見たのだろう。
あんなイタリア人女性を知っているはずもないし……
何より、一体、なぜこんなところに。
康男は、ぼんやり湧きあがってくるそんな疑問を、脇に押しやるようにして彼女を追った。地上へ戻れるかも知れない。いや、きっと帰れる。
彼女を追いかけるんだ

## 12

遅い昼食を済ませ、伊牟田がスタジオの一角を囲っただけの自室へ帰ってくると、小さなソファーに、普段は顔を見せたこともない小山田支社長が座っていた。貧弱な応接テーブルは、美術関係の本に占領されている。小山田は、その一冊を手に取り、見るでもなくページを繰っていた。

「康男がローマで行方不明だ。」

　小山田は、伊牟田のほうを振り向くでもなく、画集のページに目を落としたままつぶやいた。

「エッ、ローマで何があったんですか？」

「俺の方が知りたいよ。藤君からついさっき連絡が入ったばっかりなんだ。」

「ローマは、今、明け方六時頃ってとこですか。」

「サン・ピエトロの見物中に行方が分からなくなった。昨夜はホテルへも帰ってこなかったって言うんだ」

「…………」

「ロケ隊は、今日、ローマから帰途に着くが、藤君は残ると言ってる。事件に巻きこまれてなきゃいいんだが……ところで、君は普段から康男とは仲が良かったねぇ。何か、最近、変わったことはなかったかい。」

「特には何も気付きませんでしたが……」

「そうか、ひょっとしたらローマへ飛んでもらうかもしれんが、何か思い出したら教えてくれ。」

　小山田はそう言い残すと、部屋を出ていった。

　伊牟田は、小山田の見ていた画集に目をやりドキリとした。その開かれたページには、グイド・レーニ作「ベアトリーチェ・チェンチ」の肖像と言われる画が、その問いかけるような目を伊牟田の方に向けていた。

康男にこの画について訊かれたのは、康男のローマ行きが決まってすぐの頃だから、もう半年近くにもなるだろうか。
　伊牟田の美術室は、康男の隠れ家でもあり、何かあるとすぐにこの部屋へやってくる。あの日も、伊牟田がスタジオのホリゾントに青空のバックを描いていると、いつの間に来たのか、真っ青な顔をした康男が後ろに佇んでいた。
「だいぶ参っているようだな。まあ、コーヒーでも入れるから飲んでいけや。」
　伊牟田は仕事の手を休めると、スタジオの隅にある自分の部屋へ康男を誘った。
「ローマ行きが決まってから、妙な幻覚を見るようになったんです。」
　みすぼらしいソファーに座るや、康男はこんな話をした。

　その日、康男は太秦（うずまさ）の東洋現像所へ仕上がったフィルムを取りに行き、その足で広告代理店の試写室へと向かった。試写室と言っても映写技師などという便利な人間はいない。制作進行が何から何までやる。企画段階では、プロデューサーの助手としてスタッフの間を走り回り予算を算出し、撮影に入る前にはロケハンから撮影交渉と準備に奔走し、撮影に入れば演出助手兼スタッフの小間使いとなり、撮影が終われば、フィルムの運び屋から映写技師までやる。
　映写室にはいると、康男は三五ミリフィルムを納めた銀

色の缶を開けた。缶の中にはぎっしりと巻かれたフィルムの固まりが黒々とうずくまっている。撮影フィルムをポシに焼いただけで、編集の手も加わっていないし、まだスタッフの誰も見ていない。康男はガーゼにパラフィン油を染みこませると、その黒い固まりをそっと拭い、缶から取り出し映写機のフィルムケースへと収めた。
「準備ＯＫです！」映写室の窓から試写室のスタッフ連中に声をかける。
「じゃあ、回してよ」と、カメラマンの声。
　灯りを消し、映写機のスイッチを入れ、光源を閉ざしている仕切り板のレバーを倒す。
　灰色に沈んでいたスクリーンが急に輝きだし、そこにＣＭのために撮影された映像が音もなくひろがっていく。
「このカット使えるよ、よく雰囲気出てるよ。」
「このあとにも予備のカット撮ってるんだけど……」
「いいネ……ああいいよ、これ」「山ちゃん、どう？　これ使おうよ」
　試写室の中は、急ににぎやかになったり、と思うと、また静かになったりを繰り返す。
　やがて一巻目のフィルムが終わり、スクリーンが真っ白となった。いつもならカシャッという音ともに光源に蓋がされ、穏やかな闇が戻ってくるはずなのに、今日に限っていつまでも真っ白な光がスクリーンの上を踊っている。

「おーい止めてよ。次のフィルム回してよ！」
　たまりかねてカメラマンが映写室に声をかけた。
　反応はない。映写機は空回りを続け、スクリーンは真っ白く輝いたままだ。
「おーい康男ちゃーん、何やってんだよ！　寝てんじゃないの！」
　映写室をのぞいたカメラマンは、異様な光景に思わず息をのんだ。
　康男が口から泡を吹き、苦しそうに倒れている。目はひっくり返って白目をむいており、身体は硬直したように痙攣している。

「あれから、おかしくなったんです。」
「おまえ、テンカン持ちだったのか？」と聞かれても、康男自身、あんな発作を起こしたのは初めてだった。だから、どう答えていいのか分からない。
　ただ言えるのは、康男はあのとき、試写室のスクリーンに別のものを見ていた。
　真っ暗な地下世界。石牢のような独房。急に広がる目眩くような白日の世界。その中で、一人の男が絶望的な目を空に向け炎に巻かれてゆく。何かモザイクがかかったようなぼやけたような映像。それでいって圧倒的な存在感を伴った映像。

それからというもの、この夢ばかり見るようになった。
　夢の中では、中近東風だったり、ヨーロッパ風だったり、日本の田舎のような風景だったりする。その中を、康男は道に迷って彷徨っている。石を組んだ上に漆喰を塗り固めた粗末な建物、その間を何かを探しながら歩いている自分。そのうち、ここを行けばあの地下世界へ行くと分かっているのだが、どうしても他の道が選べず、そこへ向かっていく自分がいる。イヤだと思っているのに、行きたくはないのに……。
　そこで、あの少女と出会った。少女は、あの地下牢へ自分を誘っていく。
「イヤだ、行きたくない、行きたくない！」と思いつつ、足は逆らうことができず、そちらへと向いていく。
　そこで汗ビッショリになって目が覚める。
「あー夢だったのか」と、ひとまずは安心するのだが、眠りに就くと、またまた続きの夢を見たりする。
「トマスアラキです……」
「トマス、不可解な名だ……君はどのトマスになる気だ？」
　声が聞こえているわけではないのに、目が覚めると、なぜか、その会話だけが、ぼんやりした少女の顔とともに自分の中に残っている。
　夢ばかりか、以来、よく金縛りにあうようになった。
　寝不足で、机でウトウトしだすと、たちまちそれは起こっ

てくる。体中がしびれて動けなくなり、頭の中に荒い映像が展開していく。

地下へ降りていく長い階段。それを降りていくと、たくさんの人たちが集まっている広間へと出る。あの少女もいる。トマスという日本人青年も、ブルーノという哲学者もいる。その中の若いイタリア人が口を開いた。

「俺は拷問の末に、木槌で頭を割られて死んだ。」

その話とともに、目の前のスクリーンにその様子が映し出される。

血にまみれたその青年が、処刑台に頭を押さえつけられている。青年の目の前には幼い弟が怯えたように兄の目を見ている。彼は、そばの修道士に、弟をこの場から遠ざけてほしいと必死で懇願している。しかし、修道士は首を横に振るばかり。

絶望が青年の顔を覆う。

その途端、大槌が、その頭めがけて振り下ろされる。

飛び散った血が、スクリーンから飛び出し、康男の顔にかかった。

「ウワーッ」

叫び声が、金縛りを破った。

編集室での出来事だ。幸いエディターもディレクターも昼食に出かけ誰も彼の異変に気付いたものはいなかった。

「俺は狂うんだろうか？」

　康男は、編集室を抜け出し、その足で伊牟田の部屋を訪ねたのだった。
　ひとしきり喋ると、康男の顔に赤みが戻ってきた。
　康男にとって伊牟田は不思議な存在だった。なぜか彼と話していると気持ちが落ち着いてくる。それは多分に彼の妻、清花（さやか）の存在によるところが大きい。元はストリップダンサーだったといい、それを伊牟田が通い詰め、妻にしたという。
　清花は伊牟田以上に不思議な人だ。悩み事を彼女に話しているうちに、それが大したことではなかったと思えてくる。彼女が何か言ってくれるわけでも、何かしてくれるわけでもないのに……。
　康男が伊牟田と話して落ち着くというのも、伊牟田の背後に清花がおり、伊牟田を通してその清花と話をしている、そんな感じなのだ。
「このコーヒーうまいですね。」
「当たり前だ。へそくりで買ったエスプレッソ・マシンで淹れたんだからな。」
「あれ、家に置いてたんじゃなかったんですか？」
「清花に邪魔だからって、捨てられそうになった。だから、ここへ持ってきたんだ。」

「清花さんなら、本当に捨ててしまうかも知れませんね。」
　先ほどの落ち込みがどこへ行ったのかと思えるほどの回復ぶりだ。

　康男は気分が落ち着くと、散らかったテーブルに開かれた一冊の美術全集に目が行った。
　そこに、あの少女の顔があった。
　少年のようなキリッとした顔だち。その頭を白い頭巾が覆い、顔だちを一層引き立てている。その少女が、今、机の上に開かれた本の中から康男に微笑みかけていた。

「ベアトリーチェ・チェンチだ。」
　二杯目のコーヒーを運んできた伊牟田が、美術全集に向ける康男の視線に気付いて答えた。
「ローマへ行ったら実物を拝めるかもしれんな。スペイン広場から少し行ったところにパラッツオ・バルベリーニという宮殿がある。コルトーナ描くところのだまし絵の天井フレスコ画があるので有名だが、その二階にあるのが国立絵画館だ。俺も行ったことはないが……でも想像して見ろよ、その回廊には十三世紀から十六世紀の絵画、フィリッポ・リッピ、エル・グレコ、ラファエロ、カラバッジオ等々……そんなすごい奴らの絵がズラッと並んでいるんだ。その回廊の一番奥、まるで闇の吹き溜まりのような場所に、

グイド・レーニの描くこのベアトリーチェ・チェンチの肖像画が飾られている。」
　康男は、今にも何かを語りかけてくるかのような、その肖像をマジマジと見つめた。
「実の父親を殺した悲劇の美少女として知られている。」
「父親を殺したんですか？」
「ひどい親父だったらしいぞ。暴力は振るう、女遊びはする。侍女に手を出すのはあたりまえ、あげくは実の娘のベアトリーチェにまで手を出す始末だ。ベアトリーチェは思いあまって、兄や義母とはかって、彼女に思いを寄せるオリンピオとかいう男に親父を殺させたという。これが発覚し、ベアトリーチェをはじめ、チェンチ家の主立ったものが裁判にかけられた。彼女はあくまで無罪を主張したが、ついにサンタンジェロ橋の広場で一族のほとんどが処刑された。その美貌と毅然とした態度に、ローマ中の人が彼女を支援し、諸外国の外交使節までが、ローマ教皇に赦免願いを出したらしい。……が、すべて無視された。貴族は拷問されないことになっているが、その特権もローマ教皇によって取り上げられたという。ひどい話だ、今なら父親の暴力に対する正当防衛という弁護の仕方もあるだろうに……」
「伊牟田さん、詳しいですね。」
「スタンダールの受け売りだよ。このセンセーショナルな事件は、芸術家や文筆家の想像力をいたく刺激したようだ。

スタンダールは、この事件から『チェンチ一族』という短編を書いたし、イギリスの詩人シェリーは四幕ものの悲劇『チェンチ』を著し、絵画でもこのレニをはじめ、ポール・ドラローシュやアントワーヌ・ド・ギニが、薄幸の美少女を題材とした絵を描いている。」
「いつの時代のことなんですか？」
「彼女の処刑されたのは一五九九年九月、この四ヶ月後には、同じサンタンジェロ城に幽閉されていた哲学者ジョルダーノ・ブルーノが火炙りにされている。」
　ブルーノという名前を耳にした途端、康男の全身に鳥肌が立ち、またぞろ金縛りにあうのでは……そんな恐怖心が広がった。
　康男は、夢や幻想に登場してくる少女、そのぼんやりした輪郭を思い浮かべ、そのイメージを画の少女にかぶせてみた。
（彼女だ。間違いない。）
「どうした、また真っ青だぞ。」
「大丈夫です。あれは起こらないみたい。」
「なんだ、あれって？」
「いえ、なんでも……それより、伊牟田さん、そのスタンダールの『チェンチ一族』って持ってたら貸してほしいんですけど。」
「残念だけど持ってない。でも、会社の資料室にあるはずだぞ。」

その言葉を背に、康男は伊牟田の美術室を後にしたのだった。

伊牟田は思った。この話、支社長に話すべきだろうか？
半年前のことだし、あれ以来、康男は落ち着いたようだ。女房の清花とも話したようだが、彼女も「康男さん、もう大丈夫ね」って言ってたんだが……。

## 13

一五九九年二月、ローマ　サンタンジェロ城塞
サンピエトロ寺院の東にカステル・サンタンジェロという巨大な城塞がある。もとは古代ローマのハドリアヌス帝の霊廟として造営されたものだが、中世から近世にかけては、ローマに一朝有事の際は、ローマ教皇の隠れ場所として使われていた。現に一五二七年には、クレメンテ七世はドイツ皇帝カール五世の半年に及ぶローマ略奪をこのサンタンジェロで耐え忍んだ。
さて、サンピエトロ寺院の左翼、教皇宮殿から一本の回廊がカステル・サンタンジェロへと続いている。人はこれをヴァチカン回廊と呼び、教皇は危険にさらされたとき、この回廊を渡ってサンタンジェロへと避難した。
ところで、サンタンジェロにはもう一つの顔がある。
異端審問所の牢獄としての顔である。

サンタンジェロは、大ざっぱに二つの部分からなる。一つは巨大な円形の土台部分。かつては霊廟として機能した部分だ。その円形の土台の上に、後世に造られた建造物が載っている。土台部分の内部は土と厚い石の壁に包まれ暗く陰湿で、その上に増設された建造物の部分は、少なくとも明るい陽射しの中で輝いている。「地下の迷宮」と「地上の楽園」とでも言うような感がある。そして異端審問所の牢獄は、地下迷宮とも言えるこの土台の胎内に、暗くうずくまるように存在していた。

ジョルダーノ・ブルーノは、この牢の一つに囚われていた。

ローマカトリックに対する異端の罪で捕らえられ、過酷な取り調べの中、すでに八年が過ぎようとしている。今も今とて、凄惨な「徹夜の刑」から解放され、ブルーノは牢の隅に死んだように横たわっていた。それは、後ろ手に縛られた両腕を、一昼夜にわたって綱で宙づりにされるというもの。その間、眠ることも許されず、短い中断の時でさえ、刃物のついた椅子の上に降ろされ、気を抜くことさえ許されない。拷問がおわったとき、ブルーノは気を失ったまま元の牢獄へと引きずられてきた。

どれぐらい気を失っていただろうか。ブルーノは寒さと強烈な肩の痛みで目を覚ました。どうやら左肩の関節は脱臼しているようだ。見ると、傍らにはパンと水だけの粗末な食事が置きっぱなしになっている。ブルーノは痛みをこ

らえ、水の入れ物ににじり寄ると貪るように水を飲みパンをかじった。冷え切った水が、体の震えに拍車をかける。

……足音が聞こえる。

ブルーノは耳をすませた。真っ暗な闇の中で、体中の感覚が異様に研ぎすまされ、男たちの様子が手に取るようにわかる。人数は二人……獄吏の足音ではない。あたりに気を配りながら、幅広の石段を、そっと足音を忍ばせながら登ってくる。恐らくサンピエトロの地下墓地から秘密の地下通路を伝って、このサンタンジェロへと忍び込んだものだろう。

……とすると、一人はバルトロメオに違いない。私生児だというが、フィレンツェのメディチ家につながる人物らしく、同じメディチ家から出たアレッサンドロ枢機卿を後ろ盾にしているようだ。

彼は、監視を買収したのか、それともアレッサンドロ枢機卿の手が回っているのか、易々とこの城塞に忍んできてブルーノに教えを乞うた。深夜のサンタンジェロ城で、この厚い牢獄の扉越しに、顔も知らない青年に「絶対的一者」や「宇宙の無限」を説く。おそらくはブルーノにとって、これが最後の授業となるだろう。

しかし、将来、枢機卿を目指そうという男が「自然魔術」や「宇宙の無限」に熱心に耳を傾けるとは……。見つかれ

ば異端者として捕らえられかねない。下手をすれば火炙りだ。その点では確かにメディチ家の血を引いているのだろう。かつてメディチ家のロレンツォは、キリスト教という権威に対抗するかのように、フィレンツェを人文主義学問の拠点に仕上げてしまった。華麗な教会建築や美術のパトロンとしての隠れ蓑をまとってはいたが……。

そのバルトロメオが「会ってほしい人物がいる」と言ってきた。聞けば、遠く日本から来たと言い、確か、名をトマスアラキと言った。

◇

ちょうど角を曲がった所から、足の裏に伝わってくるものが、土から固い石の感触へと変わった。

その途端、康男は先ほどからひっかかっていた凝りがスーッと解けていくのを感じた。

間違いない、あの少女はベアトリーチェ……ベアトリーチェ・チェンチだ。心のどこかで薄々そうだとわかっていたが、「まさか」という思いで打ち消してきた。今、それが一瞬の閃きとともにストンと心に落ちてきた。

と、同時に康男は康男でなくなっていた。自然に、あまりにも自然に「トマス荒木」という人格に移行していた。移行したということすら意識にのぼることはなかった。康

男、いやトマスは、自分の前を行く一人の男（バルトロメオ）の後を追っていた。

　見れば、バルトロメオの差し出す手燭に、ゆるい勾配の石段が照らし出されている。その石段を数段上がったところで、バルトロメオは立ち止まった。そして、後に続くトマスの方を振り返ると、左手の壁の上方へと目を向けた。その目線を追うように手燭が持ち上げられると、そこに鉄格子の填められた小さな窓が照らし出されている。

　その窓は、手を伸ばしても届かないような高さにあり、中を覗ける訳でもなく、かと言って、こんな地の底で明かり取りであろうはずもない。恐らくこの小さな窓が、牢内の澱んだ空気を入れ換える唯一の換気口なのかも知れない。

　バルトロメオの視線が再びトマスをとらえ、彼の注意を今度は前方へと導いていく。燭台の明かりが壁を這い、その明かりの行き着いたところに鉄金具で補強された黒い木製の扉が浮かび上がった。

　これがブルーノの幽閉されている牢獄の入り口だ。

　トマスはバルトロメオに促され、扉の前へと進んだ。扉には黒い鉄の閂がかけられ、頑丈な錠が下ろされている。バルトロメオは、燭台を足下に置くと扉をそっと叩いた。

「バルトロメオです」

「………………」重苦しい沈黙が流れた。

ややあって

「待っていた……日本からの客も一緒か」

苦しそうな声が、扉の下の方から聞こえてくる。

おそらくは扉に凭れかかるようにして屈み込んでいるのだろう。扉越しに体の位置を整えようとする様子が伝わってくる。その途端、「ウーッ！」と押し殺したような苦痛の叫びが上がった。

「すまない。一日中、吊されていた。どうやら左肩の関節が脱臼してしまったようだ」

「師よ、大丈夫ですか……」

「大丈夫だ。話しているほうが気が紛れる。まずは日本からの客人の声を聞かせてほしい。」

「……トマス、トマス荒木と言います。」

「トマスか……不可解な名だ。イエスの弟子の中で、インドで殉教したと伝えられ『黄金伝説』にも名をとどめているが、実はヴァチカンが異端と退けた最初の男、それがトマスだ。もっともヴァチカンは『トマス福音書』の存在を隠し続けており、隠蔽が続く間は、トマスもまたヴァチカンにとって聖人であり続けるわけだが……。逆に三位一体というカトリックの中心的な考え方を定着させた男、彼もまたトマスと言った。俺が若いころ尊敬したトマス・アキナスだ。かと思えばカトリックに背を向けるトマス・モアのような人文主義者もいる。君は一体どのトマスになるつ

もりなのか？」
　押し殺したような声と共に、扉の内側からは、時折、苦しそうなうめき声が漏れる。
「…………」
「まあいい。まずは、君がなぜ日本から来たのか話してくれ。今の俺にとって、好奇心こそ最良の気付け薬なのだから。」

14

　トマスとミゲルが、はるばるローマへ渡ってきたのは、コレジオロマーノで学び宣教師に叙階されることも勿論だが、何よりもイエスの生涯とその教えを日本語に翻訳するため、そのテキストとなるべき聖書を持ち帰るためであった。
　そして、この企画を支えたのが長崎内町の乙名衆（町年寄り）の一人であり、朱印船貿易家として名を馳せた末次興善とその子平蔵である。
　末次興善、もとは平戸・松浦藩、木村家の出だと言われる。平戸の木村家と言えば、ザヴィエル以来のキリシタン信者で、この血筋からは、日本人として最初に神父に叙階されるセバスチャン木村や、アントニオ木村、マリーア木村デ村山等々、日本の殉教史に名を残す多くの人々を輩出している。
　興善自身は、血のつながりから博多の豪商末次家を継ぐ

ことになるが、彼自身も博多や秋月にあって、バリニャーノ神父やフロイス神父等の宿主をつとめるほどの熱心なキリシタンであった。彼の時代になって、「これからの貿易は南蛮貿易だ！」と、当時、長崎甚左右衛門によってイエズス会に寄進されればかりの、岬の地「長崎」へと進出した。

というのも「長崎」がイエズス会に寄進されるや、ポルトガル船は、イエズス会の肝いりで、平戸を捨て長崎へと入港するようになっており、しかもポルトガル商人に対するイエズス会の影響は大きく、イエズス会神父の斡旋なくしては、日本人商人はポルトガル船が舶載した生糸一本手に入れられないという状況だったのだ。

このため、多くの商人が長崎に集まり、多くの教会が長崎に出来、多くの商人がキリシタン信徒になった。そして、これら商人の手によって長崎の町が形作られていった。

ザヴィエル以来のキリシタンであり、博多の有力な貿易家でもあった末次興善が、町おこしの中心になったことはいうまでもない。

こうして長崎の町は、当初、教会領としてスタートし、南蛮貿易を目指す商人たちによって大きく発展してきたわけだが、この現状を朝鮮出兵のため肥前名護屋に滞陣していた豊臣秀吉が知った。日本の統一を目指す為政者にとっては、日本国内に、ローマ教皇に属する教会領が存在すること自体、由々しき問題であった。

秀吉の脳裏には、かつての主君であった織田信長と、加賀の国を拠点に宗教独立国を目指す石山本願寺との間の凄絶な争いが、まだ悪夢のようにこびりついている。
「いかん、絶対に許すことはできん！　長崎を天領（幕府直轄領）とせよ！」
　というわけで、長崎は幕府直轄地として召し上げられることになった。
　もちろん、ポルトガル船の寄港地として使うことは大歓迎。従ってキリスト教も黙認ということになる。下手にキリスト教を禁じて、貿易がストップされては困るのだ。
　このような利害関係の輻輳する長崎において、末次興善は、その「扇の要」的存在であった。ザヴィエル以来の熱心なキリシタンとして、イエズス会、ひいてはポルトガル商人とつながり、朱印船貿易家としては、長崎奉行や西国大名の投資を引き受け、長崎内町乙名としては、長崎商人の利益を代弁する立場にあった。息子平蔵の代になると、長崎代官として、江戸幕府の命令伝達者としての立場が加わることとなる。

　そんな興善のもとを、年老いたポルトガル人宣教師が訪ねてきた。名をギリエルモ・ペレイラという。日本人以上に日本語をよく話すと言われた人物で、興善ともよく気が合った。

かつて、リスボンの孤児院から、東方での布教活動に励む神父たちの下働きをするよう、たくさんの少年たちがインドへと送られてきたが、ペレイラも、そんな孤児たちの一人だった。

ペレイラは、今でもリスボンの港から、インドへと出発した日のことを、よく夢に見る。送る者、送られる者がリスボンの埠頭で、お互い二度と会えないことを分かりながら、「きっとまた会おう」と励まし合った。乗船してからも、少年たちの弾く楽器の調べが風に乗っていつまでも聞こえ続けていた。今も、あのときのもの悲しい調べがペレイラの耳に焼き付いている。

そんなペレイラが、興善のもとを訪れた理由は、興善も支援している加津佐セミナリオにおける出版事業のことだ。

かつて少年使節としてローマへ渡った中浦ジュリアンやドラードを中心に、不干斎ファビアンやペレイラといったセミナリオやコレジオの教師連中、それにトマスやミゲルら生徒たちが一つになっておこなっている日本語活字による出版活動。

その究極に目指すところが、イエスの生涯が語られている新約聖書の日本語版。

かつてジュリアンらは、ローマで、シクストゥス五世から、完全なラテン語聖書をキリスト教世界へ送り出すという教皇の夢を伝えられた。

日本語に訳すテキストとして、どうしてもシクストゥス聖書を手に入れたい。
　しかし、今のイエズス会は、
「日本人は宣教師とするより、同宿として教会の下働きをさせることが向いている。彼らは野心的でキリストの教えを自らの出世のために利用する。宣教師になりたがるのもそのためであり、彼らには高尚なキリストの教えを理解できない。むしろその奥義を教えれば、野心的な彼らは、キリストの教えをゆがめ伝え、別の宗旨を創りだすことであろう」と、日本人を蔑むばかりか、警戒しており、この計画に協力してくれるどころか、かえって邪魔さえしかねない有様だ。

「セミナリオで学ぶ日本の青年を、何名かローマへ送ってはいかがでしょうか？」
　興善がいきなり答えを返した。
「少年では、時々の判断が要求されるこの仕事の役に立ちますまい。かといって、あまり歳のいっている人間でもいけませんなあ。感受性が強く、しかもラテン語をよくしゃべれる青年が必要になります。」
　ペレイラは、我が意を得たりとばかりに
「おります。トマス荒木という青年、彼は日本へ来ているどんな宣教師にも負けないぐらいきれいなラテン語を話しま

す。それにミゲル後藤、彼はラテン語ではトマスに及びませんが、父の宗因から印刷術について手ほどきを受け、印刷のことに関しては、若い連中の誰にも負けないでしょう。」
「ミゲルというと、日本語を活字化した、あの後藤宗因の倅ですか？」
「そうです。あの後藤宗因です。」
「……それは都合がいい。あの男なら後藤庄三郎とも縁続きだ。」
　後藤庄三郎というと、後には、金座・銀座を預かり、家康のブレーンの一人となる人間――つまり家康の経済顧問団の一人になるような人間なのだ。
「ローマへ行く費用、私どもが出しましょう。」
「ただし、ひとつ条件がある。」
　途中から座に加わった興善の息子、末次平蔵が初めて口をきいた。
　彼は後に、長崎代官村山当安を陥れ、自ら長崎外町代官の職を奪い取ることになる人物である。
「無事日本へ帰られたら、ローマで、またその道中で見たこと、聞いたこと、すべての情報を、まず、この末次平蔵に伝えてほしい。ローマのことばかりでなく、ポルトガルや他の国々、例えばエスパーニャ（スペイン）のこと等も出来るかぎり知りたい。条件は以上だ。」
「出来るかぎりでよろしいのです。どこまで調べてほしい

ということでなく、ローマで見たこと、聞いたことを、土産話にまず息子の平蔵に話してやっていただければ……、私は、その頃まで生きてはおれませんでしょうなあ。イエス様に聞くほうが早いでしょう。まあ、パライゾへ行ければの話ですが。」

15

　こうしてトマスとミゲルはローマへとやってきた。

　日本のイエズス会は、この動きをローマのイエズス会本部へ伝えていた。

「日本人を信用なさらないように」と。

　しかし、イエズス会総長アクアヴィーバはこの報告を無視した。

「日本にイエス様の生涯を伝えたい、イエス様の教えを伝えたいという日本の人たちの思いを、私は捨てておくわけには行かない。」

　二人がローマに着いたとき、イエズス会総長アクアヴィーバは、トマスらを呼び寄せ、日本語に翻訳するためのキリスト教書籍の選択とそのテキスト収集に全面的な協力を約束してくれた。

そして、その目録作成の指導に、イエズス会の教会博士ロベルト・ベラルミーノ枢機卿を付けるという破格の待遇を準備してくれた。日本のイエズス会が、日本人を蔑視し、「聖書の翻訳など問題にならぬ」「日本人に彼らの言葉で書かれた聖書など与えた日には、何をしでかすか分かったものではない。彼らに都合のよい解釈を与え、新しい宗派さえつくりかねない」「日本人は教会の下働きに使っておればよいのだ」……
　そんな態度を取ったのとは、大きな違いがあった。
　トマスらはコレジオ・ロマーノでの学習のかたわら、日本へ持ち帰るべきキリスト教文献の目録作成を進めることになった。これについてのベラルミーノ枢機卿の援助指導は徹底しており、ヴァチカン図書館の利用は言うに及ばず、利用したい図書館があれば便宜を図ってくれるばかりか、個人の蔵書でも閲覧を希望するものがあればどんどん申し出るようにという。
「そのためにはまず学ぶことです。学べば学んだだけ、あなた方が必要とする書物が見えてくるはずです。今は何が必要なのか、何を翻訳すべきなのか、まだ分からないはずです。まずは学ぶのです。まずは何事にも動じない信仰心を培うことです。」
　ベラルミーノの指導は彼らの生活面にも及んだ。普通、枢機卿が、しかも教会博士と言われる人が、一介の学生の

生活にまで関与すると言うことはない。それだけ「日本語版聖書」への思い入れも強かったのだろうが、それにしてもその配慮の細やかさには舌を巻くばかりだ。「最初は何かと疲れるだろう。しばらくは日本人二人だけの部屋にしてやってほしい」と言うかと思うと、後のことになるが、今度は、「コレジオの規則や生活に詳しくラテン語に精通した古参の学生と部屋を一緒にさせるように」という具合だ。

やがてトマスらがコレジオ・ロマーノでの生活にもなじんだ頃を見はからい、ベラルミーノは二人をコレジオの図書室へと連れだした。

かねて手配してあったのだろう。図書室の一番奥の机には、既に一冊の聖書が用意されていた。ベラルミーノは、二人をその席に案内しながら思った。

（実際、シクストゥス教皇はよくやった。今のこのローマで、シクストゥス教皇の息のかかっていないところなどあるだろうか。サン・ピエトロのドゥオーモは言うに及ばず、ローマの主要な場所に建てられたオベリスク、更には水道、下水道に至るまで、今、目にするローマの形すべてにシクストゥスの息がかかっている。）

しかし、この聖書だけは違った……。シクストゥスが何よりも心血を注いだのは、ウルガタ聖書（ラテン語聖書）の改訂だった。

本来なら、今ここに置かれてあるべき聖書はシクストゥス

教皇が改訂したものであるはずだ。かつてシクストゥスが「充溢せる使徒の力により、ここに宣告し、宣言する。この版は……主からわれわれに与えられた権威によって認可されたものであり、したがって真実かつ合法的なるものとして受け入れられねばならず、公共的ならびに私的な論争、説教、解釈において、疑問の余地なく拠り所とされねばならない」

そんな大勅書を発してまでカトリック世界に使用を命じた彼の聖書は、今やただの一冊も残っていない。二人の前にあるのは、シクストゥス＝クレメンテ聖書として、クレメンテ教皇の代に大幅に造りかえられたものだった。

トマスにはそれが不思議でならなかった。なぜただの一冊すら残っていないのか。普段、優しく指導してくれるベラルミーノ枢機卿も、シクストゥス聖書のことを訊ねると、急に人が変わったようになってしまう。

ベラルミーノは、二人を席に座らせると、
「あの聖書は誤植が多すぎるため廃版になりしました。次のクレメンテ教皇のとき、シクストゥス＝クレメンテ聖書として改訂版が出されました。今ここに用意したものがそうです。イエス様のご生涯を日本語に訳されるには、この版をテキストに使われるとよいでしょう。」

言葉は穏やかだが、そこには、冷たく聞く者をたじろがせるような威圧感が感じられた。

しかし、トマスはたじろがなかった。
「シクストゥス様の作られたものは、一冊も残っていないのでしょうか？」
「このシクストゥス＝クレメンテ聖書として残っております。」
「いえ、そう言う意味でなく、シクストゥス聖書そのものが一冊も残っていないのかということなのですが……」
「ありません！」
「どうしてただの一冊さえも残っていないのでしょうか？」
「……このことについては、これ以上、話すことはありません。あなたは服従ということをもっと学ぶべきです。今、あなた方の目の前に死んでしまった聖書でなく、現にカトリック世界を動かしている生きた聖書があります。あなた方はこの生きた聖書を日本の信徒の方々に伝えるべく、このローマまではるばる来られたのではなかったのですか。トマス、あなたは言われた。たとえ聖書全体の翻訳が無理だとしても、イエスさまのご生涯だけは日本の言葉で日本の信徒の人たちに伝えたいのだと。私は、そんなあなた方の、いえ日本の信徒の方たちの思いに動かされてこの仕事を引き受けたのです。さあトマス、ミゲル、あなた方の仕事を始めなさい。二人でどこまで出来るか、イエス様のご生涯を日本語に置き換えるのです。」
　こうして二人の仕事が始まった。コレジオでの学習の合

間を縫うように、日本語に持ち帰るべきキリスト教書籍の目録づくり、そして新約聖書の日本語訳……。

以来、トマスはこのシクストゥス聖書について忘れようとするのだが、何かが引っかかっているようで、どうしても忘れることができない。いつの間にか、そのことに対する疑問が、心の奥底に蜘蛛の巣を張ったように居座ってしまった。

「シクストゥス聖書はどうなったのだろう。いくら誤植が多いと言っても、ヴァチカン図書館にさえ一冊も残っていないというのはどういうことだろうか……」

後藤ミゲルも同じことを考えていた。

「俺だって見てみたい。誤植が多いなら多いで、出版に携わる者として参考にしたい。シクストゥス聖書とシクストゥス＝クレメンテ聖書を並べて、どこがどう変わったのか比べてみたい……と言っても、俺はおまえのようにラテン語が達者じゃないからな。」

## 16

トマスが学ぶコレジオロマーノ（ローマ学院）の一日は、冬期では朝五時半の祈祷・ミサ聖祭に始まり、夜は、夕食後七時から八時までのラテン語の復習で終わる。その後、

それぞれが良心の糾明をし、ロレトの聖母の連祷（夕べの祈り）をしてただちに就床することになる。

　当初トマスは、後藤ミゲルと二人きりの部屋をあてがわれた。それはベラルミーノ枢機卿の配慮によるのだが、その二人の部屋を、就寝後、秘かに訪ねてきた男がいる。

　彼の名はバルトロメオ。同じコレジオで学んでおり、アレッサンドロ枢機卿からの手紙を預かってきたという。アレッサンドロ枢機卿と言えば、中浦ジュリアンから何度も何度も聞かされた名前だ。

「何か困ったことがあれば相談に乗ってくれる人だ」と。

　二人はあわててバルトロメオを部屋に招き入れるや、燭台に灯りをともした。

「なかなか渡す機会がないので、思いあまってこんな時間に訪ねてきてしまった。不躾を許してくれたまえ。」

　トマスは挨拶を返すのもそこそこに、渡された手紙の封蝋を切ると、燭台の明かりにかざした。

　そこには中浦ジュリアンら遣欧使節の少年たちをなつかしむ言葉と共に、一度、コレジオの休みのときにでも遊びにくるよう、それだけが書かれていた。

　バルトロメオは意味ありげに

「君たちはシクストゥス聖書について知りたいんだろう。」

　それだけを言い残して去っていった。

　後で知ったことだが、バルトロメオは、アレッサンドロ

枢機卿と同じ、フィレンツェはメディチ家の出身だという。それも二人ともが私生児であることまで同じだった。それはともあれ、彼はトマスや後藤ミゲルがローマのコレジオロマーノで学ぶようになって初めてできた友人となった。

ところでローマ教皇庁は、シクストゥス五世の改革以来、検邪聖省をはじめとして十いくつかに分かれた聖省という中央行政機関を持つようになっていた。そのうち検邪聖省と教区聖省は教皇自らが長官となるが、その他の聖省の長には枢機卿が選ばれ長官となる。

これら聖省の中に礼部聖省があった。

十六世紀に至るまでは、典礼的礼拝の様式について、法王庁は独占的統一権をもっていなかった。典礼祭式の本質は、どこでも一定し昔から普遍のまま維持されてきたが、この本質の表現様式に至っては、教区によりまたは修道会により、それぞれ特徴を持って小差を生ずるようになった。この違いがあまりにはなはだしくなると弊害も少なくない。そこでトレント公会議は、聖務日課書、ミサ典書の改訂統一をはかり、この統一化をつらぬくためにと、シクストゥス五世が創設したのが礼部聖省だった。

その礼部聖省こそ、アレッサンドロ枢機卿が長官を務めるところだ。

いきなりだった。
「ジュリアンは元気ですか？　マルチノは、マンショは……使節の少年たちはみんな元気ですか？」
バルトロメオに連れられ、ヴァチカンの礼部聖省を訪れたトマスとミゲルを、アレッサンドロ枢機卿は掻き抱くようにして声をかけた。
「そうですね、みんな、もう少年ではないですね。しかし驚くべきことです。日本に印刷機が入ってまだ十年ほどにしかならないと言うのに、もう日本語の印刷が始まっているという。私は日本語のことはよく知りませんが、聞けば、大変複雑な言語体系だというではないですか。それを日本の人たちは日本語の活字セットまで作り上げたという。考えられないことです。」
話の流れは、いきおい日本語版聖書作成の夢に及ぶ。話しながらトマスの脳裏に、日本の仲間たちの顔が浮かんだ。トマスにラテン語を教えたポルトガルの捨て子院出身のペレイラ修道士、日本語の鉛活字作成に命をかけた後藤宗因とドラード、シクストゥス聖書のことを熱っぽく語った中浦ジュリアン……そんなたくさんの思いに促されるように、トマスは恐る恐るシクストゥス聖書のことを口にした。
アレッサンドロの顔がくもったかに見えた。
「この典礼聖省はシクストゥス様がおつくりになられ、ミサ聖祭の執行、秘蹟の授与、列福・列聖についての仕事を

行います。シクストゥス様が教皇の座にお着きになられて以来、私がこの仕事に当たってきましたが、聖書の改訂に当たって教皇を助けたのは教皇秘書官だけなのです。その秘書官もまた、シクストゥス聖書と同じく、既にこの世にはおりません。」

「…………」

「今ではこのローマで、シクストゥス聖書のことをもっともよく知っている人間……それはベラルミーノ教会博士をおいて他にはおられないでしょう。あなた方の目録作成のお手伝いをされている方です。」

　ミゲルが言葉を挟んだ。

「ベラルミーノ様は、シクストゥス聖書のことを訊かれるのを嫌います。あのお優しい方が、そのことになると怒りさえ露わになさいます。」

「………………」

「あの聖書に一体何が起こったのでしょうか。あの聖書のことになると、誰もが口を閉ざしてしまう。まるで触れてはいけない秘密でもあるかのように……本当に、誰一人、知らないのでしょうか？」

　トマスが問うた。

「それを知りたければ、あの男に会う以外ない………あの男に問うてみるしかないでしょう。」

　まるで独り言のようにつぶやくアレッサンドロに

「そんな方が、ベラルミーノ様以外におられるのですか？」

　と、トマスが畳みかけるように問う。

「……います。しかし危険が伴うことです。勇気もいります。それはあなた方の肉体にとって危険というばかりでなく、あなた方の魂にとっても大きな危険となるものです。あなた方が知りたくないと思うようなことまで知ることになるでしょう。あなた方にその勇気と覚悟がないのなら、シクストゥス聖書は忘れることです。」

　トマスは、いつしか自分が抜き差しならぬ穴へはまりこんでしまっているのに気付いた。ここまで聞いて引き返せるわけがない。ここまで聞いて、自分の好奇心と折り合いを付け引き返せる人間がいたとしたら、それこそ勇気のある人間だろう。

　トマスは思った。

（アレッサンドロ様は言葉とは裏腹に、俺たちに本当のことを知らせたがっている。だからこそ、こんな話し方をするに違いない。一体、この方はどこまで知っておられるのだろう……。）

　彼は二人に考える猶予を与えなかった。躊躇する間もなく一人の男の名が、彼の口から飛び出していた。

「ブルーノ……、ジョルダーノ・ブルーノと言うイタリア人です。彼は今、サンタンジェロ城塞に異端者として幽閉され取り調べを受けています。」

アレッサンドロは反応を確認するかのように、じっと二人の様子を窺っていた。

……が、突然、

「トマス、ミゲル、どちらか一人、週に一度、バルトロメオと共にサンピエトロ寺院の祭具室の整理を手伝ってください。コレジオへは私の方から話を付けておきます。」

結局トマスがその役割を担うことになった。二人が危険を負うべきではないし、一人がコレジオに残ることで、何かことがあったとき、対処も容易であろう。それがアレッサンドロ枢機卿の考えだった。

しかし、アレッサンドロと言いベラルミーノと言い、シクストゥス聖書と一体どう関わっているのだろう。そのうえ同じ枢機卿でありながら、二人の間には、何か目に見えない対立関係のようなものさえ感じてしまう。

それから日ならずして、アレッサンドロ枢機卿からコレジオのほうに、

「祭具室の整理の後、トマスに、ぜひ手伝ってもらいたい仕事がある。今日は私のもとに泊まらせたいのだが……。日本の話もいろいろ聞きたいのだ……」という連絡が入った。

その夜のことである。トマスはバルトロメオに導かれ、枢機卿館に設けられた小祭具室へと降りてきた。この小祭

具室には、地下の墓所からサンタンジェロに抜ける地下通路の入り口があるという。

　バルトロメオは小祭具室に入るや、手燭をトマスに預け、壁に掛けられたタペストリーをめくり、その内側へと潜り込んだ。絨毯が人の形に盛り上がり、やがて、そのふくらみがモゾモゾ動いたかと思うと、まるで壁に吸い込まれたかのように消えてしまった。

「トマス、来てくれ……」

　押し殺した声が、トマスにも後に続くよう促した。

## 17

「この一月から、俺の異端を告発すべくベラルミーノ枢機卿が異端審問委員長となった。彼は、君たちが日本へ持ち帰るべき書誌目録作りを指導しているのではなかったのかね。」

　ブルーノが唐突に口を開いた。

「奴はいろんな意味で優秀だ。俺にかけられた二六〇を越える異端嫌疑項目の中から、バカげた意味のない告発内容を無視し、そのうえで、俺の著作や俺の思想のみに焦点を絞って責め立ててきた。バカげた告発内容なら、のらりくらりとかわすことも出来る。私が間違っていましたと、何度だって奴らに頭を下げてもやれる。しかし、今や俺の思

想が、俺の哲学が問われている。これを否定することは、自分を否定することに他ならない。

…………にもかかわらず、俺は否定してしまった。徹夜で両腕を後ろ手に縛られ吊される拷問の中で、なんとかこの状況から逃げ出したい一心だった。『もし法王庁、ならびに諸卿がこの考えをどうしても異端であると言われるならば、そして法王もかく考えられ、神の御心もかく思し召されるのであれば、撤回する用意がございます』と……。」

「その考えとは、宇宙の無限ということを指しているのですか？」

バルトロメオが問いかけた。

「その通りだ。加えて人は輪廻するということ……、そしてイエスもまた人間だということ。このことだけは、どんなことがあっても譲れないと思っていたが、それを俺は……」

「師は言われました。言葉はどうにでもなる。いくら言葉や理論で相手を言い負かせたとしても、その人の思いを変えることは出来ない。心まで支配することは出来ないと。」

バルトロメオが無駄と知りつつ、師のブルーノを慰めようとでもするかのように言葉を挟んだ。

「肉体とは弱いものだ。肉体はその本性として、これを守ろうとする。そのために痛みがある。それでも俺は、精神が肉体を超越することができると思っていた。

日本からきたトマスよ、このことは君が探しているシクストゥス聖書とも、あながち無関係ではないのかも知れない。……君はキリストの誕生をどう考える。処女懐胎をどう考える。」
「……私の学んだ『ドチリナキリシタン』には、《人の業ではなく、ただスピリツサント（聖霊）の計らいたもうことなればスピリツサントより宿され給う》と記されてあります。」
「そんな馬鹿なことはない。肉体は肉体の法則に従わざるを得ない。キリストの神性と彼が人として生まれたことを混同してはいけない。奴らはキリストを神として祭り上げようとする。その上で、キリストを頂点とする教会のヒエラルキーを確立し、人の世界を支配しようとする。だからキリストは人であってはいけない。そこから処女懐胎というバカげた伝説を作り出した。神と、その子イエス、そして聖霊が、三つにして本質は一つだというような三位一体というまやかしを考え出した。この三位一体という思想を生み出したのも、トマスという男だ。そこにはいかにして教会の権威を守るかという思想しかない。その思想は、教会が、そしてローマ教皇が、人の世を支配するための道具でしかなかった。
　しかし実際はどうだろう。イエスはヨセフとマリアの子として生まれた。人間の子として生まれたのだ。だからこ

そ人の苦しみをわかった。人の弱さを知っていた。イエスが人として苦しみ抜いた末に行き着いた教えだからこそ、彼の説く教えは人々の心に染みこんでいった。それが本当のところではなかったろうか。

俺は、イエスの偉大さは、厳格で許すことを知らないユダヤ教の教えの中から、許すという愛の教えを生み出したことにあると思っている。それは彼が人の子として生まれ、人の弱さ、悲しみを知り抜いていたからこそ出来たことだ。イエスの誕生は、神の受肉でも、ましてイリュージョンや方便でもなく、歴史的な事実だ。イエスは紛れもなく一個の人間として生まれた。そして、その自分こそが他ならぬ神の子であり、ひいては、すべての人が神の子だという自覚を持つに至った。それがイエスの説いた教えの中心だと思う。

その教えを書き換えた奴らがいる……。

パウロやペテロ、それにマタイやルカが著したとされる四大福音書といわれるものは、教会が人々を支配するための道具として使われてきた。また道具とするために、聖書は書き換えられてきた。そう考えてまず間違いはないだろう。

……さて、いよいよもう一人のトマスについて語るときが来たようだ。君はこの四大福音書と言われるもののほかに、『トマス福音書』や『マリア福音書』なるものが存在したことを知らなければならない。」

トマスにとっては初めて聞く話ばかりだった。初めて聞くというより、今まで聞いてきたイエスの姿とまるで違っていた。母から聞いた話とも、右近様から聞いた話とも、セミナリオのオルガンティーノ神父から聞いた話とも違っていた。それでいて反発を感じるどころか、不思議にトマスの心に染みこんでいった。

そんなトマスの心に、ブルーノは、まるで別の器に水を移し替えでもするかのように話し続けた。

イエスが処刑された後、キリストの教えは、ユダヤ教の一派として存続していた。キリストの弟子たちは、イエスが立ち向かった宗教的権威……その象徴ともいえるエルサレムの神殿で祈りを捧げていたのだ。なぜなら、多くの弟子たちが、そうすることこそ唯一キリスト教が生き残れる道だと知っていたからだ。

「仕方がないことだ……」と。

しかしこのことに異を唱え、ユダヤ教会に牙をむいた男がいた。イエスの死後、弟子となったギリシャ系ユダヤ人ステファノだ。

彼は、「イエスはこんなことをしろとは説かなかった！」と仲間を批判し、ユダヤ教の神官たちを非難した。

「イエスの教えは、一部のユダヤ人だけのものではない。イエスの教えはユダヤ教の律法に縛り付けられてはいけな

い。割礼を受けた者にも、割礼を受けない異邦人にもあまねく知らしめられるべきだ。それこそイエスの望まれたことだ」と。

　ユダヤ教には、ユダヤ人こそ神に選ばれた民だという選民意識がある。そして神に選ばれたユダヤ人である印に、ユダヤ人男子は割礼を受けねばならない。それが神との契約であり、割礼を受けない異邦人にユダヤ教を伝えることは律法が厳しく禁じていた。キリスト教がユダヤ教の一部である限り、世界の人々に神の愛を伝えることは出来ない。ステファノはまた言う。

「ユダヤ教の神殿に神などいない！」と……。

　ステファノは、その過激さゆえに、やがてユダヤ人の手によって告発され、神殿前の刑場に引かれていき石打ちの刑によって殺された。

　見せかけの平安は終わり、再びユダヤ教徒によるキリスト教徒の迫害が開始された。ステファノを殺した民衆は、醒めやらぬ殺戮の興奮と怒りに支配されたかのように、イエスの弟子たちの隠れ家を襲った。そんなユダヤ人迫害者の中にパウロもいた。パウロは信徒たちを誰彼かまわず捕らえては牢へ放りこんでいく。それでも飽きたらずローマへと逃げる信徒たちを追ってダマスコ近くまで来た。そのときパウロは、突然、光に打たれて目が見えなくなった。

　このときだ、パウロが神の声を聞いたというのは。そし

て己の過ちに気づき、ユダヤ教を捨てキリスト教に改宗したという。『パウロの回心』として知られている事柄だが、パウロはこの後、ステファノの意志を受け継いだかのように、ユダヤ人以外の異邦人たちにキリスト教を伝えて回る。この伝道の旅は、ユダヤ教の迫害をはじめ、伝えた先々での様々な現地宗教からの迫害を伴った。

　パウロは言う。

「私は投獄され、鞭打たれ、死に面してきた。私たちは極度に耐えられないほど圧迫されて生きる望みすら失ってしまい、心の内で死を覚悟し、自分自身を頼みとしないで、死者を蘇らせる神を頼みにするに至った」と。

　そしてローマに赴き、ここで皇帝ネロのキリスト教徒迫害により殉教することになる。狂ったネロは、己の気に入った世界を創造すべく古いローマの街に火を放った。そして、その罪をキリスト教徒に着せローマ市民の不満を血なまぐさい処刑騒ぎで有耶無耶にしようとしたのだ。ローマの競技場は、キリスト教徒たちの処刑場となった。彼らは生きながら獅子に食われ、生きながら照明代わりに油を塗られ燃やされていった。そんな迫害の中、ローマに布教に来ていたペテロさえ逆さ磔となって殉教した。

　こうして誕生したばかりのキリスト教は、革新的なパウロと穏健派のペテロという二つの支柱を同時に奪われたわけだが、ネロ以後もキリスト教徒の迫害は止むときがなく、

ローマのキリスト教徒たちは数々の迫害を耐え抜き、やがてコンスタンティヌス大帝に至って、やっとその庇護を勝ち取ることができた。

コンスタンティヌスが、そのライバルであるマクセンティウスと戦うに当たって、いまやローマ中に広がったキリスト教を、ローマの民心を一つにするために利用しようとしたのだ。

西暦三一二年のある日、戦いに赴こうとするコンスタンティヌスは、空中に十字架が浮かぶのを見たという。彼は、これをキリストの加護とし、クルスの旗を押し立てて戦いに挑んだ。これまで隠れてキリストを奉じてきたローマの民心は奮い立った。

おかげでコンスタンティヌスは、マクセンティウスをミルウィィウス橋の戦いで撃ち破ることが出来、その翌年、古代ローマ帝国内でのキリスト教信仰を認めたミラノ勅令が発せられた。

これによって、キリスト教はローマの国教とされ、それにふさわしい形が整えられ世界宗教としてスタートすることになる。

数々の犠牲の上に、漸くステファノやパウロの希望が叶えられるに至ったわけだ。

……が、恐らくこのとき、聖書が書き換えられたのだと思う。

まず、イエスだが、彼は神の一人子として神と同等の位置に置かれることになった。皇帝を神と祭ってきたローマでは、イエスの神格化は必要な措置と思われたのだろう。また安息日がユダヤ教の土曜日から日曜日へと変えられた。ローマ人の太陽神崇拝への迎合からだろう。そしてもっとも大きな改竄にあたる、「人は輪廻する」という思想が教えからそぎ取られた。国王やローマ教皇の過去世が羊飼いや乞食ではまずいというわけだ。またキリスト以後、神の声を聞く者はサタンとされた。ローマ教会以外に、神の声を代弁する者が現れては教会の権威が失墜するというわけだ。
「これが君の国へ伝えられたカトリックの起こりという訳だ。だがトマスよ、キリスト教はローマに伝えられた以外に、エジプトに逃れたグループとエルサレムに残ったグループがあったことを忘れてはならない。」
イエスの死後エルサレムに残ったグループは、ユダヤ教との様々な軋轢を経てその一部となり、やがてユダヤ王国がローマとの戦いで滅びると共に自然消滅した。しかしエジプトに逃れたグループは、恐らくマグダラのマリアを中心にイエスが語った言葉を伝え、やがてグノーシス主義という神秘思想と結びつき、あるいはゾロアスターに影響を与えマニ教を生み出し、逆にこれがキリスト教に影響を与えたりと、様々な変容を伴いながらも、次第にローマンカトリックを脅かす存在となっていった。

この流れの中から、やがてキリスト教最大の異端と言われたカタリ派も生まれてくることとなる。
「マグダラのマリアと言われるのは、イエスに救われた娼婦ではなかったのですか？」
「ローマの奴らが言っているだけだ。マグダラのマリアが娼婦だったとはどこにも書いていない。むしろイエスの一番近くにあって、彼の身の回りから、教壇と言えるかどうか、ともかくも彼女はイエスのグループの経済をも支えた人間だ。恐らく裕福な家庭の娘だったのだろうが、彼女の存在はそればかりでなく、イエスの妻という立場にあった人だったとも考えられる。」
「イエスに妻がいたなんて信じられません。」
「なぜ信じられない。彼が神の一人子だからか。彼は普通の男性ではなく、処女から生まれた透明で純粋な幻のような存在で、女に何の関心も寄せなかったとでも言うのか。」
「そうではありませんが……」
「イエスは偶像を拝むことを否定した。それをカトリックの奴らはイエスを偶像化し祭り上げてしまった。」
「…………」
「トマス、聞け。ユダヤ教では妻を娶らないことは罪なのだ。妻を娶らず男としての役割を果たさないことは異常なことだ。もし、イエスが妻を娶らなかったとしたら、そのことはイエスを語る上で必ず記されねばならないことだとは思

わないか。イエスについてすべての記録が、そのことについて沈黙を守っている以上、イエスは普通に妻を娶っていたと考えて間違いはないだろう。それだけではない。イエスが十字架にかけられたとき、ペテロを始め十二使徒といわれる男たちは、イエスを否定し逃げ回っていた。イエスを最後まで見取ったのは、マグダラのマリアを中心とする女性たちだった。そして、どの聖書が伝えるところも、イエスが復活したとき、天使がイエスの復活を伝えた相手は十二使徒たちではなくマグダラのマリアに対してであったし、復活したイエスが最初に姿を現したのもマグダラのマリアに対してであった……そうだな、トマス？」
「はい、天使の声を聞いたマグダラのマリアが、イエスの遺体を安置した洞窟へ行ってみると、洞窟を蓋していた巨大な石が動かされ、中にイエスの遺体はなくなっていました……」
「その通りだ。では、このことはいったい何を意味すると思う？」
「…………」
「聖書を編纂した者たちも、マグダラのマリアの存在――彼女の働きや彼女の立場――を無視することは出来なかった。マリアがイエスにとって何であったか知っている者が、当時はまだ多数いたからに違いない。このように彼女はイエスのもっとも身近にいた人間に違いないし、ペテロたち

にとってもっとも頭の上がらない存在だったようだ。
　さて、イエスの死後、弟子たちは、イエスがどんなことを話したのかを語り合った。イエスの教えを言葉として定着させようとしたのだ。それが新訳聖書のはじまりと言える。そこには、君たちの知らない、イエスの生々しい声を伝えた『マリアの福音書』さえも存在したようだ。もちろん、そこに語られているのは、イエスの母マリアの言葉ではなく、イエスの妻マリアが語ったイエスの言葉の数々だ。
　残念なことだが、イエスの教えを巡って対立が生じた。
　ペテロを中心とするグループと、マグダラのマリアを中心とするグループの葛藤だ。キリスト教という組織を温存させようとするとき、イエスの生々しい声は理想に走りすぎ、すぐに実現できないものもあったはずだし、伏せて通りたいものもあったはずだ。
　ペテロたちが何か言おうとするとき、『逃げ回っていた人間が何を偉そうなことを！　イエスの最期を見とったのは誰だと思っているの』そんな言葉が返ってきはしなかっただろうか。
　ローマンカトリックが、ことさら女性の存在を低く見、差別的にとらえ、何かあれば魔女の烙印を押そうとするのも、彼ら男性弟子たちの後ろめたさから来ているのかも知れない。
　ステファノやトマスは、どうやらマグダラのマリアに共

鳴していたように思える。生前のイエスを知らないステファノが、イエスの生の声を伝えるマリアに傾倒していったことは十分に考えられるし、生前のイエスを知る弟子たちの中にもイエスの教えを身近に聞いた者たちは、マリアこそがイエスの生前の言葉を忠実に伝えていると考えたことだろう。ペテロやヤコブは、キリスト教の生き残りを考慮するあまり、イエスの教えにある箇所で目をつぶっていると。

　迫害によりエジプトに逃れたものの、こう考えたトマスは、『マリアの福音書』をもとにイエスの教えを伝えていったのではなかったろうか。それが神秘主義者たちに影響を与え『トマスの福音書』が生まれたのでなかったか。」

　ブルーノは一気にここまでをしゃべった。トマスばかりか、バルトロメオにしてもはじめて耳にする内容だった。

　バルトロメオは興奮のせいだろうか、体のふるえが止まらないようだ。ブルーノへ問いかけようとする声が喉の奥に張り付いてしまったかのようにかすれている。

「……あんまりです。たとえ本当だとしても、知らずに済ませたらと思います。特に日本の友人の前では……」

「メディチの人間らしくないことを……それに我らが日本の友人はシクストゥスの聖書について知ろうとしている。目を伏せては通れないぞ。」

「このことが、シクストゥス聖書とどう関係しているというのでしょうか。師は、シクストゥス聖書のことを知りた

がっている日本人がいると私が話したとき、『おまえの母こそが知っているのでは』、確か、そう言われました。それはどういうことでしょうか……」

「……もう夜明けが近いのではないかな。」

　言われてみると、トマスとバルトロメオの座る地下の石段に、上の方からわずかな朝の光が忍び込み始めている。

　ブルーノの閉じこめられた地下牢にも、その上にある小さな換気口を通して、ささやかな光が届けられているに違いない。ブルーノは、そこから朝の訪れを感じているのだろう。

　ブルーノは言葉を続けた。

「夜の闇の中では隠せても、朝の光はすべてをあらわにせずにはおかない。見張りの者の口を金で黙らせておけるのも、闇の中だから出来ることではないのか。

　…………もうおまえたちはいかねばならない。

　バルトロメオ、まずはフィレンツェへ行け。シクストゥス聖書をについて知りたいという日本の友人の心が変わらないようなら、何とかおまえの母に会わせるのだ。アレッサンドロ枢機卿の口添えがあれば難しいことではないだろう。その後でもう一度会おう。

　まだ俺が生きていればの話だが……」

# 第三章　メディチ家とカタリ派

## 18

一二二九年

トマスらがフィレンツェを訪れたのが一五九九年だから、一二二九年というと更に三七〇年も遡ることになる。その年の四月二日のこと、場所もパリのノートルダム寺院。といっても聖堂はまだ完成しておらず、竣工まではまだ六年を待たなければならず、ようよう全貌を現したその外壁も作業のための足場で覆われていた。

セーヌ川を見下ろすこの教会の正門前に、公開処刑のための木組みの舞台が組まれている。上には上半身を裸にされた男が、ローマから派遣された教皇特使の前に跪いている。

その裸の背中に鞭がうなった。痛みからというより、屈辱と怒りのため、男の顔が赤く染まった。教皇特使は、そんな男に、ローマ教皇への服従を誓わせる。その間も、鞭は手加減なく男の背中に振り下ろされ、特使は、まるで男の憎悪と屈辱感を味わうかのようにその顔をのぞき込んでいた。

男の名は、トゥールーズ伯レイモン七世。西はピレネー山脈の麓から東は地中海沿岸のコート・ダジュールに及ぶ

南フランス一帯を支配下に治める大領主である。支配地域の広さもさることながら、この地は、地中海貿易の交易品を北欧につなぐ重要な位置を占めており、その経済的な繁栄が、トゥールーズ伯に、フランス国王に対抗させるだけの力を持たせていたと言えよう。

つまりは、北フランスにあるフランス国王にとって、この地域を制圧しないかぎり、フランスの統一はあり得ないと言うことだ。しかも、「北」と「南」では文化もまるで違い、とても一つの国という感じはない。たとえば言葉の問題一つとっても、フランス語で「諾」にあたる言葉は「ウイ」であるが､南フランスでは「オック」となる。このため、南フランス一帯は「オック語を話す地域」の意味でラングドック（ラング・ド・オック）と古くから呼ばれ、北フランスとは一線を画していた。

それはさておき、ではなぜ、南フランス一帯を支配下に治めるレイモン伯が、屈辱的な鞭打ちのもと、ローマ教皇への服従を宣誓させられていたのだろうか。

この地域は古くからカタリ派キリスト教徒の活動の拠点であった。というのも、この地が地中海交易の物産を北欧へつなぐ中継地点だったため、回教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒などが行き来し、あるいは定住し、宗教的に寛容な地盤が形成されていた。しかも、カトリックの堕落した僧侶を見慣れている目には、カタリ派の人たちの清貧に徹した生活ぶり

は新鮮であった。他に対してその教えを強要することは絶対になく、気づいた者だけが行えばよいのであって、気づかない者は、まだその時期が来ていないと考える。

だから、カトリックのように「金を稼いではいけない」「金を稼ぐことは罪だ」などとは言わない。この態度に、商業を基盤とするこの地の多くの貴族や商人が心を開き急速にカタリ派の教えは広まっていった。

この頃のヨーロッパは、異端運動（ヴァチカンから見ての話だ）が全盛となった時期である。各地に相次いで出現した異端運動のなかでも、カタリ派は組織立った、息の長い活動によって群を抜いている。独自の司教、典礼、教義をそなえてカトリック教会の攻撃と迫害に耐え、一二世紀の後半までに、ヴァチカンからみて「もっとも邪悪で、もっとも強力、もっとも危険な」異端といわれるほどの成長をとげていた。

このため、ヴァチカンはカタリ派を目の敵にした。これを許せば、ヴァチカンによる支配体制が根本から崩れてしまう。そして、その最大の拠点とされ、その排除が最も困難とされた地域が、この南フランス一帯なのだ。カタリ派を支持する領主たちは、ヴァチカンの要請であろうと、これをむやみに迫害する愚を犯さず、むしろ正統と異端とのあいだで、討論集会のような催しをしばしば開催した。領主の主催によるこの種の集まりは、数人の審判者を立てて

公開で実施され、たいての場合は妨害もなく整然と進行したという。

つまりは、領主たちは、どちらか一方に荷担するのでなく、討論によって何が真実かを導き出そうとしたのだ。そして多くの場合、カタリ派が優勢となった。しかも、着飾ったカトリックの僧侶が、質素な衣を身にまとう女性の完徳者に歯が立たないというケースが頻出し、民衆はますますカトリックから心を離していくことになる。

そんな領主の中で、最も大きな力を持っていたのが、トゥールーズ伯レイモン六世、つまり、今、ノートルダム寺院前で鞭打ち刑を受けるレイモン七世の父親であった。

一二〇八年一月、ヴァチカンはレイモン伯を糾弾すべく教皇特使ピエール・ド・カステルノーを彼のもとに派遣した。それがあろうことか、ローヌ河畔のサン・ジルで暗殺されてしまった。確たる証拠があったわけではないが、犯人はレイモン伯の家臣とされた。これ以前、ランスの公会議で、異端は「大逆罪」であり、「異端の幇助者はその領地を没収されるべき」ことが決められていた。

ローマ教皇は、フランス国王に対し、ラングドックへ十字軍の派遣を要請した。フランス国王にとっても、これを機に南フランスを制圧することができる。ヴァチカンはヴァチカンで、カトリックに対する最大の驚異を取り除くことができる。こうして両者の利害が一致し、一二〇九年七月、

イスラム教徒に対してでなく同じキリスト教徒に対する初めての十字軍が、リヨンからトゥールズを目指し南下を開始したのだ。

所謂、第一次アルビジョア十字軍と呼ばれるものだが、戦いは二十年におよび、国土は疲弊し、民衆の困窮も限度となった。戦いの当事者も、レイモン六世からレイモン七世へと移り、フランス国王もフィリップ・オーギュストが死亡し、幼いルイ九世がこれに代わった。ことここに至り、遂にルイ九世の母ブランシュ・ド・カスティーユと教会側の提案を受けて、レイモン七世が和平交渉に踏み切った。国土が荒らされたとはいえ、南部は勝利しないまでも全面的に敗北したわけではない。北部の方でも、南部の武力制圧には多大の犠牲が必要なことを思い知らされたのである。

にもかかわらず、和平交渉のためモーへ赴いたレイモン七世を、フランス側は監禁し、随行者を人質とした上で、「モーの協約」を押し付け署名させてしまった。本文はレイモン伯の誓約として一人称で書かれ、伯だけが署名する形であったという。

この協約によって、レイモン伯の領土は半分以下に減らされ、さまざまの名目で莫大な賠償金も支払わねばならず、三一箇所の城あるいは城砦都市が解体され、それ以外の九箇所には十年間、フランス国王の部隊が駐屯することになった。異端の撲滅がきびしく命じられたのはもちろんとして、

レイモン伯の負担のもと、カトリックの教育のためトゥールーズ大学の設置が定められた。

しかし、協約の眼目は、当時どちらも九歳であったレイモン七世の娘ジャンヌと、王ルイ九世の弟アルフォンス・ド・ポワティエとをめあわせ、ジャンヌを伯の唯一の相続人とすることであった。伯領はいわば嫁資として王家に差し出されたのであって、言い換えれば、事実上フランス領に併合されたということであった。この屈辱的な協約に署名し、王と教会に死にいたるまで忠実であることを誓わせられたあと、レイモン七世はパリ、ノートルダム寺院前庭での鞭打ちの儀式に引き出されたのである。

「あれだけの人間たちと、あれだけの国々を相手に、こんなにも長期間抵抗してきた男が、シャツと股引のまま、足もあらわに祭壇に引き出されるのは、見るも哀れであった」と、年代記は語っている。

同じ頃、パリの修道院にトマスという名の少年が預けられた。

トマスは、レイモンの長男である。ジャンヌの二卵性の双子の弟として生まれた。生まれついての聾唖であったため、彼が三歳になったとき、乳母の実家に預け育てさせることにした。「農家の子として幸せに人生を全うしてくれれば」とのせめてもの親心であったが、フランス側は、わず

かでも伯領を継承する可能性のあるトマスを、パリのシトー派修道院に預けさせることをも要求してきたのだ。

レイモンはこの屈辱を忘れなかった。

そして、カトリック側も過酷な迫害と、陰険な密告制度を導入したにも関わらず、南フランスからカタリ派を払拭することはできなかった。やがて、第一次アルビジョア十字軍の終結から十四年後、モンセギュールに籠城したカタリ派と第二次アルビジョア十字軍との間に、凄絶な死闘が再開されることになる。

レイモン七世の不遇の息子トマスは、十六歳になるまで、パリの北方に位置するシャーリ修道院に預けられた。このシャーリ修道院は、一一三六年にルイ六世肥満王が創建したシトー派修道院で、後に聖王とあだ名されるルイ九世も頻繁に訪れたという。

というのも、第一次アルビジョア十字軍に勝利したものの、フランス南部は、密告制度と異端審問所の厳しい摘発にも関わらず、依然、カタリ派の勢力を払拭することができない。また、そのカタリ派の脅威を背景に、モーの協約を不当とするレイモン七世が再び大規模な反乱を起こし、この反乱をイギリスが後押しするという始末。今回は何とか鎮圧できたものの、フランス南部という火種を抱えているかぎり、フランスを虎視眈々と窺っているイギリスや、アンチクリストの異

名を持つ神聖ローマ帝国皇帝フリードリッヒ二世が、いつ牙をむいてくるとも限らない。

何としてもフランス南部を制圧しなければ、そして、そのためにはカタリ派を一掃しなければならなかった。カタリ派の一掃は、目的でもあり、フランス南部を制圧するための大義名分でもあった。このため、ルイはカタリ派に対抗させるため、ヴァチカンと一緒になってシトー派に肩入れするようになったのである。

しかし、ヴァチカンがカタリ派に対抗させたシトー派やフランシスコ会、それにドミニコ会にしたところで、最初からヴァチカンの尖兵だったのではない。最初は、カトリックの僧侶や教会の堕落を攻撃することを看板に掲げ歴史の舞台に登場してきたのだ。

たとえばシトー派は、奢侈に流れた既存の修道院に反発して、一一世紀初頭にブルグンドのシトー（ブルゴーニュ地方）に設立されたのが始まりだという。その後シトー派は、やはり僧侶の堕落に嫌気のさしていた北ヨーロッパの人たちの支持を得、大きな政治力を発揮するまでに成長していった。同じ頃、やはり僧侶や教会の奢侈に反対し、フランシスコ会やドミニコ会が誕生した。教会の華美・荘厳を批判し、豪華な衣に身を包み、美食におぼれるカトリック僧侶に非難の声をあげる修道会は、ややもすればカタリ派と同じ異端視されてもおかしくはない。が、ヴァチカンはこれらの

修道会を弾圧するのでなく、かえってカトリックの正式な認可修道会に指定し、その修道会士を異端審問官として使うことで、ヨーロッパ南部を覆った異端カタリ派に対抗する勢力として利用しようとした。既存のカトリック修道会には、カタリ派に対抗できるだけの力も、人気もなかったのである。

「毒は、毒をもって制す」ということだろうか。

この策は功を奏し、これら修道院では、異端とは何か、正統とは何か、異端を見極めるにはどうすればよいのか、異端者を改宗させるにはどうすればよいのか……それらの学問や研究が盛んとなり、やがてこれら修道会は理論武装した、カトリックの尖兵となってカタリ派をはじめとする異端の撲滅と摘発に大活躍することとなる。

そんなシトー派修道院、それもルイ九世の庇護するシャーリ修道院で、トマスは一番多感な時期を過ごした。トマスにとって幸いしたのは、修道院院長の存在だった。

院長は宗教家というよりも、どちらかというと学者肌の人間だった。トマスの肉体的ハンディに対しても冷淡ではなく、むしろ同情的であった。トマスの「聞こえない」「しゃべれない」というハンディを、口の形を覚えさせることで、ともかくもしゃべれるようにした。

ただ、アクセントを無視し大声でしゃべる様子は、何か異様に不自然であり、時に痴呆のようにさえ見られた。し

かし、そんな外面に反比例して、トマスの頭の中は、「神学」「哲学」「歴史学」「修辞学」等々、ありとあらゆる知識の宝庫となっていた。

院長は、聞こえないというトマスのハンディを「読む」ということ、「書く」ということで補わせようとした。トマスは口の形からしゃべることを覚えさせられると、写字生としての教育を院長直々に受けることになった。院長は、字の形を音にしてしゃべるよう、トマスに教えた。文字を見て、次に院長の口の形を見て、その音を真似る。それが出来ると文字を書き写した。その繰り返しが毎日続けられ、こうしてトマスはいつしか写字生となった。最初の頃、図書室からはトマスの異様な言葉が流れ続けた。仲間の修道僧たちは辛抱強く耐え、やがてトマスも文字を口にすることなく写せるようになった。

そんなトマスの平和が崩れるときが来た。

トマスが十六歳になったとき、院長が亡くなった。

新しく来た院長は、トマスのすることなすこと、そのことごとくを嫌った。新院長は美しいものを好んだ。神は、自分の姿に似せて人間をつくった。だから美しい人間は、神に最も近いという理屈だ。醜い者や五体が不満足な者は、それだけで神から呪われた存在である。いつも人の口元を覗き込むようにしているトマスの所作は美しくない。見苦しくさえあった。その話し方は美しいどころか、聞き苦しく、

新院長には、それはサタンに心を奪われた者の所作としか捉えることが出来なかった。
　院長は、トマスのことを
「自分の中からサタンを追い出せば、聾唖は自然と癒されるはずだ。いつまでもそのままである者は、自分がサタンを引き寄せている、いや、サタンを離そうとしない罪深い人間である。おまえの父親が、教会に対し、ルイ国王陛下に何をしているか。まさにサタンの所行ではないか。その償いをおまえが果たすのだ。」
　院長は、そう言ってことあるごとにトマスを鞭打った。またトマス自らにも、朝夕に鞭打ちの苦行を課した。
「自らを鞭打ちながら、神に許しを乞え。おまえとおまえの父親のしていることを神に懺悔するのだ。痛みと血が、いつかその罪を浄化してくれるであろう。」

　トマスは、修道院からの脱走を決意した。城でも、牢獄でもないのだから､別に難しいことではない。晩課が終わり、みんなが寝静まるのを待って抜け出せばよいことだ。
　物乞いしながらでも南を目指せばよい。父のもとへ帰れば迷惑になるだろうか。父のレイモンは、モーの協約を不満として反乱を起こしたが、結果は惨敗だった。加勢したイギリス国王ヘンリー三世はボルドーに逃げ、父レイモンはモーの協約を忠実に実行することをあらためて誓約させ

られ、一命をとりとめた。一二四二年十月、いわゆるロリスの和平といわれているものだ。そこへ人質となっている息子が逃げ込んだとなれば……

父のもとへは帰れない。かといって、このまま我慢することも出来ない。もうここに居るのはいやだ。もう、一日でも居たくなかった。父には悪いと思いながら、食堂で盗んだわずかの残り物を頬張りながら、トマスは修道院を抜け出した。

しかし抜け出した途端、騎馬の一団に遭遇し、あっという間に捕らえられた。

「修道士がこの夜更けに、村へ女でも漁りにいく魂胆か！」

「あ・や・し・い・も・の・で・は……」

「なんだ、その話し方は？　怪しくないわけがなかろう。……殿、いかがいたしましょう。いっそ殺してしまいましょうか。」

「坊主の首を刎ねても自慢にはなるまい。それに俺たちがここへ来た目的は、まさにこの男に会うためだ。この男、レイモンの息子トマスに違いない。坊主殿、いかがでござるかな……？」

トマスは、闇の中で、必死に騎士たちの口元に目を凝らした。

確か「トマス」と言ったようだ。俺の名前を知っているのだろうか。

「ト・マ・ス、トマスです！」
「大声を出すな、みんな起きてしまうぞ。せっかく忍んで来たというに。」
　男の名はルイ九世、新院長となってからは初めての訪問だったが、それにしても修道士たちが寝静まった頃を見計らって、わずかの供回りだけを引き連れての来駕とあっては、参詣というわけでもなさそうだ。
「殺してはならん。この男には、これから働いてもらわねばならん。今宵、この修道院を訪ねたのも、この男が目当て。それがいきなりの出会いとは……」

　ルイは、トマスをモンセギュールへ送り込むことを考えていた。
　モンセギュールは、カタリ派の人々にとって信仰生活の中心である。
　モーの協約以後、密告制度が導入され、異端の罪は家族にまで及び、たとえ死後であっても異端者とわかると墓が暴かれ、死体は見せしめのため町を引き回され焼き捨てられた。このようにカタリ派への弾圧は熾烈を極めたが、にもかかわらず、ヴァチカンもフランスも、カタリ派をラングドックから一掃することができなかった。
　それは領主であるレイモン七世がカタリ派の弾圧に力を入れなかったこと、また外部から来た異端審問官たちの峻

厳さが、かえって人々の愛郷心と自専心を煽り立て、その結果、現地のカトリック修道会さえ「異端撲滅」というスローガンにそっぽを向いてしまったことがあげられる。ヴァチカンは、現地の修道会の頭越しに、主にドミニコ会士を異端審問官としてラングドッグへと派遣したのだ。

これに反しカタリ派の結束は堅く、人々は、助け合い、かばい合いながら迫害の嵐をやり過ごそうとしたのだが、日々に激しさを加える異端審問の前に、モンセギュールを信仰の最後の砦として集結するに至った。

モンセギュールは、もとは、フォワ伯の封臣レイモン・ド・ベレイユの所領であった。

それが今から三十年ばかり前、カタリ派側の申し入れによって、それまで廃墟に近かったこの城が信者の利用に供されるようになった。城の改築はカタリ派の経費負担で進み、その設計には彼らの考えが織りこまれたといわれる。

高くそびえ立つ断崖に四方を囲まれた天然の要害ともいうべき地理的条件が幸いして、第一次アルビジョア十字軍の間でさえ、モンセギュールは安全な信仰の場所であり続けることができた。

カタリ派信者たちは、苛烈な異端審問体制のもと信仰の火を絶やさずにいるため、このモンセギュールを、信者の力が集中する最後の砦として設定したのである。

一二三二年のある日、カタリ派の主だったメンバーが、

領主のもとを訪ねた。モンセギュールを決定的にカタリ派の本拠地とすべく、ひたすら懇願を重ねるためであった。

承諾することは、フランス国王に対する反逆と見なされても仕方がない。領主は長くためらった末、ようやく承諾の回答を与えたという。

これ以降、異端審問から逃れた人々や騎士たち、それにカタリ派聖職者たちのモンセギュール定住が開始され、城の改築に加え、人事・組織においてもカタリ派運動の再整備が進められ、モンセギュールは、カタリ派の教えが厳密に保持される場所として、また最後の砦として名実ともに信仰の中枢となっていった。

ラングドック各地から危険を冒してここを訪れた信者の数は、この時期総計千人を超えたといわれ、死に瀕した身体ではるばる運び込まれて来た人も少なくない。ここで高名な完督者の手でしかるべき臨終の救慰礼にあずかること、すなわち「モンセギュールで死ぬ」ことが、帰依者にとって最高の喜びとなっており、切り立った岩の上にそびえるモンセギュールの城砦はそのまま、荒波のなかでの「箱舟」、南部の人々のまなざしが吸い寄せられる霊的中心となっていたのである。

ルイは、このモンセギュールへトマスを送り込もうというのである。

トマスが、レイモン伯の隠された子供であるということが、この計画を容易いものにするであろう。何もトマスをスパイに仕立てようと言うのではない。ルイがトマスに望むことはただ一つ、生きて帰ってくること、それだけである。

　ルイは、ローマとも協議の上、既に第二次アルビジョア十字軍の派遣を決定している。

　この戦いに負けるつもりはない。時間はかかるだろうが、決して負けることはないだろう。ルイの懸念するのは、むしろ戦いの後のことだ。何としてもフランス南部を支配体制に組み込まなければならない。それなくしてフランスの統一はない。

　そのためにはカタリ派を知らなければならない。フランス南部の人間が、フランス南部の領主が、騎士が、何に心を動かされたのかを知る必要があった。

　聾唖ゆえにレイモン伯の本当の息子と認められなかった男が、パリのシャーリ修道院に預けられている。ルイが、このことを知ったとき、彼はこの計画を思いついた。

　ルイは、トマスに向かって言った。

「汝は、この修道院から逃げたいのか？」

　トマスは黙って頷いた。

「どこへ逃れる気か？」

「…………」

「どこへ逃げるかも考えておらぬのか。では汝に命ずる。

モンセギュールへ逃げよ。そこでカタリ派の者と暮らせ。そして、しっかりと学んでこい。ただし死ぬことは禁ずる。間もなく我々はモンセギュールを攻める。激しい戦いとなるだろうが、おまえは、何がなんでも死んではならぬ。生きて私の前に戻ってくるのだ。

……そう言えば、たしか私の弟に嫁いでいるジャンヌは、おまえの双子の姉ではなかったのかな。もしおまえが死ねば、姉のジャンヌもどうなるか分からぬぞ。よく言うではないか。双子は一心同体だと……」

トマスの顔に、一瞬、小さな憎悪の影が走った。力のある者の前で、憎しみや怒りを現すのは利口なことではない。トマスはあわてて自分の心を押し隠した。

ルイは、そんなトマスの前に小袋を投げ出した。

「当座の費用だ。トマス！　私の言うこと､分かったのだな。何をせずともよい、ただモンセギュールへ逃げ、カタリ派の者たちと共に暮らし､話を聞き､感じ､生きて私の下へ帰ってくること、それが、これからのおまえの役割と心得よ！」

トマスは恐る恐る頭を下げ、小袋を拾うと、しばらく後ずさりしたあと、逃げるようにその場から走り去っていった。

「殿、あの者、本当にあれで分かっているのでしょうか？」

「ヤツは、おまえの思っているようなバカではない。

……ところで、トマスと会ってしまえば、もう修道院に用とてないわけだが、せっかくここまで来たのだ。一休み

してまいろう。そろそろ朝課の時刻、トマスのおらぬことに気づいて騒がれるのも厄介だ。気づかれる前に院長には話しておかねばなるまい。」
「あの男では、むしろ厄介払いができたと喜ばれるでしょうな。」

## 19

一五九九年四月　フィレンツェ

フィレンツェ市街はアルノ川によって大きく南北に分けられる。その主要部は北側、つまりアルノ川の右岸に開けた区域であって、この区域にフィレンツェの象徴とも言える巨大なドゥオーモや政治の中枢となるヴェッキオ宮、その他サン・マルコ修道院やサンタ・マリア教会など著名な建造物が集中しているが、トマス等一行がフィレンツェで活動の拠点とするメディチ家のサン・ロレンティアーナ図書館も、またこの区域にあった。

ヴァチカンのクレメンテ八世宛に、フィレンツェ大公フェルディナンド一世から親書が届いたのは、トマスらがサンタンジェロ城塞に忍んだときから一ヶ月以上が過ぎ、ローマにも春の兆しが訪れてきた頃であった。

親書には、フランスのアンリ四世と王妃マルグリットが

離婚訴訟を起こすだろうことがほのめかされ、その節は「よろしくお取りはからい願いたい」との旨が書かれてある。そして最後に、日本からの留学生たちに、ぜひにでもロレンティアナ図書館を見学させたく、出来るだけ早い機会にフィレンツェへ寄越してほしいと結んであった。

日本人留学生をフィレンツェに呼び寄せ、メディチ家の蔵書をぜひ見せたいというフェルディナンド大公の背後に、アレッサンドロ枢機卿の動きがあったことは間違いないが、また、フェルディナンド自身、ライバルとも言える兄フランチェスコ一世が、日本からの天正遣欧使節を迎えたことへの対抗心がなかったとは言えない。
（フランチェスコ大公は、天正遣欧使節の少年たちを迎えて数ヶ月後、妻ビアンカと共に急死している。死因は、食中毒ともマラリアとも言われているが、弟であるフェルディナンドに毒殺されたという説が真実に近いと言えよう。）

ところで書簡にあるマルグリット王妃だが、彼女はメディチ家からフランス王家へ嫁いだカトリーヌ・ド・メディチの娘であり、そもそもアンリ四世との婚姻はフランスにおけるユグノー派プロテスタントとカトリックとの争いを収拾させるための政略結婚であった。ところが聖バルテルミーの虐殺をはじめとして数々の争乱の果てに、ユグノーからカトリックに改宗することでやっと王位に就いたアンリにしてみれば、今や政略としてのマルグリットの価値は薄れ、

却って石女(うまずめ)として世継ぎのつくれない王妃が疎ましくなってもきていた。フランスではたとえ寵姫に何人子供がいようと、サリカ法によって正式な王妃の子供たち以外に王位継承権は認められていない。このため、アンリとしては早々にマルグリットを離婚し、世継ぎをもうけることの出来る女性を王妃に据えることが何よりの課題となってくる。

その際、メディチ家がどう動くか……離婚が成立するなら、メディチ家としては、新しいフランス王妃をもメディチ家から送り込まなければならない。その条件が満たされなければ、この離婚訴訟は認められるべきではない。カトリーヌ・ド・メディチ亡き今、その娘マルグリットさえもがフランス王妃の座を降りるとなれば、メディチ家は、せっかく築いたフランスへの足がかりをすべて失うこととなる。

ローマ教皇クレメンテ八世にしたところで、アンリがカトリックへ改宗し、ホッとしたのも束の間、そのアンリが、ユグノーの信教の自由とその公民権を保証するべくナントの勅令を発したのだから、「奴の改宗は見せかけだったのか」と危機感を膨らませ、このうえはメディチと連携して、しっかりとフランスを押さえにかからねば……と思ったのも無理からぬことではあろう。

今のメディチ家にその力があるかどうかは別として、メディチ家当主フランチェスコとしては、法王がフランスに抱く不信感を大いに利用するべきだと考えた。この離婚が有効

か無効か、決められるのはローマ教皇以外にはない。早い話がアンリがメディチ家以外からフランス王妃を迎える気なら、マルグリットとの離婚は認められるべきではない。

　フランチェスコがクレメンテ八世に当てた書簡には、そんな事情と思惑が隠されていた。

　クレメンテ八世のメディチ家に寄せる期待が影響したのだろうか、トマスとミゲルのフィレンツェ行きはすぐに許可された。おまけにメディチ家出身のバルトロメオが、二人の案内役として同行することとなった。

「オルトラルノって、どんな意味なんだい？」

　ミゲルの問いかけにもバルトロメオは口を閉ざしたまま。先を歩くアルメーニ――彼はアレッサンドロ枢機卿が用心棒を兼ねてローマから付けてくれた従者だが、普段は陽気というか暢気というか、人の心に気を配ることなど考えていないという男なのだが、それが珍しくバルトロメオの顔色に気を遣い、この時もまるで彼の代わりとでも言いたげに答えた。

「フィレンツェの南側は、オルトラルノ、つまりアルノ川を越えた場所（オルトレ＝越える＋アルノ）という意味の名前が付けられております。昔はアルノ川南岸に住むこと

はレベルの低いこととされておりました。それがコジモ一世の奥方が結核を患い、このアルノ川南岸が気候が穏やかで身体に良く、ここで暮らせば回復にもつながるだろうと、ピッチ宮を買い取り、居を移されることとなったのです。今から五十年前のことですが、それからこの地区は急速に発展を遂げたと言われております。」

トマスとミゲルは、そんなアルメーニの説明を聞きながら、モンテ・ベッキオ橋を南に渡り、アルノ川に沿って西へ西へと歩を進めていた。目指すオノフリオ修道院は、このオルトラルノ地区の西のはずれにあるはずだ。フランチェスコ大公には行く先は告げていない。「オノフリオ修道院に行くときは、フランチェスコ大公にはくれぐれも内緒にしておくように」と、アレッサンドロ枢機卿から固く注意されていた。

今朝も、「フィレンツェの街を歩いてみたい」という四人に、宿泊先のロレンツォ修道院の院長は、「フランチェスコ様から言われております。ぜひ馬車で行くように」と勧められたのだが、連日の歓迎と見学にうんざりしていた四人は、フィレンツェを自分の足で歩いてみたいと丁寧に断り逃げるようにして出てきた。

しかし、目的地が近づくにつれ、バルトロメオの顔が次第に険しくなってくる。

「バルトロメオは母親に会うのがうれしくないのだろうか。」

フィレンツェに来てからというもの彼の様子が変だ。今日も出発する直前になって「自分は行けない、三人で行ってくれ」と言い出す始末。それを三人してなだめるようにして引っ張り出してきた。

気付けば、バルトロメオはまたも皆からずっと遅れて随いてきていた。

## 20

オノフリオ修道院の一日は午前一時四十五分の起床に始まる。

その後、朝八時のミサに至るまで手仕事や一時課・三時課の聖務日課を果たし、読書や六時課を経て十一時の昼食となる。昼食の後に約二時間の午睡の時間となるが、前もってエレオノーラへの面会を打診されていた院長は、この午睡の時間をトマスやバルトロメオ等との面会の時間に当てた。

面会の場所は、修道院の居間とも言える回廊が当てられる。回廊を意味する「クラウストルム」という言葉自体、しばしば修道院を表す言葉として用いられるほど、回廊は修道院と切り離して考えることができない。回廊は中庭に面して開かれており、ここから射し込む光の陰影が、一種

独特の雰囲気を醸し出していた。

この回廊は、ときに読書の場となり、ときに聖歌の練習場となり、黙想の場となり、場合によっては談話室ともなる。

トマス等は、この回廊の隅にある洗足用の長椅子で待つように指示された。

面会は、女子修道院ということもあり――特にオノフリオ修道院は、表面にこそ出ていないが、姦通の罪を犯した女たちが入れられる修道院ということもあって――面会は、エレオノーラの息子であるバルトロメオと、日本から来たという特別の理由でトマスとミゲルの三人のみが許され、従者であるアルメーニは、外で待つこととなった。

トマスとミゲルは長椅子に腰を落ち着けると、中庭の緑にホッと一息ついた。フィレンツェの町は、道も、壁も、広場も、どこもかしこも石で覆われている。日本人である二人にとって、土をその足裏に感じることもなく、緑を目にすることもない城壁に囲われた市街地の風景は、何か息苦しく妙に落ち着かないものであった。それだけに、この修道院の中庭につくられた庭園の土の匂いと緑のまぶしさがありがたかった。

そんな二人の前を、バルトロメオはイライラと行ったり来たりを繰り返している。

やがて院長に付き従うようにして、バルトロメオの母、エレオノーラが姿を現した。

三十歳で、夫カルロにこの修道院に入れられ、すでに二十一年が経っている。かつてコジモ一世に見そめられ、その子ピエロにまで思いを寄せられたその美貌は、すでに翳りを見せているものの、二十年にわたる内省がもたらしたものだろうか、彼女からは、何か包み込むような優しさがあふれているように思われた。

「一時間経ったら迎えにまいります。集会室が空いていますから、そちらを使った方がよいかも知れませんね。」

院長は、キビキビした中にも思いやりをにじませ、そう言うと静かに去っていった。

残されたトマスもミゲルも、何をどう切り出していいものか分からず、長椅子から立ち上がったままボーッとしていた。

頼みのバルトロメオはと言えば、ふてくされたように背中を向けている。

父カルロが、未払い給料を催促した使用人に暴力を振るい投獄されたとき、父は、獄中から、それが唯一できる復讐であるかのように、妻エレオノーラを、姦通を犯した女性を収容することで知られているこのオノフリオ修道院に入れるよう手配した。

そのとき、母は、父が下女に産ませた二人の幼い女児だけを修道院に引き取り育てることにしたが、まだ二歳のバルトロメオは兄たちとともに育児院に預けられることになった。

バルトロメオは、ものごころが付くようになると「自分がもし女だったら……」と、よく考える。そうすれば、母は、自分も修道院に引き取り一緒に育ててくれただろうに。
　そうは思うのだが、どうしても「自分は捨てられた」という思いが拭いきれない。
「仕方がなかった、仕方のないことだったんだ」
　何度、自分にそう言い聞かせてきたか知れない。

　そんなバルトロメオの後ろ姿を愛しそうに見つめていたエレオノーラだが、やがて、トマス等の方を振り向くと、
「どう致しましょうね。集会室でお話しいたしますか？」
「イ、イエ、できれば庭園を見ていたいのですが……」
　なんとか言葉を切りだしたトマスに、エレオノーラは優しく微笑むと、
「では少し回廊を歩きながらお話ししましょう。」

　エレオノーラは、日本の青年が、我が子バルトロメオと一緒に訪ねてくると知らされたとき、何か運命的なものを感じた。彼女が日本人というモものをはじめて知ったのは、今から十五年前、このオノフリオ修道院に入れられてから

七年が過ぎた頃であった。

　彼女の運命に同情を寄せるビアンカ大公女は、日本の少年使節をピサに迎えるという歓迎レセプションに、「ピサ滞在中、少年たちの面倒を見る修道女が必要です。男性神父だけでは細かいところに気が付きませんから」と、無理矢理理屈を付け、彼女を出席させるよう教会側に圧力をかけた。

　修道院に幽閉状態の七年間、はじめての外出だった。それもピサへの馬車旅行。そこで知り合った日本の少年たち、そしてローマ教皇の特使として派遣されていたアレッサンドロ枢機卿やビアンカ大公女との深いつながりもこのときから生まれた。

　今、別の日本人青年が訪ねてくるという。しかもシクストゥス聖書のことで。

　エレオノーラは、すべてを話したいと思った。それは聖書のことばかりでなく、自分の身に起こってきた様々な運命、それを自分がどんなに恨み呪ったか、何もかも話したいと思った。息子のバルトロメオにとって、それを知ることは残酷なことなのかも知れない。

　また神父を目指す日本人キリスト教徒にとっても、それは躓(つまず)きにこそなれ、決して励ましになどなる代物でないことは間違いがないだろう。

でも、なぜか話さなければならないと思った。そう決心すると、何ともさわやかな気持ちになった。今までどんなに懺悔しようと、どんなに神に祈りを捧げようと味わうことのなかった感覚。自分が今までの呪縛から解き放たれていくような……

「私は、フィレンツェの貴族ルイジ・メッセル・デッリ・アルビッツィを父に、ナニーナを母として、一五四八年にフィレンツェに生まれました。名付け親は、コジモ大公の奥さまであるエレオノーラ大公女。でも、エレオノーラ様は、私の名付け親になられてすぐにお亡くなりになりました。エレオノーラ様にとって、それは幸せなことだったのかも知れません。なぜなら、まさか自分の名前を与えた女児が、将来、夫の愛人になるなどとは想像もしなかったでしょうから。」
「コジモ様というのは、メディチ家を興し、フィレンツェを今のような芸術の都にした、いわばフィレンツェの恩人のような方だと聞いています。……でも、百年以上も前の方ではないのですか。」
　自分の生い立ちを話し始めたエレオノーラに、ミゲルが素朴な疑問をぶつけた。

◇

メディチ家の起こりは何も分かっていない。フィレンツェ近郊のムジェッロから起こり、十三世紀に入るや、フィレンツェ社会の中で急速に頭角をあらわしてくる。しかし、それ以前のこととなるとまるで分からず、一説にはムジェッロで炭焼きをしていたとも言われているが、それがなぜフィレンツェ社会でどのようにして身を起こしたのか、まるで中世の霧の中から忽然と現れてきたとしか言いようがない。

同じようにメディチ家の家紋である、金地に数個の赤い球（パッレ）を配した紋章の由来についても、謎だ。メディチの名が示すように、祖先の中に医師ないし薬種商がおり、赤い球は丸薬を表すのだという説と、メディチ家を大富豪とした当の銀行業にちなみ、赤い球は、貨幣ないし両替商の秤の分銅を表しているという説があるが、これにも確たる証拠があるわけではない。

分かっているのは、メディチ一族はフィレンツェにおいて高利貸しとして財をなし、それを土地や不動産に投資して経済力を伸ばしていったということ。やがて一族は銀行業に、政治に、貿易にと、分散して活動していき、それぞれのグループが衰退を繰り返しながら、メディチ一族のジョヴァンニ・デ・ピッチによって、十五世紀に至り、その繁

栄の礎が築かれたということである。
「ジョバンニ様には二人のご子息がおられました。そのお兄様のほうが、あなたがフィレンツェの恩人として聞かれているコジモ様のことです。そして、その弟御がロレンツォ様。これよりメディチ家はお兄様の流れと、弟様の流れに分かれることになります。
　コジモ様はメディチ家だけの繁栄でなく、フィレンツェの繁栄を願われました。それは フィレンツェ共和国の経済活動を活性化させるばかりか、数々の教会を建て、数々の芸術家を育て、百花咲き乱れる芸術の都を、この暗い世の中に現出させたのです。
　このフィレンツェを、経済・絵画・彫刻・建築・音楽・学問……人の才能が活かせる街にしよう、人の才能こそが神の世界を表し、この宇宙の秘密を解き明かすことができる、フィレンツェをそんな街に育てたい……コジモ様の夢は、ご子息のピエロ様に、またその子のロレンツォ様に受け継がれていきました。」
「コジモ様の弟様もロレンツォ様ですよね。」
「そう、叔父上であるロレンツォ様の名を頂いたのだと聞いております。このロレンツォ様と弟のジュリアーノ様は、衰退に向かうフィレンツェ共和国の最後の輝きでした。ジュリアーノ様が、パッツィ家の陰謀により暗殺されてからというもの、フィレンツェは、あの輝くような明るさを失い、暗い

陰がいつも漂っているような街になってい きました。そんな流れを必死にくい止めようとしたロレンツォ様も、やがてお亡くなりになり、フィレンツェは、いえイタリアそのものが、フランスやスペイン・オーストリアなど大国の覇権争いの舞台となっていったのです。フィレンツェの自由と独立も、ロレンツォ様の死とともに失われていきました。」

　豪華王と言われたロレンツォは、一四九二年、四十三歳でこの世を去った。マキャヴェッリは、その著「フィレンツェ史」の幕をロレンツォの死をもって閉じたが、それは同時に、フィレンツェにおける メディチ体制の崩壊を意味していた。

　ロレンツォの跡を継いだピエロは、美丈夫ではあるが凡庸で、乱世の器ではなかった。

　シャルル八世のイタリア侵攻に伴い、その独断的場当たり政策が仇をなし、フィレンツェ政庁は、メディチ家の永久追放を布告するに至った。

「日本から来たあなた方には複雑で退屈な話ばかりね。」

「イエ、日本でも同じようなことがありますから、よく分かります。」

「そうねえ、どこも同じよね。男は政治だ、戦争だと走り回り、挙げ句の果てに女性を食い物にする。……いけない、どこまでお話ししたでしょうね。」

「メディチ家がフィレンツェから追放されたところまでです。」

「そうそう、でもメディチ家は、外国の力を借りたり、教皇庁の力を借りたりして、このフィレンツェへ戻ってくるの。今から七十年ばかり前、皇帝・教皇軍がフィレンツェを包囲し、激しい戦いの末、ジュリアーノ様のお孫様に当たるアレッサンドロ様をフィレンツェの領主に据えてしまったの。でも、アレッサンドロ様はひどい暴君だった。政治はそっちのけで、女狂いに明け暮れ、挙げ句の果てに同じメディチ家のロレンザッチョ様に暗殺される始末。あなた方をここへ遣わされたアレッサンドロ枢機卿も、そんなアレッサンドロ様の女遊びの末にできた孤児のお一人だと言われているわ。」
「あのアレッサンドロ様が……」
「こうしてフィレンツェの支配は、ジョバンニ様のご子息のうち、兄のコジモ様からはじまった流れから、コジモ様の弟脈の流れに移っていくの。アレッサンドロ様亡き後、メディチ派の重臣たちが後継者に選んだのは、メディチ弟脈の中でも、英雄として誉れが高くフィレンツェ人に人気のあった黒隊長ジョバンニの息子・コジモ様。当時十七歳の若さだったにも関わらず、断固たる決断力を発揮され、反メディチ派を徹底的にたたき、大国スペインの大貴族でナポリ副王ドン・ペドロ・デ・トレド様の次女エレオノーラ様を妻に迎えスペインとの連合を深めるなど、早熟な絶対的君主と噂された人よ。コジモ様は、フィレンツェに従

属するトスカナ地域までをも含め、トスカナ公国とし、初代トスカナ大公コジモ一世となられたってわけ。」
「それで、コジモ一世と言われる方が二人いる訳ですね。一人は共和制フィレンツェを繁栄に導き国父と言われるコジモ様、そしてもう一人がトスカナ公国をお造りになったコジモ一世様……」
　ミゲルが妙に感心したような口調になった。
「でも、そのコジモ様も、トスカナ公国が安定するや、ご長男であるフランチェスコ様にトスカナ大公の位をお譲りになられた。それからよ、コジモ様の女狂いがひどくなったのは……」
（おまえは、まだ俺のことを恨んでいるのか 。）
　エレオノーラの心に語りかけてくる声があった。
（恨んでいないと言ったら嘘になるわ。私の名付け親だった大公女エレオノーラ様がお亡くなりになったとき、私は、まだ十四歳だった。たしかに悲しくもあったけれど、それより何より、あの荘厳な儀式に列席できたことが誇らしかった。十四歳の私は、あの荘厳さに負けまいと、できるだけ威厳を保とう、堂々と振る舞おうと、そのことに必死だった。そんな私を見初めたのが、あなた、コジモ大公様。もし、あのとき、あなたに見初められることがなかったら、私の人生はまた違ったものになっていただろうと……）
（俺はメディチの狂った血を呪った。妻のエレオノーラは、

そんなメディチの放蕩な血筋を嫌い、子供たちを異常な潔癖さで育てようとした。それに対する反発からか、娘のマリーアは幼くして貴族マラテスタと淫らな恋に落ちた。俺はそれが許せなかった。男を必死でかばう実の娘を、俺はこの手で殺してしまった。

俺の中でメディチの呪われた血が荒れ狂いはじめていた。

妻には、娘は悪性の発疹チフスで亡くなったと伝えたものの、エレオノーラは、それから間もなくして娘の後を追うようにして亡くなった。残された俺も、子供たちも、どれも性的にゆがんだところを持っていたようだ。特に三男のピエロがひどかった。奴は、フィレンツェの民衆から「悪しきメディチ」とまで呼ばれ、嫌われる男になってしまった。

俺は、妻の葬儀の席で、美しく成長したおまえに気付いた。見くびられまいと胸を張る表面の驕慢さの背後に、メディチの血にはない新鮮な輝きを、おまえは放っていた 。）

（きれいごとを言わないで！　あなたは、私が息子を産むや、私から離れていった。あなたがお嫌いになっているご長男のフランチェスコ大公様、あの方のほうがどれだけ実があったか。あの方も、ベネツィアのビアンカ様と道ならぬ恋に落ちられました。でも最後の最後まで、その恋に殉じられました。次から次へと、美女と見れば手を出し捨てる、そんなあなたとは大違い。それを苦しんでいるようなポーズで誤魔化すなんて卑怯です！）

（お前にそんなことが言えるのか。あの悪しきピエロに抱かれたお前に言えることなのか。ピエロは俺の息子だ。お前はあろうことか、俺の息子ピエロに心を寄せていった 。）

　長い沈黙を破るようにエレオノーラが言葉を発した。
「バルトロメオ、あなたの本当の父は、メディチ家のピエロ様です。」
「…………」
「私は十八歳で、コジモ様との間に息子のジョバンニを授かりました。その頃から、コジモ様の思いは、私の従姉妹であるカミーラに移っていったのです。寂しい思いを抱えて暮らす私にやさしい言葉をかけてくれたのが、コジモ様のご子息ピエロ様です。やがて私とピエロ様の間に愛が芽生え、コジモ様は、私とピエロ様の関係を隠すために、部下のカルロに私を嫁がせました。彼は、私的な決闘の末に相手を殺し、死刑を宣告されていたのです。そのカルロにコジモ様は、私との結婚を条件に赦免の提案をなされたのです 。
　……カルロは命惜しさに私と結婚しましたが、そんな結婚ですから、愛などあろうはずはなく、憎しみだけが日々膨らんでいくような毎日でした。そんななか、ピエロ様との関係が復活しあなたが生まれたのです。もちろん夫は、自分の子供だとは認めようとしません。それどころか、生

活は荒れる一方。とうとう給料の遅配に愚痴をもらした召使いを、逆上した夫は、銅貨の詰まった袋で殴り殺してしまいました。

夫カルロは、この罪で投獄されましたが、同時に獄中から、私をこの修道院に入れることを手配したのです。それが夫にできる、唯一、私への復讐だったのです。」

フィレンツ大公女ビアンカとエレオノーラとの親交が始まったのはこの頃からだ。

ビアンカは、エレオノーラに自分の運命を重ねたのだろうか、修道院へ入れられた彼女を面会して慰めるばかりか、日本から天正遣欧使節がトスカーナの地を訪問したときには、少年たちの面倒を見るという理由にかこつけ、彼女をピサまで連れだし、使節が滞在する間、ピサに五泊、フィレンツェで七泊をともに過ごしている。

ビアンカは、ベネツィアきっての資産と権力を誇る名門貴族カッペロ家の令嬢として生まれた。父であるバルトロメオ・カッペロは、当時の常として、ベネツィア一の美貌に生まれた娘を、カッペロ家の政略の道具として考えていたが、それがベネツィアの一介の銀行員に過ぎないピエトロ・ブオナベンチュリと駆け落ちしてしまった。

激怒した父バルトロメオは、二人を援助したピエトロの叔父であり、サルビアーティ銀行の支店長ジョバンニ以下、

娘の召使いや、駆け落ちに使ったゴンドラの船頭までを捕らえさせたが、特にジョバンニはピエトロの身内でもあり、二人の駆け落ちを手引きしたと考えられ、厳しい拷問にかけられたあげく獄死するに至った。

　二人は、フィレンツェで公証人をしている、ピエトロのもう一人の叔父ゼノビアのもとに身を寄せた。

　フィレンツェは、ベネツィアと仲が悪い。ルネサンスの歴史の中で、両国は激しい対立と抗争を繰り返してきており、それだけにフィレンツェっ子たちは、この世紀の駆け落ちにやんやの喝采を送った。かくしてピエトロとビアンカは、ゼノビアの家を隠れ家として秘密裏に結婚式を挙げるに至った。

　やがて二人のロマンスは、フィレンツェ中の評判となり、ベネツィア一と言われる美少女を一目見んものと、たくさんの野次馬がゼノビアの家を訪れるに至った。その野次馬の一人に、コジモ一世の長男であり、やがて父の後を継ぎトスカナ公国の君主となるフランチェスコまでが含まれていた。

　フランチェスコはこの時、神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン二世の妹ジョバンナに求婚している最中であったが、この政略結婚での駆け引きのなかで、ビアンカとピエトロの噂に心を動かされ、一目、ビアンカを見ようと、滞在先のバヴァリアからフィレンツェへ引き返してしまったのだ。

幸いゼノビアの家の近くに、メディチ家の別荘カジノ・デ・メディチがある。フランチェスコは、ビアンカを一目見ようとこの別荘に滞在し、遂にその目的を達成した。

そして、ビアンカのことが忘れなくなった。ことを察した物知り顔の取り巻き連中が、ピエトロを口説きにかかる。「フランチェスコ大公がビアンカを見そめられた。ぜひ謁見させるように」と。

そうなれば、ピエトロにも莫大な恩賞が与えられるであろうし、大公の保護を受けるようになれば、ベネツィアも手が出せなくなるというのだ。

ピエトロ自身、ベネツィアきっての遊び人と噂された人物であり、ビアンカにも飽きが来ている頃であり、何より惨めな暮らしに耐えられなくなっていた。そこへメディチ家への仕官と莫大な恩賞が約束されたのだから、ピエトロが心変わりするのに時間はかからなかった。

ビアンカの思いに関わりなく事が運ばれた。

このとき、すでにトスカナ大公は、コジモ一世からフランチェスコ一世に移り、后もハプスブルグのジョバンナをトスカナ大公女として迎えており、かくしてビアンカは、公然としたフランチェスコ一世の側室としてメディチ家に迎えられることになった。

しかし、后妃ジョバンナは、ハプスブルグの出を鼻にかけるような驕慢な女性であり、教養も低く、後期ルネサン

スの美しい宝石とまで呼ばれたビアンカの教養と美貌とは較べるべくもなく、いきおいフランチェスコの思いはビアンカに偏っていく。

ジョバンナにはそれが許せなかった。浮気ならまだ許せる。しかし、フランチェスコは結婚前からビアンカを愛しており､結婚してもそれをやめようとはしない。その不満を、ジョバンナは、神聖ローマ皇帝である兄マクシミリアン二世に訴える。

マクシミリアンは､それを｢遺憾である｣としてフランチェスコの父であるコジモに訴えることになる。大国ハプスブルグからの訴えに、個人の結婚問題だからと逃げることもできず、コジモは、息子フランチェスコの不行跡を罵る。

しかし、父のコジモ一世も、このことと前後して十四歳のエレオノーラを側室に迎えている。フランチェスコは「自分のことを棚に上げて」と父を責め、親子でそれぞれの性的不行跡を罵りあう日々が続いた。

この不幸な結婚生活は、ジョバンナの死をもって破局を迎えた。夫ばかりか社交界での人気までビアンカに奪われ、そのうえ、ビアンカがフランチェスコの子を身ごもったという知らせまでがもたらされた。ジョバンナは、すでに女児を出産していたが、その健康状態から、もう子供を産むことはできないだろうと言われていた。ジョバンナは嫉妬の炎に身を焼き、まるでその噂に挑戦するかのように、翌

年五月、未熟な男児を出産した。そして、その翌年にも再び身ごもった。

ジョバンナは得意の絶頂にあった。これであのベネツィア女を見返してやれると。

……が、これが彼女の寿命を縮めた。引き続きの妊娠で極度の貧血状態が続き、ある日、椅子から立ち上がった途端、貧血で大理石の床に倒れてしまい、腹部を強打したものか、出血がひどく、流産したあげくに意識が戻らないまま、帰らぬ人となった。

ビアンカにとっての不幸は、その後、フランチェスコが、彼女をトスカナ大后妃として迎えたことだ。ジョバンナが嫉妬の炎で、自らの命を縮めた気持ちは、ビアンカには痛いように分かる。女としての自分の気持ちなど認められることもなく、男たちの欲望や政治の道具として振り回されたあげく、嫉妬に身を焼き死んでいったジョバンナ。

そして、コジモ一世に見そめられ、捨てられ、望まぬ結婚を押しつけられ、あげくには修道院に押し込まれたエレオノーラ。

「私を慰めるため、修道院に通ってくださるビアンカ様の心には、そんな悲しみがありました。フランチェスコ様の弟君フェルディナンド様は（今の大公様ですが）、そんなビアンカ様のことを、大公女になりたいばかりにジョバンナ

様を殺したかのように言いふらす始末です。
（フェルディナンド様こそ、トスカナ公国を狙っておられた方だというのに……）
　そんななかで、ビアンカ様は、アレッサンドロ枢機卿様と出会われ、私にもアレッサンドロ様のお話をお聞きする機会が与えられたのです。
　今も決して忘れることができません。あのピサで、そして、このフィレンツェで、日本の貴公子方との楽しい集いの合間に、秘かにアレッサンドロ様からお聞きしたイエス様のこと、マグダラのマリア様のこと、そして本当のものを見つけようとする大きな流れがあるということを…………。」

## 21

　エレオノーラには、すべてのことが、あの日本の少年たちがイタリアを訪ねてきたときから始まったように思えた。歓迎舞踏会の席で、ビアンカ大公女にリードされながら顔を真っ赤にして踊った日本の少年たち。やがて少年たちも興奮さめやらぬまま、それぞれの部屋に引き上げ、華やかな宴も終わりを告げた。
　その夜、皆が寝静まった頃、フランチェスコ大公の書斎に、当のフランチェスコをはじめ、ビアンカ大公女、アレッサ

ンドロ枢機卿、エレオノーラの四名が集まった。
　フランチェスコが、エレオノーラに向かって、
「この集まりは非公式のものであり、公にされるべき性格のものでなく、ここに集まった者たちの生命ばかりか、メディチ家の命運にも関わる内容である。余は、后よりそなたの話を聞き、アレッサンドロ枢機卿とも相談した結果、ぜひ、そなたにも我々のことを知ってもらいたいと思った。いや、そなたには知る権利があると思った。
　どうじゃな、そなたに真実を聞く勇気があるかな。それとも、何も知らずに一生を終えるか。あながち、その方が幸せだと言えないこともないぞ。」
「どのような話か存じませんが、私の置かれている状況が、今より悪くなるとは考えられません。それに、このような話し方をされては、私の好奇心が治まりません。このまま知らずに済ませるなどとは思いも寄らないこと。」
　トマスは、自分やミゲルがアレッサンドロ枢機卿と出会ったときのことを思い出した。
　あのときアレッサンドロ枢機卿は、フランチェスコ大公と同じ言い方をした。
「あなた方が知りたくないと思うようなことまで知ることになるでしょう。あなた方にその勇気と覚悟がないのなら、シクストゥス聖書は忘れることです。」
　あのとき、トマスもエレオノーラと同じようなことを

思った。
「ここまで聞いて、自分の好奇心と折り合いを付け引き返せる人間がいたとしたら、それこそ勇気のある人間だろう」と……。
　トマス等に分かるわけもなかったのだが、それは、ある秘密な集まりに参加する儀式のようなものであった。その集まりとは、「インクナブラ」、その名は「印刷の揺籃期」を表しており、その目的と活動は、真実を活字に残すこと、および真実を追究しようとして出版された世界中の書物の収集と保護、そして真実を追究しようとする「人」と「団体」を支援することにあり、個人的には、その学習を通して「人生の真の目的」に自らが気付いていくことにあった。
　その起こりは、初代コジモ（コジモ一世ではなく、メディチ家隆盛の礎を築いた老コジモ）のときに創設された「プラトンアカデミー」にまで遡る。フィレンツェが芸術の都と呼ばれるようになったのは、このコジモ一人の力によると言っても過言ではない。コジモは、パトロンとして多くの芸術家を育てるとともに、哲学家や思想家、それに占星術や錬金術士、その他諸々の魔術士たち――と言っても、今の自然科学者や化学者、数学者、音楽家までを含んでいたが――の経済的擁護者であるばかりか、ヴァチカンからの庇護者でもあった。
　そして、彼自身が研究者でさえあった。

「プラトンアカデミー」は、表向きは、プラトンの「饗宴」を輪読し、これについて語り合う哲学者たちのサロンという形をとっていたが、その創設の目的は、「人間」という存在の根本を探ることであり、それを包む「自然」の秘密や法則性を探り出すことであり、それは、とりもなおさず「神」の秘密を知ろうとすることであった。

このために、キリスト教という枠に縛られることなく、ギリシャ哲学が学ばれ、アラブの医術が学ばれ、占星術や錬金術、それにカバラ（ユダヤ神秘主義）やグノーシス主義が学ばれ、またそれらが討論の論題にのせられ吟味された。

もちろん、こういった研究は、ヴァチカンから言わせれば「神を冒涜する」行為なわけだが、コジモは、一方で芸術家や建築家を奨励し、絵画や彫刻をもって神を賛美し、次々と教会を建てた。それは見方によれば、ヴァチカンへのカモフラージュと捉えられるが、コジモにとっては、このこと自体が、神への挑戦でさえあった。それは、あたかも「この荘厳な教会を建てたのは……、この輝くまでの美しさを創造したのは……、すべて人間の力、すべて人間の技、すべて人間の感性に依っている」と言わんばかりであった。

「少し待ってください。トマスの様子が変だ。」

エレオノーラの息子、バルトロメオが話の流れを止めた。

見れば、トマスは脂汗を流し、目は虚ろで小刻みに震え

ている。
「……だ、大丈夫です。はじめて聞くことばかりで……なぜか、グノーシスという言葉を耳にしたとき、全身に鳥肌がたち、今も震えがおさまりません。これは一体どうしたことでしょうか？」
　トマスが苦しそうに言葉をはさんだ。
「……それは恐らく、あなたの中にある過去の記憶、といってもあなたの生まれる前の記憶が表に出てきたせいだと思われます。」
「……て、転生のことを言っておられるのでしょうか。それなら、キリスト教は否定しているはずですが……」
「カトリックでは否定しています、それを認めれば都合が悪いから……。教皇や皇帝の過去世が羊飼いや盗賊だったらまずいでしょう。でも元々のキリスト教では、決して輪廻ということは否定していなかったわ。」
「そういえば、ブルーノも言っていました。人は輪廻する。イエスも人の子だって……」
　ミゲルが得意そうに言葉をはさむ。
「そうね、最初は聖書も教会もなかった。イエスさえ礼拝の対象じゃなかった。ただイエスの話す内容だけがあった。イエスが説こうとしているもの、イエスが目指そうとしているものだけが問題だった。」
　エレオノーラの話は、キリスト教以前から存在するグノー

シス派と呼ばれる人々のことにおよんだ。グノーシスとは、ギリシャ語で知識を意味する。この派の人たちは、何よりもまず、万物の存在理由を説明し得る完全な知識を所有することを望む。それはただ単に信仰にとどまらず、霊的な直感によって神の啓示を得、自らを叡智の世界の極みにまで高めようとする。それは勢い肉体を堕落した物質世界ととらえ、その肉体から己の魂を解放することを究極の目的とするようになる。

イエスの死後、彼の妻であったマグダラのマリアは、彼の生の声、生の教えを伝えて回ったが、その教えは、このグノーシス派の流れと混じり合い、その流れから、やがてマニ教が生み出され、キリスト教最大の異端とされるカタリ派が生み出されるに至った。

それはイエスのもともとの教えが、いやイエス自身がグノーシス主義の影響を受けていたことに他ならなかった。

グノーシス派には男女の区別がなかった。女性が蔑視されることもなかった。この流れから生まれたキリスト教カタリ派では、教会もなく、神父もなかった。押しつける規律もなく、ただ自分という存在の目的に気付いた者だけが、ペルフェルティ（完徳者）として、肉食を絶ち、粗末な衣を身にまとい、質素な生活の中で教えを説いて回った。

彼らは、自分に強いることを、決して他人に強いることはなかった。また、このペルフェルティ（完徳者）には女

性でもなれた。というより女性の方が指導的役割を果たしていたと言える。カトリックがキリスト教の中心となって堕落し、その制度や組織の維持に汲々とするようになっても、カタリ派は人々の支持を得、人々の心の中に広がっていった。

　華美な僧衣に身を包み、ぜいたくな生活をする聖職者には、とてもこの流れを止めることはできなかった。ヴァチカンが、いくら「カタリ派の教えは異端である」と叫んだところで、言うことと形が一致しない聖職者の言うことなど、だれも耳を傾けようとはしない。

　こんな流れの中で、南フランス一帯が、カタリ派活動の最大の拠点となっていった。

（どうして南フランスなのだろう……）

　朦朧とした意識の中で、トマスは漠然とそんなことを考えていた。

　話を聞きながら、トマスの震えはおさまるどころか、ますます激しくなり、そしてカタリ派という言葉を聞いたとき爆発した。胸の中から噴き上げてくる塊に、トマスは遂に、こらえきれなくなって叫びだしていた。叫びながら、一つの思いに耳を傾けていた。

（モンセギュール、モンセギュールを忘れるな。トマス、トマス…………）

## 22

「警察に届けなくても本当に大丈夫なんだろうな！」
　藤プロデューサーはホテルの部屋で朝食をとりながら、電話口に向かっている。
　電話の相手は、大阪支社にいる美術部の伊牟田だ。日本では午後七時をまわった頃だろうか。撮影がない日はとっくに帰っているはずの伊牟田も、この日ばかりは康男の安否を気遣って美術部の部屋を動こうとしない。部屋には、妻の清花も来ている。散らかった机の上には、ローマの市街地図が広げられ、清花がその地図に見入っている。
「清花が、康男はサンピエトロの近くにいるって言うんです。元気とは言えないまでも、少なくとも死んではいないそうです。」
「どうも分からない。どうしてそんなことが言えるんだ。」
「一言で説明しにくいんですが、康男から出ている《気》みたいなものを、あいつは感じているらしいんです。本人は康男の波動を感じてるんだって言ってますが……」
「気でも波動でも、どっちでもいいが、間違いないんだろうな？」
「……はぁー？」

恋女房である清花との出会いは、伊牟田が、まだ堺のぼろアパートに住んでいた頃にさかのぼる。伊牟田のアパートのすぐ裏に、路地を一本はさんで小さなストリップ小屋があった。伊牟田のアパートの窓からは、このストリップ小屋の屋上がすぐ近くに見えるのだが、ある日、上半身裸で洗濯物を干しているストリップ嬢と思わず目が合ってしまった。

まだ、この頃は伊牟田も純情であった。顔を真っ赤にしてぴょこりと頭を下げると、思わず窓の下に隠れてしまったものだ。

しかし、顔を隠しても、彼女の形のよい乳房が目について離れない。それればかりか、軽く微笑み返してくれた口元や、親しみを込めた目の表情までが思い出される。

彼女にもう一度会いたい。かといって、ストリップ小屋に行くのはなぜかためらわれる。

（俺は美術を専攻し、裸婦のデッサンだって慣れている。女の裸なんてどうってことはない。ストリップ小屋に行くのがどうだって言うんだ……）

思い悩んだあげく、そう自分に言い聞かせながら、裏通りにあるストリップ小屋に足を向けた。

入り口には踊り子の写真が掲げてあった。その一つに目が留まった。

その写真には、平仮名で「さやか」と書かれていた。以来、伊牟田は彼女の追っかけをはじめた。地方巡業があれば、

休みを取って巡業先の小屋へも通った。

　ある時、金沢の香林坊まで追っかけをやったときのことだ。

　伊牟田の横に座っていた客の一人が、彼女の出番に、聞くに堪えない卑猥な野次を飛ばした。

　伊牟田の中では、ストリップは、今や崇高な芸術の域まで達している。

「この野郎、大人しくしろ！」と、思わず怒鳴りつけたのがいけなかった。

　男には何人かの連れがおり、伊牟田はその男たちに連れ出され、袋叩きの目に遭わされた。

　舞台から様子を見ていた清花の通報で、警察が駆けつけ、伊牟田は近くの病院へ救急車で運ばれることになったが、救急車には、伊牟田の身を案じる清花が付き添いとして乗り込んでいた。

　病院で目覚めたとき、傷の痛みより何より、彼女が傍に付き添ってくれていたということに、伊牟田は感動していた。そして「あんな仕事は辞めてほしい」「自分と結婚してほしい」と思わず告白してしまった。

　こうして伊牟田は画家の道を断念し、今まで鬱々と働いていた舞台美術の仕事に生き甲斐を見いだすことになる。もちろん、清花（さやか）（なぜか本名のほうが芸名っぽい）との生活が基盤にあってのことである。

こうして伊牟田は思いかなって清花と結婚したが、結婚して一年ほど経ってのことだ。彼女が、ある集まりに行かせてほしいと言い出した。

　清花は、高校生の頃、大変な悪だったという。ところが、清花の担任となった古野先生という教師との出会いが彼女を変えてしまった。キッチョム先生——古野吉祥という。しかし、誰が言い出したものか「吉祥」に「夢」を付け足し「吉祥夢先生」になり、いつの間にか「キッチョム先生」になってしまった。みんな、「キッチョムさん」とか「キッチョム先生」と呼ぶし、不良と呼ばれる生徒たちでさえ「キッチョムさん」「キッチョムさん」と、親しそうにその思いをぶつけてくる。彼も面白がって、自己紹介のときなど「古野吉祥夢」などと黒板に書いたりもしていた。

　それが、あるとき、黒板に名前を書き自己紹介しているキッチョム先生をその学校の教頭先生が見とがめた。授業が終わって職員室に帰った古野先生に、教頭先生が
「君は、古野吉祥という名ではなかったのかね」と問いかけた。

　以来、思うところがあったのか、自らは「吉祥夢」等とは書かなくなった。ただみんなから「キッチョムさん」とか「キッチョム先生」と呼ばれるのは歓迎だったようだ。

　いつだったか、清花に、「親が付けてくれた名前だからね」と、キッチョム先生がボソッと話してくれたことがある。

清花の両親は離婚していた。父親は町で小さな印刷業を営んでいたが、事業の不振が原因で新興宗教に走り、寄進寄進で、ただでさえ傾いていた家業をとうとう潰してしまった。

母親は幼い弟を連れて家を出、まだ小学生だった清花は、飲んだくれの父親と残され、見かねた親戚が清花を引き取ることとなった。どんなに両親を恨んだか知れない。どんなに生まれてきたことを呪ったか知れない。そんな清花の心に「親の付けた名前だからね」というキッチョム先生の言葉がしみこんでいった。

理屈ではなかった。何を言ったかでもなかった。その言葉がきっかけとなって、今まで押し込めてきた親への恨み、どうしようもない寂しさ、悔しさ、いろんな思いが堰を切ったように自分の中から溢れてきた。

あたりかまわず泣いた。泣き続けながら、その悔しさ、どうしようもない寂しさの奥底から、理解できない温かさ、喜びがフツフツわき上がってくるのを感じた。こんなに苦しんでいるのに、こんなに恨んでいるのに、こんなに怒っているのに、心の奥底から「お母さん、ありがとう」「お父さん、ありがとう」そして、自分を取り巻くすべてのものに「ありがとう」という思いがこみ上げてきて止まらなくなった。

あんな思いは初めてだった。あんな気持ちで生きていら

れたら、どんなにか幸せだろうと思った。でも、そんな喜びも、また日常にまぎれ色褪せていった。

「エーッ、キッチョム先生、出席してないの……」
「先生、神様に目覚めちゃったみたいよ。」
「ちがうって、そんな宗教ぽいことじゃなくて、本当の自分に気づいていこうって教えてまわってるみたいなのよ。」
　同窓会の席上、清花は友人から、キッチョム先生が、今は某高校の校長先生をしながら、日曜ごとにある勉強会を開いているという消息を聞いた。
　伊牟田と結婚してから、清花にある変化が訪れた。
　見えないものが見え、聞こえるはずのないものが聞こえるのだ。俗に「霊」とか言われるモノが、清花には感じられる。それが評判になり、超常現象や、心理学の先生までが、自分の研究材料にと、清花のもとを訪れるようになった。
　清花にはそれが疎ましく、自分の能力も、どこが間違っているのか分からないのだが、なにか違っているように思えて仕方なかった。そんな矢先、キッチョム先生の勉強会の話を聞いた。
　清花は、その話に引かれるようにしてキッチョム先生の勉強会に参加してみた。
　そこで、キッチョム先生は、人間は「霊」だという。また「意識」だとも言う。「意識」である自分が、「肉体」と

いう洋服をまとっている。人間は、その洋服を自分だと思って、その洋服を飾ることが幸せだと思っている。洋服がボロボロになって着れなくなったら、人はそれを「死」と思い、「死」イコール「自分が消滅する」ことだと考えている。自分が、「肉体」がなくなっても存在し続ける「意識」だとは思っていない。

人が生まれてくる目的は、「自分はちっぽけな肉体に縛られている存在ではなく、生き通しの生命＝意識こそ自分だと気づくこと」にあると、キッチョム先生は言う。「肉体がなければ、そのことに気づけないから生まれてくるのに、人は、肉体を自分だと思い、さまざまな間違いや汚れを積み重ねてきてしまった。それがあなた方の過去世だ」ともいう。

私たちは、無数の過去の誤りを背負って生きている。その修正のために今がある。本当の意味で自分を癒すことが出来れば、自分につながるたくさんの過去世が、その苦しみから、その間違いから解放される……。それが逆に自分を解放することにもなる。

「待ってよ、それって何か堂々巡りみたいじゃないか。」

伊牟田はよく妻の清花に異議を申し立てた。異議を申し立てながら、心のどこかで、「妻は本当のことを言っているのかも」、そんな思いもあった。

伊牟田の異議や疑問にも関わらず、清花は、月に二回、

日曜ごとにキッチョム先生の勉強会に通い、確実に見えないものに対する感性を高めていった。
　そんな妻に、伊牟田は康男のことを相談してみたのだ。

「宗教という名の狂気……」
　そんな思いが、清花の心にわき上がってきた。と同時に彼女の心の奥に閉じこもっていた何かが堰を切ったように溢れてくる。清花は溢れてくる涙をそのままに、遠くローマを彷徨っている康男に思いを向けていた。

## 23

「トマス、メディチ家がどこから来たかご存知でしょうか？」
　エレオノーラの声がトマスを現実に引き戻した。
　まだ夢から醒めやらぬトマスを案じてか、エレオノーラの息子バルトロメオが口を挟んだ。
「元からフィレンツェに居たのではないのですか？」
「違います。今、トマスが思いを向けていたところから逃げてきたのです。」
「モンセギュール……？」

トマスが重い口を開いた。
「そうです。メディチ家は、フィレンツェの郊外ムジェッロから身を起こしたように言われていますが、本当は南フランスから逃れてこの地へやってきたのです。」
「ひょっとしてメディチ家は、カタリ派の生き残りなのですか。」
　バルトロメオが訊いた。
「モンセギュールが攻め滅ぼされたとき、城にはカタリ派の財宝は何一つ残されていませんでした。有形無形に関わらず、カタリ派の人たちが大事と思ったものは、休戦中にすべて持ち出されたのです。メディチ家の教えを語り継ぐ者、カタリ派の資産を受け継ぐ者、それぞれ役割を分かち合い、カタリ派は地下に潜ることとなったのです。」
　キリスト教が歴史の表舞台に登場するようになって以来、その地下水脈のように異端の歴史もヨーロッパ史の底を流れ続けてきた。地上からは見えなくとも、ときには細々と、ときには大きな流れとなって地上へあふれ出てくることもある。キリスト教史上、最大の異端と言われたカタリ派の流れが、再びイタリアに、それもヴァチカンの中枢に噴き出そうとしていた。トマスやミゲルの不幸は、日本人でありながら、この抗争に知らず知らずに巻きこまれていったことにある。
「ここにもう一人のトマス――カタリ派の時代を生きた一

人の修道僧の手記があります。私がビアンカ様から託され、書き写したものです。私と共にここで朽ち果てるかと思っていましたが、少なくともこの手記だけは、この修道院から出ていくことができそうです。」

エレオノーラは、修道服の胸のあたりに抱えていた紙の束をトマスに差し出した。

◇カタリ派からの改宗者トマスの手記

私が、このモンセギュールの城に入ってほぼ一年になる。

戦いは既に終局を迎え、降伏の条件をのむかどうか、攻城側から十五日の猶予期間が与えられた。この機会を利用し、私がカタリ派について知り得たこと、また戦いの合間に取った覚え書きを整理し記しておこうと思う。

それが、私がこの城へ来た目的なのだから……。

このところ毎日のように投石機から放たれた岩が唸りをあげてこの城を襲うようになった。最初は丸い石の砲丸であったものが、日を追うにつれ岩塊が混じるようになり、今では飛んでくるものは石や岩の塊ばかりとなった。

城壁越しに巨大な石魂が間断なく飛来するや、あたりはまるで地獄絵の様相を呈する。城内は、女や子供たちの泣き声やわめき声に覆われ、庭のあちこちで男女の完徳者が、

醜く手足をもがれた騎士や、半ば押し潰された女性に臨終の救慰礼を授けているのが見られる。飛んできた岩塊に直撃され、頭が兜ごと肩へめりこんだようになった兵士の死骸さえ見られるようになった。

騎士を含め二百五十人近くいた戦闘員が、今では六十名足らずになっている。

誰がこんな事態を予想しただろうか。城は、モンセギュールという急峻な岩山の頂にあって、四方はほぼ垂直に近い断崖。誰もが難攻不落と信じて疑わなかった。

事実、昨年の五月、青地に百合の花の王旗をなびかせた十字軍がモンセギュールを取り囲んで以来、一万もの大軍が、非戦闘員も含め、わずか五百人足らずの籠城軍に手も足も出せず、半年あまりの間、いたずらに包囲するばかり。ついには糧食の心配までする始末だ。確かに一万もの軍勢を食わせる糧食となると並大抵のことではない。

それに引き替え、我々籠城側ときたら、秋に雨が降ったおかげで水は十分にあり、かねてから備蓄を心がけていたため食料不足の心配もない。それどころか抜け道を通って、不足するものは僅かでも運び込むことができた。これでは、たとえ五年を包囲されたとしても十分耐えることができたであろう。

事実、このまま行けば、聖王ルイの十字軍は撤退するしかなかった。

しかし裏切りがあった。カタリ派の仲間から裏切り者が出るとは考えもしなかったが、この裏切りによって抜け道の一つが押さえられ、攻城軍は、バスク地方の山岳兵を動員するや、ついに前哨を落とすに至ったのだ。前哨が落ちるや、アルビ司教の考案になる投石機が運びあげられ、六十ポンドから八十ポンドにおよぶ石の砲丸や岩塊が、連日、難攻不落の城塞に打ち込まれることになった。
　間断なく続く砲撃の前に、誰の目にも開城間近なことは明らかだった。
　……が、それでも我々は、更に二ヶ月を持ちこたえた。そして投石機粉砕を狙った決死の出撃が失敗に終わったとき、籠城側の主立った者たちは和平交渉を申し出る決定を下した。昨夜、この戦いの指導者であるピエール・ロジェとラモン・ド・ペレラによって降伏条件が皆の前に提示された。
「異端、ならびにカタリ派の信仰を放棄せぬ者は火刑台へ送るものとする。残余の者全員に関しては、己の過失を衷心より告白することを条件に、身柄を拘束せぬものとする。戦闘員に関しては、武器所持品携帯のうえ自由に退去するを認め、アヴィニョネの殺害事件への関与を問わぬものとする。この条件を受け入れる場合は、今日より数えて十五日目に城を明け渡すものとする。」
　アヴィニョネの殺害事件というのは、一二四二年五月に

起こった異端審問官の殺害事件のことである。トランカヴェルの反乱、レイモン七世の挙兵と続いたとほぼ同じころ、トゥールーズとカルカッソンヌとのちょうど中間くらいにある小村アヴィニョネで、滞在中の異端審問官の一行二名がことごとく惨殺された。しかもこの事件には、のちにモンセギュール籠城の戦術上の指導者となるピエール・ロジェが首謀者として名を連ね、実行グループにはモンセギュール居住の騎士たちが加わっていた。恨み重なる審問官の惨めな死に、ラングドックの民衆はいっせいに歓呼の声をあげたものだが、この虐殺事件をきっかけに、第二次アルビジョア十字軍の攻撃が開始されたのだ。

　にもかかわらず、和平条件では「アヴィニョネの殺害事件への関与を問わぬ」とある。

　前回の第一次アルビジョア十字軍の際、カタリ派の皆殺しが叫ばれていたことを思えば、異例なまでに寛大な条件であった。それは聖王ルイの威光と言うよりは、一万にもおよぶ攻城軍が十ヶ月にわたる包囲戦で、予想以上に疲弊していたことが、その寛大さの原因であろうと思われる。

　私はその夜、このモンセギュールの領主の娘であり、熱心なカタリ派の信者であった、エスクラルモンドから次のような決心を打ち明けられた。

　彼女は、私がフォアの住民に紛れ、このモンセギュールへ避難してきたときからの知り合いだ。

モンセギュールは恐ろしく切り立った山で、標高一〇〇〇メートルの頂きに目的の城がある。そして城に至る抜け道は険しく、聾でびっこの私には相当こたえる。

　というのも、みんな前を向いて歩いているため、後ろから励ましの言葉をかけてもらっても分からないのだ。お陰で私は、みんなから愛想の悪い男だと思われたに違いない。

　びっこの私を哀れんで助けてくれようと声をかけた人も、無視されたと思い、怒って追い越していく始末。そんな次第で皆からは遅れ、たった一人で、抜け道をやっとのことでよじ登ってきた。しかし、最後の登り口が険しくて、どうしても手に負えない。途方に暮れた私を、一人の女性の手が引き上げてくれた。それがエスクラルモンドだった。

　驚いたことに、彼女は騎士の身なりをしていた。

　いや間違いない。あの手は、いやあの顔だちは間違いなく女性のものだった。

　彼女が、笑顔で何か言った。しかし、暗くて唇が読めない。

「ミミガ・キコエナイ・ノデス。」

　彼女は驚いたような顔で私を見つめた。

「クラクテ、クチビルガ、ヨメナカッタノデス。ナント、オッシャッタノデショウ。モウイチド、オオキク、クチヲヒライテ、ハナシテイタダケマセンカ。」

　エクスクラルモンダは言った。口を大きく開けて、

「モンセギュールへ、よ・う・こ・そ！」

これが彼女との出会いだった。

彼女が私に、「どこから来たのか」と訊ねたことがあった。
フォアの町では見かけたことがないというのだ。それに私の話し言葉は、おかしなアクセントには違いないが、それでもラングドックの訛りではないという。
エスクラルモンドは、男勝りだけでなく、観察力が鋭く賢い女性でもあった。
私はパリの修道院から逃げ出し、南フランスまで流れて来たこと、カタリ派のことをもっとよく知りたいのだということを話した。それは嘘ではなく、自分の本当の気持ちだった。ただ、フランス国王ルイとの出会いや、自分がレイモン七世の隠された息子であることは話さなかった。言っても誤解を招くだけだと思ったからだ。
以来、エスクラルモンドは、機会を見つけては、耳が聞こえず、うまく言葉も話せない私に根気よくカタリ派の教えを伝えてくれた。カタリ派の教えを聞くにつけ、私の心の中に（カトリックの教えは、本当のことを伝えるよりも、教会の権威を、目に見える典礼やミサの形で定着させようとしているに過ぎないのでは……）そんな疑問が渦巻きはじめた。

「私は救慰礼を受けることを決意しました。」

城を明け渡すことが伝えられたあの夜、エスクラルモンドは、私にそう語った。

救慰礼（コンソラメントゥム）とは、帰依者が完徳者の列に参入しようと望む際に執り行われる儀式のことを言う。カタリ派は、カトリックの豪華な教会や秘蹟と称する儀式的なものすべてを排除した。ただ、この救慰礼という簡素な儀式だけは残した。

これは、神と福音に身を捧げようと決意した者に執り行われる儀式であって、その決意を確かめた後、「油で調理された野菜や魚以外の食品は一切、肉もチーズも食べないこと」を約束し、同様に「虚言を吐かぬこと」、「誓いを立てぬこと」、「肉体の交渉に身を委ねぬこと」、「火、水その他いかなる形の死をもって脅かされようとも教団を捨てぬこと」が約束させられる。約束が済めば、志願者は主の祈りを唱え、次いで完徳者が志願者の頭に手を置き、書物（福音書）を載せた後、志願者を抱擁し、その前にひざまずく。列席者一同も同様に志願者の前に膝をかがめ、これで儀式は終了する。

約束は厳しい内容であり、欺瞞は許されず完全な遵守が必要となるが、ただ一般信徒に強要されることはなく、どんな生活をしようと自由であり、それによって軽蔑されることも『道徳的不行跡だ』と叱責されることもない。自分がその時期に来たと思う者、もしくは決意を固めた者が、

その旨を完徳者に願い出てこの救慰礼を受けることになる。
　ただエスクラルモンドをはじめモンセギュールの城に立て籠もった者にとって、和平交渉の決まったこの時期に「救慰礼」を受けるということは、城の明け渡し後、火炙りになることを決意したも同じである。
　私にはそれが分からなかった。生きてさえいれば、どんなことをしてでも教えを語り継いでいけるではないか。生きていればこそ、それが可能だ。死は消滅であり、敗北でしかない。死んでしまって、何を伝えるというのだろうか。
　そんな気持ちを、私は彼女に伝えた。
「トマス、あなたの気持ちはうれしい。でも、それは所詮、私の肉体を案じてのこと。私の本質は肉体ではありません。肉体は仮のもの、その奥深くに隠された霊的な魂こそが本当の私なのです。人間の魂はあまりにも強く物質に隷属したままなので、もはや自分の起源が神にあるという認識を忘れてしまっているのです。自然なままの状態では、人は無知のままでいようとします。認識する力が失われているのです。伝えることが目的ではなく、私が自分の内なる魂に気付くことが目的なのです。」
（火に焼かれれば、気付くというのですか。火炙りになれば、自分の本質は神だったという認識に到達できるとでもいうのですか……）
　私には、自分の中に渦巻くそんな思いを言葉にすること

ができなかった。どもるばかりで思いがうまく言葉になってこない。

「……それに生きて教えを伝えていく人たちも決まっております。もうその方々は、別の抜け道を使って、このモンセギュールから抜けていかれました。その方々は、このカタリ派の聖なる書物や財宝の在処を知る方々です。

　トマス、あなたもそうなのですよ。あなたは、生きて私たちのことを後世に伝えていく方、それこそあなたが、今ここにある目的ではないのですか。」

「チ、チ、チガイマス！　私ハ人質トシテ、パリノ修道院ニ預ケラレテイタモノ。フランス国王ノ命デカタリ派ヤ、ソノ教エヲ信ジル人タチノコトヲ知ルタメ、コノ城ニ遣ワサレタ者……」

「分かっています。レイモン伯に仕えておられた方々もこの城にはおられます。その一人の方は、あなたを人質としてパリへお連れしたことを覚えておられました。その方が申しておられました。あなたの面影は忘れられない。あれはレイモン伯の隠されたご子息トマス殿に間違いがないと……」

「………………」

「フランス国王が、あなたをここへ遣わされたのではありません。あなたはご自分の内なるものに突き動かされて、このモンセギュールへ来られたのです。そんなあなただか

ら、託したいのです、この『マリアの福音書』を……。
　マグダラのマリア様が、イエス様の生の声を伝えた書物、私たちの宝です。この城を出られるとき、あなたにこれを持っていってもらいたいのです。」
（……あなた方には宝であっても、私には負担でしかありません。それに、これを守り通すことなど出来そうにありません。）
「そのときが来たら、棄ててくださってよいのです。焼き捨ててもかまいません。あなたがそう思ったら、思ったようになさってください。福音書と言っても所詮は形です。それを残すことが目的ではありません。あなたの中に本当のものが残っていくこと、それがあなたを通して流れていくこと、それが私たちの望むことです。カタリ派という名前なぞ消えてしまっていいのです。イエスという名前さえ消えてしまっていいのです。本当のものが、いえ、本当のものがあるということ、そして、それを知りたいという、その思いさえ残せれば……」
　異教徒やサタン以外に「イエスの名が残らなくていい」などという人間が、どこの世界にいるというのだろう。頭では、「これは神への冒涜だ」と思いつつも、私の心はそれを受け入れている。心のどこかで「そうだった、そうに違いない」という思いがあふれてくる。
　私は心の中で聞いてみた。

（……でも、それならなおのこと、自ら火炙りになるのは間違いだと思いますが。）
「私は棄てたいのです。怖いという気持ち、なんとか肉を守りたいという気持ち、肉体にまつわる様々な思いを棄てていきたいのです。」
　彼女から答えが返ってきた。
　こうして私は、エスクラルモンドの差し出す「マリアの福音書」を受け取ることにしたのです。しかし、こんな覚え書き、もうどこへも出すことはできないだろう。もし、誰かに見られでもしたら、間違いなくこちらが火炙りだ。この城を出たら、パリには帰らず、「カタリ派からの改宗者」として、どこかの修道院に身を隠して生きていく以外にはなさそうだ……。

「モンセギュールは正しきキリスト教徒の最後の砦……。それが潰されようとしている。
　死ぬのは怖くはありません。どうせ、この世はサタンの造った世界。そんな悪の世界を離れるのに、何の未練がありましょう。肉体はサタンのもの、そんな肉体を苦しめ何が面白いというのでしょうか。魂こそが真実、魂こそがすべて。私は、この魂を救うために、肉体を捨てていきます。

でも、苦しい。肉体が音をたてる、ジュウジュウと音をたてる。目が、目が瞑れない。誰か助けてください。私の身体が焼けてゆく。誰か助けてください、早く死なせてください、早く、早く死なせてください。早く意識がなくなってほしい。早く肉体の苦しみから解放されたい……。

炎が、炎しか見えません。あたり一面が真っ赤、真っ赤なんです。あー、早く死にたい。早く死なせてください。早く、早く、早く……」

炎の中で死んでいった人たちの苦しみが伝わってくる。どうしたらいい、どうしたらいい。俺にどうしろというんだ。俺にどうしろという。

あの光景が忘れられない。いつまでも俺の眼の奥に焼き付いている。

いやだ。俺はあんな死に方はしたくない。何があろうと、あんな死に方はしたくない。たとえ、この世がサタンのものであろうと、俺にはできない。あんな死に方はできない。

「あートマス、助けてください。こんな死に方はいや。こんな死に方はいやです。

炎の向こうに、トマス、あなたの顔が見えます。

トマス、トマス、あなたは笑っているのですか、それとも泣いているのですか。

トマス、みんな間違いでした、すべてが間違いでした。炎の中に救いはありません。死によって救われるなんて、嘘、みんな嘘でした。死ねば肉体から解放される。そう、死にさえすれば救われるんだって。死ねば救われる。死ねば肉体から解放されるって、そう思っていました。

でも、いつになったら死はやってくるのでしょう。いつになったら安らぎに包まれるのでしょう。ああ、こんなに苦しんでいるのに。これだけ苦しんでいるというのに、死はやってこない。死は迎えに来ない。いつまでこの中にいればいいのでしょう。

誰か、誰か、殺してください、トマス、殺してください。」

私はこの叫び声をずっと心の中に聞いていました。怖い、怖い、こんな死に方はしたくない。あー、あの声が追いかけてくる、殺してくれと追いかけてくる。

あの者たちの声が聞こえた。あの炎の向こうに、あの苦しそうな顔が見えたとき、私の心の中に焼かれて死んでいった人たちの声が響いてきました。

みんなの声が響いてきました。エスクラルモンドの声が響いてきました。

「こんなはずじゃなかった……」って。

トマスは、エレオノーラから差し出された手記を読み終え、深い溜息を付いた。

前に座っているエレオノーラの顔が、見も知らぬエスクラルモンドの顔とだぶり、その顔が炎の向こうから笑いかけたように思えた。

（やっとこの炎から救われます。）

トマスには、そんな声が聞こえたように思った。

「これはメディチ家に伝わった写本を私が書き写したものです。原本は、南フランスのとある修道院に『マリアの福音書』とともに隠されていたのを、ドミニコ会の異端審問官が見つけヴァチカン図書館へ納めました。」

トマスは、エレオノーラの声に再び現実に引き戻された。

「ヴァチカンの中にも、教皇さまの周囲にも、私たちの仲間はいます。」

「アレッサンドロ枢機卿さまのように？」

「そう。でもそれが誰なのか、私には分かりません。一人は、シクストゥス教皇様の秘書官だった方。この方は『シクストゥス聖書』改訂の過労の中でお亡くなりになられました。もうお一方、『シクストゥス聖書』の秘密を握っておられる方がおられるようなのですが、アレッサンドロさまにもお分かりではないようです。すべてを把握しておられたフランチェスコ大公さまもビアンカさまも、そのことを明かされる前にお亡くなりになりました。ベラルミーノ枢機卿様

も、このことに薄々気づいておられ、密かに捜索されておられるご様子です。このことがプロテスタントの方々にでも漏れたら、ヴァチカンにとっては大打撃ですから。」
　そう言いながら、エレオノーラは一枚の紙片を取り出した。
「このメモをあなた方に託します。ビアンカさまから『もし、私の身に何かあったら』と託されたものです。」

## 24

　ベラルミーノ枢機卿が密かにフィレンツェを訪れた。
　彼を乗せた馬車は、サン・ジョルジョ門からフィレンツェ市街へ入ろうとはせず、その手前の道を左に取るや、まっすぐにベルヴェデーレ要塞へと向かった。ここは一五九〇年にベルナルド・ブオンタレンティの手により、フィレンツェを政敵の攻撃から守るべく設計されたものだが、今やメディチ家の私的避難場所として使われている。

「アルメーニは何か吐きましたかな。」
　トスカナ大公フェルディナンドが部屋に入るなり、ベラルミーノが声をかけた。
「さすがアレッサンドロ枢機卿が見込んでスイス衛兵隊から引き抜いた男、いかように責めても一言も口を割りませ

ん。しかし、カトリック教会の良心と言われたお方、そのご到着第一声にしてはあまりに率直、あまりに無粋な……」
「カトリック教会を守るため。なりふり構ってはおられませんでな。」
「いかにも。このフィレンツェとて、いまやヴァチカンとは一体の身。アンリとマルグリットの離婚が成立するからには、なんとしてでも我が娘マリーを次のフランス王妃に据えねばなりません。ヴァチカンと、このトスカーナ公国が一体となってこそ、フランスの新教勢力を押さえられるというもの。」
「それを、シクストゥスの亡霊……というよりカタリ派の亡霊が、またぞろ頭をもたげはじめた。シクストゥス聖書のことが新教側に知れれば、ヴァチカンの権威は根本から揺さぶられることとなる。ようやく落ち着きはじめたフランスも、そうなれば、どこへ転げ出すか分かったものではない。カトリックの根本であるローマ教皇が異端だったなどと……」
「カトリック教会を守るため、教皇まで毒殺されたお方……いや、これは失礼いたしました。根も葉もないことを……。とはいえ、このフェルディナンドとて、実の兄であるフランチェスコ一世とその后を毒殺いたしております。まさにヴァチカンとトスカーナは一心同体と申せましょうな。」
　そのとき、重い木製のドアをノックする音が響いた。
　ドアを開けるや血の匂いが広がった。

「……申し訳ありません。アルメーニが亡くなりました。」
　拷問係の血に染まった皮の前掛けが、アルメーニの凄惨な最期を物語っていた。
「何も吐かずにか？」
「はい、トマスの護衛としてフィレンツェへ遣わされたこと以外は。」
「責めてみてどのように感じた。」
「あの男は何も知らないように思います。知っていて隠し通そうとしている感じではありません。顔を見れば分かります。」
「そうか、ご苦労だった。死体はアルノ川へ棄てよ。……すぐ見つかるよう、重りは付けるではないぞ。日本から来た猿どもにも警告は必要であろう。」
　フェルディナンドはベラルミーノの方に向き直ると
「こうなっては異端にことよせ、直接、エレオノーラを責めてみるしかなさそうですな。」
「彼女はしゃべらぬであろう。これ以上無駄な血を流すより、トマス等の監視をおこたらぬことだ。それが一番の近道。」

　トマス等がオノフリオ修道院を後にしたのは、もう夕方近かった。とはいえ、この時期、陽はなかなか沈まず、ま

だ昼のような明るさではあったが。

待っているはずのアルメーニの姿がない。バルトロメオが、真っ先にアルメーニのいないことに気付いた。気にはなっていたのだが、アルメーニのことだ、頃合いを見て先に引き上げるだろうと、別に心配もしなかったのだ。それが、今になってみると、なぜか不安を払いのけることができない。

「こんなところで、いつまでも待ってられませんよ。きっと修道院に先に帰っていますって……」

ミゲルが暢気そうに言うが、バルトロメオは何か釈然としない。

トマスが、そんな不安に終止符を打った。

「何があるにせよ、まずは修道院に帰ろう。すべてはそれからだ。シクストゥス聖書の重要な手がかりだって、我々の滞在するサン・ロレンツォ修道院の図書館にあることが分かったんだ。まずは帰るべきだよ。」

今や、エレオノーラから彼女の知るすべてが知らされていた。ローマンカトリックが、イエスのみを『神の子』とするのに対し、「イエスの説いた教えはそうではない。すべての人が神の子であり、神を外に求めるのでなく『内在する神』を自分の中に感じ、霊的な自分に目覚めていこうというのがイエスの説いた教えであり、イエスはそのことを伝えるために肉体を持ったのだ」という考え方があったこ

と。そして、こうした立場は異端とされ、弾圧されてきたこと。このため、それらの教えは形を棄てることによって、あるときは「マニ教」という教えとなり、あるときは「グノーシス主義」という形をとり、また「カタリ派」という形となり、「ルネサンス」という精神の中に、「宗教改革」という形の中に、すべてのもののなかに内在することを目指してきたということ。

そして、ルネサンスの頃、メディチ家の初代コジモによって『プラトンアカデミー』が創設され、そのグループに属する哲学者や錬金術師、科学者たちの探求の中で、漠然としたこのような流れがあることが明らかになった。コジモは、これら真実を知ろうとするムーブメントを庇護するべく、『インクナブラ』という秘密結社を結成した。

その名は「印刷の揺籃期」を表しており、その目的と活動は、真実を活字に残すこと、および真実を追究しようとして出版された世界中の書物の収集と保護、そして真実を追究しようとする「人」と「団体」を支援することにあり、個人的には、その学習を通して「人生の真の目的」に自らが気付いていくことにあった。

この流れは、大きな広がりを見せ、形にとらわれないことから、本人もそれと知ることなくその流れの中に巻き込まれていることもしばしばであり、シクストゥス五世の場合が、その最たる例であった。彼はノストラダムスによっ

て教皇への野心をかき立てられ、『インクナブラ』の創設者であるメディチ家の後押しによってローマ教皇となった。

そして彼がローマ教皇となったとき、彼の周りには、彼が最も信頼したアレッサンドロ・オッタビアーノ・デ・メディチ枢機卿がいた。彼もまた『インク・ナブラ』の会員である。そればかりか、彼の秘書官までが、その会員であった。

ただし、その全貌を知る人は少なく、シクストゥス教皇の秘書官にしたところで、自分が所属しているのは、かつて滅びた『カタリ派』の隠れた信奉者の団体であると信じて疑わなかった。

彼は『聖書』の改訂作業にあたり、その作業の中で「イエス自身が神の子であるばかりでなく、すべての人が神の子であり、神とはすべての人の心の中に内在するものだ」という内容や、その他の関連する字句・聖句を挿入させてしまった。

言葉の海の中に一度紛れ込むと、なかなか見つけることが困難となる。それも竜巻スタイルと言われた殺人的スケジュールの中で、しかも最終校正後に挿入されると、その発見は不可能と言ってもよかった。その作業の後、校正係をした件の秘書は、過労から帰らぬ人となった。こうして『シクストゥス聖書』は「充溢せる使徒の力により、ここに宣告し、宣言する。この版は――主からわれわれに与えられた権威によって認可されたものであり、したがって真実か

つ合法的なるものとして受け入れられねばならず、公共的ならびに私的な論争、説教、解釈において、疑問の余地なく拠り所とされねばならない」というお墨付きのもと、世の中に出ることになった。

……が、唯一、このことに気付いた人物がいた。それが教会博士であるロベルト・ベラルミーノ枢機卿であった。このような聖書が出回れば、宗教改革でプロテスタントとカトリックが対立する中、ヴァチカンの権威は失墜する。フランスでは聖バルテルミーの虐殺に代表されるようなユグノー教徒との紛争がようやく落ち着きを見せ、ヴァチカンの権威が復活したばかりだ。

今、この聖書が出回ればどうなるか。かといってローマ教皇は絶対であり、聖書もまた絶対である。カトリック教会を守るということは、他でもないローマ教皇と聖書の不可謬性を守るということに他ならない。

悩んでいるとき、まことに好都合なことにローマ教皇シクストゥス五世が崩御した。聖書が完成するなり、シクストゥスは死んでしまったのだ。あまりにも好都合であった。

ベラルミーノは、新教皇の就任を待たず、全ヨーロッパの異端審問所に命じた。

「シクストクス聖書を回収し焼却せよ」と。

そして、シクストゥスの竜巻スタイルを上回るスピードで改訂版を完成させた。それが二人の教皇の名前で出され

た『シクストゥス・クレメンテ聖書』である。
　ベラルミーノは「先の『シクストゥス聖書』は誤植が多いため破棄し、この『シクストゥス・クレメンテ聖書』をもって教会の拠り所とする」と宣言した。
　かくして、ローマンカトリックの歴史のなかで、彼等が異端として排斥した思想――「すべての人が神の子である」という教え――の挿入された、初めにして終わりであろうラテン語聖書が抹殺されてしまった。
　ところが、そのシクストゥス聖書がまだ残されているという。
　エレオノーラから託された一片の紙片。ここに『シクストゥス聖書』のみか『マリアの福音書』の在処を知る鍵が記されているという。やがて、そのことが明らかになろうとしている。

## 25

　一九六八年五月
「資料によって人数に若干の違いがあるが、このとき、二百名以上の人間が火炙りを選んだといわれている。」
　伊牟田修平が、抱えていた本から目を上げ、ポツリと言った。
「こちらの資料にはこんなことが書いてあるわ。」

清花が言葉をはさんだ。
『刑場に向かう処刑者の列に、ひときわ痛ましい三人の女がいた。直前に完徳者となった領主の妻コルバと娘エスクラルモンド、それにコルバの母マルケジア、彼らは一つの文明の絶頂と滅亡を目撃した三世代の悲劇的な代表であった……』
「このエスクラルモンドって女性のこと、何かなつかしい気がする。会ったこともないのに……ほら、話していてもこんなに鳥肌が。」
　テレビスタジオの隅につくられた伊牟田の控え室が、康男の捜索本部のようになっている。といっても、伊牟田と清花の夫婦二人だけの捜索隊ではあるのだが。
　清花は、康男がローマにいる。しかもサン・ピエトロの近くにいるという。ところが次には「南フランス」とか「モンセギュール」という名を口にし、そこが気になると言い出した。
「康男はローマに居るんだろう？」
「そうなんだけど、どうしても気になるの。この地のカタリ派って、いったい何のことなのか調べてくれない。」
　伊牟田は大学時代、美術史を専攻しており、ヨーロッパの歴史にも詳しい。「南フランスのカタリ派」と聞いただけで、ヴァチカンとフランス王室が手を携えての「アルビジョア十字軍」にすぐさま思い至った。あとは社の資料室へ行き、

資料を探し出してくるだけ。伊牟田の所属するＣＭプロダクションは、業界でも最大手であり、ＣＭだけでなく、ＰＲ映画まで手がけており、そのため資料類も豊富だ。そんじょそこらの図書館より専門的な資料を揃えている。
　今や伊牟田の部屋は、美術部の控え室というより、ヨーロッパキリスト教史の研究室のごとき観を呈している。ただでも狭い部屋の中は､場違いな「異端審問の歴史」や「ヴァチカン」に関する研究書や資料が散乱している。

　伊牟田は資料から目を上げると、事務所のホワイトボードに目をやった。
「天正遣欧使節」「ローマ教皇シクストゥス五世」「ベアトリーチェ・チェンチ」「異端審問」「ノストラダムス」「ベラルミーノ枢機卿」そして「メディチ家」……
　水性ペンで無造作に書き並べられた単語の羅列。去年、康男が大学の卒論に取りかかりはじめるや幻覚を見たり、よく金縛りにあうようになった。ホワイトボードに書かれているのは、そのとき伊牟田や清花にもらしていた内容と、半年前、康男がローマロケのスタッフに選ばれるに及んで幻覚が再発したときに話していた内容だ。それに清花が気になると言った言葉「モンセギュール」「カタリ派」……。

「待てよ、アルビジョア十字軍が一三世紀初頭だろう。天

正遣欧使節やノストラダムス、それにメディチ家となると、一六世紀のことになる。二つの時代にどんな因果関係があるんだ。これも過去世で片づけるのか？」
「過去世と言っても、誰が誰に生まれ変わる……そんな単純なものではないわ。過去世のことはよく分かっていないのが現実だけど、それでも肉の世界での家系図のような流れを考えると、とんでもない陥穽に落ちてしまう気がするの。人格が生まれ変わるのでなく、思いというエネルギーが輪廻する、そんな感覚じゃないかしら。」
　そう言いながら、清花はホワイトボードに向かうと、「カタリ派」という語句と「メディチ家」という語句を、赤の水性ペンでつないでしまった。
「おいっ、何だよ、それ！　どういう意味だ？」
「分からない。」
「おいおい、ひょっとしてメディチ家は……」
　伊牟田の中にいきなり閃くものがあった。伊牟田は、クリストファー・ヒバート著すところの「メディチ家の盛衰」のページをあわてて繰りだした。
「あったぞ。メディチ家の起こりはよく分かっていないんだ。薬種業だったとか医者だったとか、カール大帝の貴族でムジェッロで竜退治をしたなんてのもある。しかし、どうも確かなところは一三世紀半ばにムジェッロというところで炭焼きでもしていたようなんだ。それがフィレンツェ

へ出てきて身を起こし、一躍、金融業で財をなした。」
　伊牟田は独り言のようにしゃべり続け、清花は目を瞑って、ただ、その言葉に耳を傾けている。
「カタリ派がアルビジョア十字軍に滅ぼされたのが、一二四三年つまり一三世紀の半ばなんだが、カタリ派の財宝というものが忽然と姿を消している。どうも休戦期間中に、カタリ派の一部の人間がモンセギュールを脱出したようなんだな。財宝とか、教典とかを持って……」
　伊牟田は、次に「異端カタリ派」という新書版をあわただしくめくりはじめた。
「その逃げた先が北イタリア！　ほら、この本には、カタリ派の一部がイタリアへ亡命したとある。そこでメディチ家の起こりと繋げて考えてみると、フィレンツェ北部郊外から忽然と現れ、フィレンツェで金融業を起こしたメディチ家……メディチ家がカタリ派の生き残りだと考えると、その経済的背景もハッキリしてくる。カタリ派の財宝だ！　一六世紀、メディチ家の再隆盛期、コジモが、なぜルネサンス運動を支援したか。少なくともフィレンツェで起こったルネサンス運動は、カトリック批判というか、カトリックに対するカタリ派の巻き返しだったように思えてくる。」
　伊牟田の視線がホワイトボードへ戻った。
「そうか！　メディチ家だけでなく、チェンチ一族もカタリ派の信奉者なんだ。そう考えれば、世論や外交使節団の

陳情を無視してまで、ヴァチカンがチェンチ一族の処刑を急がせた訳がハッキリしてくる。康男もこの部屋でベアトリーチェ・チェンチの肖像画を見て何か感じているような素振りだった。これだ！」

伊牟田は、ベアトリーチェ・チェンチの肖像が描かれた美術全集を清花の前に示しながら、何かに憑かれたように喋り続けた。

伊牟田が閃いたチェンチ一族の真実というのは、彼らはキリスト教の中でも異端と言われているカタリ派の教えを信奉していたということに尽きる。カタリ派は、南フランスから北イタリアを中心に広まった教えだが、一三世紀に起こったアルビジョア十字軍で、そのほとんどが一掃され、その後の徹底的な調査と弾圧の中で、完全に消滅したと思われていた。

しかし、それは表面上のことで、実は地下に潜り、グノーシス主義やマニ教、更にはユダヤ神秘主義思想等の流れと一つになって、密かに教えを語り継いできたという。

この流れがヴァチカンにまで入り込んでいたというのだ。現に、チェンチ家は、ヴァチカンの会計係を勤めているし、どうやら枢機卿の中にも、この流れを支持する人間がいたらしい。そして、その秘密を握っているのが、ベアトリーチェの父親だった。

このことに気付いたヴァチカン側は、密かに親殺しに見せかけてチェンチを始末してしまった。そして、この事件の解決にことよせ、チェンチ一家と、カタリ派に関係したヴァチカン内部の人間を始末してしまったというのが真相ではないだろうか。

　そう考えれば、同情したローマっ子や外国使節の助命嘆願にさえ、頑として耳を貸さなかったヴァチカンの対応は納得できる。このヴァチカンの態度に、周りでは、ヴァチカンがチェンチ家の財産に目を付けたからだろうとの憶測が飛び交ったが、チェンチ家は破産寸前の状態であったことを考えると、これも当を得ていない。

　そこまで喋りきると、伊牟田はふと考え込んだ。

「しかしヴァチカンは、そんな回りくどいことをせず、なぜ彼らを異端者として処罰しなかったのか。……と言うことは、どうも、これに関わっているのは、枢機卿だけではなさそうだ。もっと上の人間が絡んでいる。枢機卿より上というと……もちろん、これより上にはローマ教皇しかいない。ローマ教皇がそれと知らず異端的色彩を帯びているとしたら……」

　そのとき、清花の口から出た一言が伊牟田の自問自答にストップをかけた。

「康男さんがローマに帰ってくる。」

## 26

図書室の中央をまっすぐに走る廊下が、入り口に突き当たるや、三つの流れに分かれて下っていく。ミケランジェロの設計になるその階段には、川の流れが、まるで緩やかな落差をなめらかにすべり落ちていくような優雅さがあった。

トマス、ミゲル、それにバルトロメオの三人が、流れに逆らうようにその階段をあがっていく。深夜のこととてはばかられたものか、トマスとミゲルが、右端から入り口に向かって弧を描く支流をそっとあがっていくのに対し、バルトロメオは一番広い中央の階段を堂々とあがっていこうとしている。昼間であれば、巨大な壁に穿たれた小さな入り口から、まっすぐ奥へメディチ家の紋章を配した格子天井の連なりが見え、威圧感とともに何ともいえない心地よいシンメトリーをつくり出しているのだが、この時間では入り口の扉は閉ざされている上に、照明といえば三人の持つ手燭の灯りしかない。

トマスは、手燭の灯りに浮かびあがる扉の装飾の見事さに息を飲んだ。昼間、気にも留めなかったものが、かすかな灯りの中で真っ正面から自分に語りかけてくる。

「トマス、はやく開けろ！」

ミゲルが押し殺した声で訴えてくる。

トマスは預けられている図書室の鍵を取り出した。滞在中は、いつでも資料類が閲覧できるようにと預けられたものだ。修道院長の破格の計らいであった。
「向かって左、一番手前から六列目の閲覧台」
　バルトロメオが、先頭に立ち、手燭で一つひとつの閲覧台を照らしながら慎重に進んでいく。
「ウノ[1]、ドゥーエ[2]、トゥレ[3]、クアットゥロ[4]、チンクエ[5]、セイ[6]……」
　燭台の灯りが、閲覧台の端に埋め込まれた一覧表を照らし出す。
　普通の図書館では書庫と閲覧室が別になっており、利用者は書庫から目的の図書を借り出し閲覧室で目的の本を読んだり調べたりすることになる。しかし、このサン・ロレンツォでは、閲覧台に本がセットされている。それぞれの閲覧台の通路側の側面には、そこにどんな本がセットされているのか、そのリストが埋め込まれている。つまり利用者は、本を運ぶのではなく、自分が目的の本のある閲覧台へ体を運ぶことになる。
「ＨＩＳＴＯＲＩＡＲＶＭ……クイ（ここだ）。」
　トマスが、バルトロメオの差し示すリストの一角に目を凝らした。
「ＨＩＳＴＯＲＩＡＲＶＭ　ＥＴ　ＡＮＮＡＬＩＶＭ　ＬＩＢＲＩ……」

ローマ時代、歴史の第一人者と言われたタキトゥスの表した『歴史』と『年代記』。その二冊が一五七四年、アントワープで『タキトゥス／現存する歴史と年代記』というタイトルで出版されている。
　三人は目的の本を閲覧台に見つけた。
「Ｃ．ＣＯＲＮＥＬＩＩ　ＴＡＣＩＴＩ……間違いない。」
「一二八ページだ、このページが解読コードになっている。ミゲル、書き写してくれ。」
　トマスがページを繰りながら、ミゲルに指示した。
「よし、席を替わってくれ。」
　書写にかけては、ミゲルは独特の才能を持っている。一字一句間違いがないばかりか、その書体や一行一行の字の配列などページ構成まで写し取ってしまう。それは肉筆本ばかりか印刷本の場合でも、まるでコピーを取ったかのような正確さであった。
「内容じゃないぞ、字の配列が重要なんだ。」
「心得ているよ。」
　そういいながらも、ミゲルはその几帳面な仕事を開始していた。
　トマスは、そんなミゲルをよそ目に修道服から一枚の紙片を取り出した。エレオノーラが、ビアンカ大公女から託され今まで保管していたものだ。
　二組の数字の組み合わせがスラッシュとスペースで区切

られながら、紙片を埋めている。
　バルトロメオがその紙片を覗き込み、
「スラッシュで組み合わされた数字の組み合わせの中で、最初の数字が行の位置、二番目の数字が列の位置を表している。スペースは単語の区切りを表す。簡単な換字式暗号だが、キアーヴェ（鍵）となる文書が何であるか分からない限り、絶対に解くことはできない。」
「とすると、行を表す頭の数字のうち一番大きな数字は二八だから、二八行以降は写し取る必要はないということだ。」
「ご親切さま。でも、この本は二八行取りだ。二九行目はないよ……」
　ミゲルがやり返しているそのときだ。
　図書室のドアが開いた。
「やはり、ここにおられましたか。日本という国に信仰の種をまく。若さと使命感がもたらすその熱心さはうらやましい限り、私めも、もう少し若ければ……しかし、お体には十分注意召されませ。体があってこそのお仕事……」
　トマスらの世話を命じられている召使いの老人がそこにいた。
「あ、ありがとうございます。ところで、なんのご用でしょうか？」
「……おお、そうじゃ。いかんいかん、歳をとると忘れっ

ぽくなって。いや、そんなことを言っておる場合ではない。大変なのじゃ。お供のアルメーニ殿が亡くなられた！　酷い有り様でアルノ川から引き上げられた。」

　聞けば、遺体は十字架に打ち付けられ、アルノ川の上流から流されたようだ。アルノ川はポンテ・ヴェッキオ橋のあたりで川幅が一番狭くなっている。そのポンテ・ヴェッキオ橋の橋脚に十字架が引っかかり、流れに抗して十字架の端が何度も何度も橋脚をたたいていた。まるで自分の存在を主張するかのように、ある間隔を置いて、

「ゴーン……ゴーン……ゴーン……ゴーン」と。

　ポンテ・ヴェッキオ橋には、スゥポルトと呼ばれる金細工師の工房が並んでおり、そのいくつかは木枠で支えられ橋から張り出した状態にある。元々は、肉屋や革なめし屋、それに鍛冶屋などが、作業場をここに置き、川をゴミ箱代わりにしていたのだが、今のフェルディナンド一世がその騒音と悪臭を理由に追放し、金細工師に貸し与えることとした。

　そんな金細工師の住人が時ならぬ騒音に、ある者は夜なべ仕事の手を止められ、ある者は心地よい眠りを妨げられることとなった。

　騒音の正体は、十字架に張り付けられた人の死骸だった。

　両眼はつぶされ、膝は砕かれ、両手の指も、おそらく指締め器の拷問にかけられたのだろう、十本ともにつぶされていた。

知らせを受けて三人がポンテ・ヴェッキオに駆けつけたとき、アルメーニの血で黒ずんだシャツが、郡警察の警官の手で引き裂かれた。その裸の胸には、刃物で刻まれたものであろう、くっきりと「ダヴィデの星」が刻みこまれていた。

すがすがしい朝の空気とは、いかにも不釣り合いな光景であった。

# 第四章　ジョルダーノ・ブルーノ

## 27

一五九九年九月十一日
この日、トマスら一行が、フィレンツェから戻りローマへと入った。
その日は、秋らしいよく晴れわたった土曜日であったが、空には異常に真っ赤な朝映えがたなびいていた。
ローマを離れて既に五ヶ月が過ぎている。
トマスらは、エレオノーラから教えられた暗号表で、「シクストゥス聖書」がローマにあることを知った。それもチェンチ家の礼拝堂にあるという。
チェンチ家と聞いたとき、トマスの中の康男が反応した。大阪のテレスタの美術室で知ったベアトリーチェ・チェンチのこと。そしてローマロケで、はたまたローマの地下をさまようなかで、そのベアトリーチェ自身にあった。
今、自分がここに居るのも、ベアトリーチェに導かれたとも思えてくる。そんなことを考えると、一刻も早くローマへ戻りたかったのだが、アルメーニの殺害を知ったアレッサンドロ枢機卿は、危険回避のため、一行をフィレンツェ

とローマから遠ざけようとした。

資料収集と研修を兼ねて、ミラノとヴェネチア、更にはシエナの図書館を回ってくるようにという。

焦る気持ちを抑えての五ヶ月だった。

そして今、やっとローマへと帰った。

ローマを発ったのが春。それがもう秋の入り口にかかっている。おかげで、ローマの猛暑を避けることが出来たわけだが、ローマへ戻ってみれば、町は異様な雰囲気に包まれていた。険しい顔をした男や女達がテヴェレ川に沿う川岸通りの道をサンタンジェロ城の方角へと流れていく。人の波は、次第に増え、ついにはおびただしい群衆となってトルディノーナ監獄を目指して動いていた。

聞けば、この日、チェンチ一族が公開処刑されることになっているという。

チェンチ一族のうち、ジャコーモとベルナルドの男兄弟が、テヴェレ川を挟んでサンタンジェロ城と向かい合うトルディノーナ監獄に収監されている。やがて二人の兄弟は引き出され、主犯とされるベアトリーチェとその継母ルクレツィアが収監されているサヴェッラ法廷へと向かう。ここでチェンチ一族は合流し、処刑場となっているサンタンジェロ広場へと向かうことになっているというのだ。

トマスは、自分がベアトリーチェの処刑の日、このローマに戻ってきたことが偶然とは思われなかった。でも、自分は

すべてを知っていながら何も出来ない。いっそ知らなければよかった。シクストゥス聖書のことも、インクナブラのことも……。何も知らず、崇高で汚れのないキリスト教を信じていくことができれば、どんなに幸せだったろうか。
（俺がローマに来たのは、何のためだったんだろう……）

「来たぞー、処刑の行列が現れたぞ！」
　その声に群衆のざわめきが途絶えた。
　その沈黙の中から、低いがよく響く祈祷の声が沸き上がってくる。

天主なる御父　われらをあわれみ給え。
天主にして世のあがない主なる御子
われらをあわれみ給え。
天主なる聖霊　われらをあわれみ給え。
唯一の天主なる聖三位　われらをあわれみ給え。
聖マリア　われらのために祈り給え。
天主の聖母　われらのために祈り給え。
童貞のうちにていても聖なる童貞
われらのために祈り給え。
聖ミカエル　 われらのために祈り給え。
聖ガブリエル　われらのために祈り給え……

群衆が道をあける。

その先頭には、幡を押し立て灰色の修道服をまとったスティッマーテ信心会会員の一団。彼らは木製の十字架像をぶらさげた革ひもで腰をしっかり縛り、使徒ふうに素足に靴を履いている。その後には、兵士や憲兵がバラバラに群をなして続き、さらにその後には、頭巾をかぶったミゼリコルディア信心会の人たち、これまた幡を押し立てている。

最後に二台の馬車が続く。

一台目の馬車には、上半身が裸のジャーコモと死刑執行人､そして聴罪司祭や裁判所の助手たち。二台目の馬車には、黒のマントを被って顔を隠したベルナルドが乗っている。

さらにその後にも別の憲兵と兵士の一団がいて、増え続ける群衆を馬車に近づけまいとしている。

一台目の馬車が、トマスらの前に差し掛かった。

トマスは､馬車の中の光景に思わず叫び出しそうになった。

裁判所の助手たちが、判決の規定に従い、赤く熱したペンチでジャーコモの胸や背中の肉片をちぎっている。チェンチ家の長男ジャーコモは、叫び声一つたてずその拷問に耐えていた。

「ヤツは間違いなく阿片を与えられている。あの目を見ろ……」

バルトロメオが、トマスの耳元にささやいた。

トマスは、そんなバルトロメオの声も聞こえなかったか

のように、茫然と馬車を見つめている。その目が、ジャーコモの視線と絡み合った。

　何かを訴えるような悲しげな目が、トマスの前を通り過ぎていった。

　信心会員たちは「諸聖人の連禱」を唱え、聖人の名を口にするたびに〈オーラ・プロ・エイス〉と祈願し続けている。

　トマスは何かに憑かれたように、馬車の後を追って歩き出した。

　ミゲルもその後を追おうとして、バルトロメオの腕に止められた。

「チェンチ家の礼拝堂を探すのなら、この機会を逃す手はない。ローマ全体が、ベアトリーチェの処刑に向いている。今なら誰にも邪魔されず礼拝堂を探せる。」

『シクストゥス聖書』も『マリアの福音書』も、チェンチ家の礼拝堂・聖具室に隠されているのだ。確かに今なら、誰にも見とがめられることなく、チェンチ家の礼拝堂に忍び込むことができるだろう。バルトロメオの言うように、千載一遇のチャンスだった。

「トマスはどうする。」

「トマスなら大丈夫だ。彼の好きなようにさせよう。」

　トマスは、二人がついてこないことにも気づかず葬列の後を追い続けていた。

葬列は、アッポリナーレ広場からトール・サングィーニャを越え、ドゥーカ広場を通って、サンタ・マリア・ディ・モンセッラート街へと到着した。ベアトリーチェが囚えられているサヴェッラ法廷のある街区だ。葬列は、ここサヴェッラ法廷の前庭で、ベアトリーチェとルクレツィアの下りてくるのを待つ。

やがて、二人の女性は鎖はつけず、黒っぽいマントに身を包み路上に現れた。

ベアトリーチェは毅然とした態度で歩み、その後から彼女の継母であるルクレツィアが足を引きずるようにして歩んでくる。

ルクレツィアはというと瞼を気ぜわしく痙攣させ、息づかいも不規則で、いつパニックを起こすか分からない状態だ。事実、執行人がジャーコモの体に加えた残虐行為を見たとたん、うめき声を上げ止めどなく泣き始めた。

これに対し、ベアトリーチェは終始、毅然とした態度を崩さなかった。

ベアトリーチェのその毅然とした美しさを、モデナ公国の諜報員パオルッチは、「いまだ十八歳にもならぬに、群を抜いた美しさと上品な振る舞いをもって聞こえ」「この試練の中で大いなる精神力のほどを示し、すべての人々の目に驚きと映った」とエステの枢機卿に伝えている。

実際は、ベアトリーチェはこのとき二十二歳であったが、幼い少年のような顔立ちが悲劇性をかき立て、今や群衆は溢れかえらんばかり。窓、バルコニー、テラスは鈴なりで、そのほとんどの人たちがチェンチ一族に連帯感を示し、一族にこのような理不尽な処分を与えた者たちに軽蔑と恨みつらみをあらわにしていた。
　ベアトリーチェらを加えた葬列は、群衆のざわめきの中を、再び移動を開始した。
　ベアトリーチェとルクレツィアは徒歩で、馬車の傍らを歩んでいくが、行列がバンキ街区に入ったとき、その事件は起こった。
　バンキ街の舗装道路が糞でヌルヌルと歩きにくくなっていたのだ。この頃、糞や汚物を道に捨てるのは当たり前のこと。中世から近世にかけてのヨーロッパは汚くて臭い。だからこそ教会の中は、香を炊き、ステンドグラスで光の演出をし、音楽を響き渡らせ、別世界をつくりだす。臭くて汚い外界から一歩教会へ足を踏み入れた人々は、そこにこの世の天国を感じたのだ。
　だから、バンキ街の路面が糞でヌルヌルしていたからといって驚くには当たらない。ただ、このときの状態はひどかったようだ。通るに通れず、徒歩の者たちは、壁に体をすりつけるようにして進まなければならなかった。
　そんな中、ルクレツィアが自分のマントを踏みつけてし

まった。たちまちバランスを崩し、ヌルヌルすべる路面に足を取られ、その場に転倒してしまったのだ。

これが合図となった。民衆の興奮が一挙に爆発した。

二人の女性に花束を投げる若者がいるかと思うと、役人たちに向かっておびただしい小石が投げられた。夫婦喧嘩よろしく、鍋や皿までが役人にぶつけられる。

眉間に小石が命中した憲兵は、怒りに駆られ、火縄銃の銃床を誰彼かまわず振り回し応戦を始めた。他の憲兵たちもこれにならい、たちまち辺りは修羅場と化した。逃げまどう人々。逃げる者と襲いかかる者たちの間で押しつぶされ、踏みつけられる人たち。

争乱街区には憲兵が送られ、鎮圧にかかっている。その争乱の中を、葬列は駆け抜けるようにして処刑場へと到着した。

トマスもまた、あの争乱からどのようにして抜け出したのか、いつの間にか処刑場であるポンテ・サンタンジェロへとやってきていた。

正午頃、サンタンジェロ城の哀れみの鐘（ミゼリコロディア）が鳴り始めた。

鐘の音にせかされるように、死刑囚のための祠からベアトリーチェたちが出てくる。

四人の囚人たちは、争乱の中を突っ切るようにして処刑

場に到着するや、最後のミサのためにと、この祠へと導かれていたのだ。

　トマスは、人混みをかきわけるようにして最前列へと出た。

　最初に引き出されたのは、一番下の弟ベルナルドだ。

　彼は馬車の中で、兄ジャーコモに加えられた拷問を終始見せつけられ呆けたようになっている。その蒼白となった頬には幾筋も涙のあとがこびりついていた。

　トマスの後ろでささやき声が聞こえた。

「弟のほうは、まだ十八歳になったばかりだってさ」

「あの子も殺されちまうのかい」

「いや、奴隷船送りだって言うぜ」

　そう言っている間にも、ベルナルドは、急設された処刑台の片隅へと誘われ、その場に座らされた。ここでベルナルドは、兄であるジャーコモや、姉ベアトリーチェ、それに継母であるルクレツィアの処刑の有り様をことごとく目にさせられることとなる。

　ベルナルドに続いて、ルクレツィアが、告解司祭たちに支えられ引き出された。

（私はこんな恐ろしい目に遭うために、フランチェスコ・チェンチに嫁いできたのだろうか。自分が望んだ結婚ではなかった。たしかに、こちらも亭主に死に別れた身。最初は良い話だと思ったのだが……フランチェスコが異端の信奉者だったなんて。知っていれば嫁いではこなかっただろう。そうすれ

ば、こんな亭主殺しの片棒を担いだなどという汚名を着せられたまま、殺されるようなことはなかったはずだ……）

ルクレツイアが、どんなに後悔しようと、すべてはあまりに遅すぎた。

なぜなら、彼女が処刑台への梯子を上り詰めたところには、その後悔や逡巡、いや彼女の人生そのものにピリオッドを打つべく、黒いマスクに顔を隠した死刑執行人が彼女を待ちかまえていたのだから……。執行人を見たとたん、ルクレツィアは、突然、足をすべらせ壇上から転げ落ちそうになった。付き添っていた告解司祭があわてて彼女を支え、抱きかかえるようにして細長い処刑台へと運んだ。

執行人の助手が、彼女の髪をつかんで頭をもたげさせた。

トマスの目には、彼女が気を失っているようにしか見えなかった。

その直後、警吏が手を挙げて処刑の合図をするのと同時に、死刑執行人の斧の一撃が彼女の首に振り下ろされた。そのときだ、気を失っていると思われた彼女の目が大きく見開かれた。彼女の首は、何か問いたげな、驚いたような表情のまま胴から切り離された。

広場に集まった群衆から、すさまじい不満の声がざわめきとなって広がった。

このざわめきは、次いでベアトリーチェが引き出されたことで一層の高まりを見せる。

「ベアトリーチェは無罪だ。彼女を殺させるな！」
　鈴なりに家々の軒によじ登っている連中の一人から声が挙がった。
　その声に触発され、役人たちを野次る声、ローマ教皇を非難する声が、あちらこちらから湧きあがる。
　このざわめきの中、ベアトリーチェは、青ざめながらも、誇り高い美しさに輝き、毅然とした足取りで処刑台へと向かってくる。彼女は、台の下で一瞬立ち止まると、視線を空に泳がせた。やがて心を決めたかのように、処刑台へあがり、恐怖に目を見開いている弟ベルナルドに優しく微笑みかけるや、木製の刑具に首を差し出した。
　ざわめきが途絶えた。
　男たちも女たちも、そっと十字をきった。
　静けさの中から、あちらこちらで啜り泣く声が広がり始める。
　死刑執行人は、明らかに動転している。みんなの怒りや恨みが、自分に向いている。先ほどまでの野次より、今の沈黙が耐えられない。
　トマスは、観念したように静かに目を閉じたベアトリーチェの青ざめた顔を見ていた。
　美しいと思った。
　そんなとき、見物の子供が急に火のついたように泣き始めた。

うろたえた警吏は、その声に驚き、うかつにも警吏の合図を待たずに斧を振り下ろしてしまった。そのとたん、群衆の叫びが再びどっと湧き起こり、またぞろ争乱が起こりそうな勢いとなった。

その勢いに警吏たちは浮き足立ち、大急ぎで、最後の犠牲者ジャーコモを処刑台へとかつぎ上げた。というのも、ジャーコモは、これまでに受けた拷問のため、体力も尽き果て、一人で立っていることも出来ない状態だったからだ。

処刑台に上げられたジャーコモは、そこで震えおののき、痙攣しているベルナルドを見た。

（かわいそうに、まだ幼いというのに……）

ジャーコモは、弟に何か言葉をかけようとするのだが、唇は腫れ上がり、舌は熱で喉に貼り付いたようで、ゼイゼイという音しか出てこない。

ジャーコモは弱々しく首を振ると、首切り台に頭をのせ、聴罪司祭に目で訴えかけた。

司祭が、何か言いたいことがあるのかと、ジャーコモの口元に耳を寄せた。

ジャーコモは、かすれるような声を絞り出した。

「オ・ト・ウ・ト・ヲ・遠ざけて……」

しかし、司祭にその権限はない。ただ空しく首を横に振るばかりだ。

ジャーコモは諦めたように目を閉じた。

やがて、ジャーコモの頭を叩きつぶすべく、執行人の大槌が振り下ろされた。

哀れにもチェンチ家の長男は、きれいなままの首を残すことさえ拒否されていた。しかも残された遺骸すら、執行人によって切り裂かれ、台から突き出た釘に肉片として吊るされることとなっていた。

この作業を見るにおよんで、ベルナルドは、ついに気を失ってしまった。

神父が哀れな遺骸に祝福を与え、哀れみの鐘（ミゼリコルディア）は鳴りやんだ。警吏が処刑の終了を宣言するため、ラッパを吹き鳴らすよう命じる。

こうしておぞましい行事が終わった……。

連祷と懺悔詩篇の頌詩が再び唱えられはじめられるや、司法官、法廷関係者、信心会会員たちは、次々と広場をあとにし始める。

……ところが、群衆のほうは動こうとしない。処刑の残酷さに気をのまれ沈静化していた怒りが、再び、群衆の中から勢いを盛り返そうとしていた。

処刑場を去ろうとする役人や聖職者たちに、次々に罵声の声が浴びせられる。

敵意、非難、脅迫……日頃の不満までが、ベアトリーチェの処刑に凝縮され、爆発するきっかけを待っていた。

兵士や役人たちは怯え、道を通れるようにと、矛槍や火

縄銃を構え群衆を威嚇しながら、綱を張ろうとする。

執政官の一人が、警備の責任者らしき憲兵にしがみつき

「もしこの連中が、こんなふうに猛り狂い迫ってきたら、チェンチ一族に起こった災難を、今度はこちらが被ることになるぞ……」

「心配めさるな。所詮、民衆は雑種の犬にすぎません。餌が食べられるかぎり、ただ吠えたてるだけで、噛みつくことはありません。」

しかし、この警備隊長の自信は次の瞬間に崩れ去った。

木の枝にのぼり、役人たちを野次っていた男が、その枝ごと役人達の上に落ちてきた。興奮して枝を揺すったため、枝が折れたのだろうが、浮き足だった兵士の一人が、思わず空に向かって発砲してしまったのだ。

この銃声が一瞬の沈黙をつくり出したが、騒ぎはそれで沈静化するどころか、かえって大混乱が始まった。石といわず、食器といわず、およそ投げられそうなモノはすべて役人や聖職者に向かって投げつけられはじめた。また折れた枝を振り回し役人達に向かっていく者がいる。その男を先頭にして、素手の男達が、罵声と肉体だけを武器に押し寄せる。

逃げようとする女や子供達が、怒り狂った群衆に押し倒され、踏みつぶされる。

処刑前の暴動鎮圧に駆けつけた部隊は、処刑場を遠巻き

に取り囲んでいたが、この騒ぎにたちまち動き始めた。槍矛を構えながら、暴徒化した群衆を取り囲み、その輪をジワリジワリと縮めてくる。

騒ぎの中心となるサンタンジェロ橋では、混乱から逃れようとテヴェレ川に飛び込む者、興奮のあまり、自らの頭を橋にぶつけ続けるもの、兵士の剣を奪い暴れ回る者……

ある記録によれば

「多くの人が常軌を逸した。一例を挙げれば、修道女になる日も近いマッダレーナ・デリ・オノフリとかいう十八歳の娘の身に起こった悲劇的なケースは哀れをそそる。チェンチ母娘の首がはねられ、ジャーコモの脳味噌が飛び散るのを見るや、着ている服をびりびりに破き、体中を掻きむしって逃げ出した。やっと家に引きこもると、肉切り用の斧を右手に持ち、左手をばっさり切り落として、出血多量のために死んでいった。」

このように、この日、多くの人が狂気にとりつかれ、多くの悲劇が起こった。

暴動は、夕刻近くになってようやく沈静化の方向へと向かったが、この暴動で十三人の死者と、六百人を越える怪我人が出た。さらに百名を越える人間が拘束された。

そして、この逮捕者の中にトマスも含まれていたのだ。

## 28

　トマスが目を覚ましたのは、暗闇の中だった。
　背中に冷たい土の感触がある。
　部屋の隅のほうにほんの幽かな明かりが射し込んでいる。
（いったい、どこなんだろう？）
　体を起こそうとすると、後頭部にひどい痛みがはしった。思わずその部分に手をやると、生ぬるい血がべっとりと付いてきた。
「やっと帰ってきたな……」
　暗闇の中に懐かしい声が響いた。
　トマスはしばらくの間、自分が今どこにるのか分からなかった。
（懐かしい声だ……でも誰なんだろう？　イタリア語……いや違う。ラテン語で「お帰り」と言っているんだ。この声は、ブルーノ……ジョルダーノ・ブルーノの声だ。）
「そう、君はサンタンジェロ城の牢獄へ帰ってきたという訳だ。牢獄の中と外という違いはあるが……まあ、君も今や立派な囚われ人という訳だ。」
「……………」
「と言っても、これもアレッサンドロ枢機卿の計らいの一つだ。君はやがて釈放されるだろう。君はイタリア各地へ

の遊学からローマへ帰ってきたところ、あの暴動に巻き込まれた。そして暴徒と間違って逮捕された……という筋書きだ。」
（そうだ、僕はチェンチ一族の処刑に出くわしたんだ。）
「ミゲルやバルトロメオは、どうなったんでしょう？」
「君がこの牢獄へ放りこまれ、しばらくしてからのことだ。アレッサンドロ枢機卿の息のかかった看守を通じて、この手紙が届けられた。」
　トマスは、ブルーノの差し出す手紙を、幽かな明かりにかざしてみた。
「…………？」
「換字式の暗号で書かれてある。ラテン語に置き換えられた上に、アルファベットが一字ずつずらして書かれている。慣れていなければ、この薄明かりでそれを解読するのは至難の業だろう。要するに、君がチェンチ一族の処刑に立ち会っている間、ミゲルやバルトロメオは、君たちがフィレンツェで知った『シクストゥス聖書』の隠し場所――チェンチ家の礼拝堂を探しに行ったというのだ。皆の目が処刑に向けられ、今なら誰にも怪しまれずに探し出せると思ったのだろう。」
「……で、見つかったのですか？」
「いや、見つからなかった。祭具室はもぬけのカラ。何一つとして残されていなかった。すべて没収された後だった。」

「そうですか……」

残念というより、なぜか安心感がトマスを包んだ。

「……しかし、トマス、君はすでに見つけているとも言える。『シクストゥス聖書』を探す過程の中で、君は、キリスト教世界について、ずいぶん様々なことを知った。普通では知り得ないことばかりだ。それはキリスト教の闇の部分と言えるだろう。

そうとも『シクストゥス聖書』を探すということは、キリスト教の闇と出会うということなのだ。その闇の中で、一つの宗派や宗教にとらわれず、本当のことを知ろうとする流れがあることも知ったはずだ。それは遠い過去から今にいたり、さらに果てしない未来へと続いていく。真実はいつもスルリスルリと人間の手から逃げていく。それを人は、生まれ変わり死に変わりして、どこまでもどこまでも追いかけていくことだろう。いつか人は、自分の中に本当のものを見つける日が来るかも知れない。それまでは、自分の進む道が闇と分かっていても、進まざるを得ない。私自身、何も分かっていない。分かっているのは今のキリスト教は間違っているということ、ただそれだけだ。

アレッサンドロ枢機卿が伝えてくれた情報に依れば、私が火刑にされることも決まったようだ。もう言い逃れする必要もなくなった。自分が主張してきたことがすべて正しい、これこそが真実だなどとは思っていない。しかし、私

は自分の考えを訂正するつもりはない。キリスト教は間違っている、真実に至る道ではないことを伝えるためにも、私は自分の思想に殉じるつもりだ。火刑が決まった今、自分に残された道はそれしかない。たとえ、それが闇を行く道だと分かっていても……。」
「……………」
「トマスよ、アレッサンドロ枢機卿によろしく伝えてくれ。君を送り込んでくれたことが何よりの餞(はなむけ)だったと。そしてベラルミーノ枢機卿には気を付けるようにと。彼は私たちが思っているより、多くのことを知っているようだ。トマス、君自身も、これ以降、彼の監視下に置かれることになるだろう。君は生きて日本へ帰ってくれ、そして日本で何があろうと生き抜いてほしい。それが『シクストゥス聖書』を探すものの宿命だ。
　バルトロメオにも、ミゲルにも……君とも、もう会うことはないだろう。次に会うことがあるとすれば、それは私の処刑のときかも知れない。」

　やがて看守の足音が近づいてきた。そして牢獄の扉が開かれた。
「トマスアラキ！　釈放だ。」

　開けられた扉の向こうに、朝の光が石の階段を滑り落ち

るように広がっていた。
　トマスは屈むように扉をくぐると、今一度振り返り、ブルーノの顔を見た。そして訳もなくただ頷きあった……。

　再び闇が帰ってきた。
　その闇の中で、ブルーノはノストラダムスという男のことを思った。今回のことは、すべてあの男の言葉から始まった。
「将来、ローマ教皇になられるお方……」
　その言葉が、フランチェスコ会の若い修道士フェリーチェに向けられたときから、この物語は始まったと言える。ノストラダムスの言葉がフェリーチェを縛った。
「猊下の耳に、この私、ノストラダムスの名声もいつか伝わっていくことでしょう。」
　その言葉通り、フェリーチェの耳には、予言者としてのノストラダムスの名声が次から次へと伝わってくる。それに伴い、自分に向けられた予言も重きをなし、ますますフェリーチェを縛ることになる。この予言に縛られるようにフェリーチェはローマ教皇となり、シクストゥス五世として即位した。ローマ教皇になった日から、シクストゥスの新たな懊悩が始まった。それは、ノストラダムスは、フランス王妃カトリーヌ・ド・メディチの庇護がなければ、異端審問で火炙りにでもにかけられるような男だということだ。
「あんな異端者の予言によって、私はローマ教皇になった

のではない。神が私を必要としたからローマ教皇となった。私は神に選ばれた者だ。」

　これがシクストゥスの思いの中核となった。そして、ノストラダムスを否定する中で、彼は、いつしかノストラダムスの影響を受けていたと言える。カトリックの庇護者と自他共に認める「シクストゥス五世」こそ、ノストラダムスやルネサンスの影響を、誰よりも受けた者だったのかも知れない。

　シクストゥスは、カトリックの庇護者である自分を内外にアピールすべく、必死に働き、そして、カトリックの看板である「ラテン語聖書」の改訂を目指したのである。

　その思いが天正少年使節を通じて、海を越え日本に伝わり、日本のキリスト教信者をも縛ることとなった。ノストラダムスの見えない言葉の魔力が、トマスという日本人青年にキリスト教世界の闇を伝えることともなったのだ。

「ノストラダムスよ、あなたはあの日本の青年に、とんでもない重荷を背負わせたのですぞ。あなたは、トマスのこれからの人生をも分かっていたとでも言う積もりでしょうか。すべては、星の世界に預言されていたことでも言うのでしょうか？」

## 29

千代は、まだ「サントスの御作業」の暗唱を続けていた。
「……然れば武士どもは方々を尋ね申せども、逢ひ奉らざる故に、ある童二人を召し捕り、拷問して、その御すみかを知り、サント(聖人)のしのび居給ふ御宿所に乱れ入るものなり。サントは逃がれんと思し召さば、もつともやすきことなれども、既にデウス(神)の御定めの時節は今なりと知ろしめして、彼等が迎ひに出で給ひ、内に請じて好膳を供奉し給ひ、その間にデウスヘオラシヨを申し上げ給ふものなり。武士どもこれを見て、さてもこれほどの善人に縄をかけんことはと猛き心にもいたはり申すなり……」
「サントスの御作業」は、ヨーロッパから運び込まれた印刷機で、一五九一年に加津佐でローマ字本として印刷された。印刷機を持ち帰った天正遣欧使節の人たちや、コレジオ、セミナリオの教師等を中心に、この出版作業が続けられたのだが、その作業を手伝った学生の中に、トマスや兄のミゲルもいた。幼い千代も、コレジオによく遊びに行っては、刷り上がった紙片を教材に、トマスからローマ字の手ほどきを受けたものだ。
千代の暗唱は、そんな「サントスの御作業」の中、ポリカルボ伝にまでおよんでいた。

耳を傾けていたトマス、いや了伯から、ポツリとその後の句が漏れた。
「……そのオラシヨの終りに思し召し出ださるるほどのキリシタンのためにデウスを頼み給ひ、御回向も終りぬれば、武士どもサントを驢馬に乗せたてまつて、糺し手の前に引き奉るなり……」
千代の暗唱が止まった。
そして涙を拭おうともせず、トマスの顔を見つめ直した。
トマスは、その問いかけるような眼差しに向かって言葉を続ける。

私自身、糺し手の前に何度か引き出されることになりました。その最初は、日本のお役人の前ではなく、ローマで、しかも、キリスト教の良心とまで言われたベラルミーノ枢機卿の前に引き出されたのです。私がフィレンツェから帰り、ベアトリーチェ・チェンチ処刑後の暴動が一段落を見せた頃でした。ベラルミーノ師は言われました。「シクストゥス聖書は見つかったのか」と。
私が何と答えてよいか分からず黙っていると、「チェンチ家の礼拝堂を探しに行ったのは分かっている』と言われ、『……何も見つけられなかったであろう」とも言われました。「シクストゥス聖書は、異端者たちの影響を深く受けたものだ。だからこそ、教皇の死後、そのすべてを消滅させね

ばならなかった」。事実、ヨーロッパ中に配された優秀で仕事熱心な異端審問所の活躍によって、すべての『シクストゥス聖書』は回収され焼却された。ただの一冊といえど、ヴァチカンの作りだしたこのネットワークから逃れることはできなかったはずだ。それが、トマス、遠く東の果てから来た君たちが『シクストゥス聖書』のことを知っていた。そればかりか、底本にこの『シクストゥス聖書』を使って、日本語版の『新約聖書』をつくりたいなどと言う。

あれから、すべてが狂いだした。わしの警告にも関わらず、君たちはは『シクストゥス聖書』について嗅ぎまわりはじめた。まあ、そのおかげで異端の組織の存在が浮かび上がってきたわけだ。おそらくヴァチカン内部にも、その勢力は入り込んでいるのだろう。」

静かにうつむき加減で話すベラルミーノの顔がそっと持ち上げられ、そのするどい目がトマスに向けられた。

「だからこそ、『シクストゥス聖書』にあのような細工をすることができたのだ。

トマス、誰のことか分かるかな？」

「……シクストゥス様の秘書官のことでしょうか？」

「そればかりではない。おまえも現にその目で処刑を目撃したであろう。あのチェンチ一族にしたところで間違いなくこの組織の人間だ。彼等に口を割らせられればよかったのだが、あるところまで以上は追いかけることができぬ。

部分部分は分かっても、その全貌を知る人間はいない。チェンチの娘ベアトリーチェにしたところで、自分が無実の父親殺しの罪で捕らえられたとしか思っておらぬ。」
「やはりローマの人々が言うように、ベアトリーチェは無実だったのですね。」
「奴らは何も分かっておらぬ。何も知らぬくせに『ベアトリーチェは無実だ。彼女の言い分にヴァチカンはもっと耳を傾けるべきだ』などと騒ぎ立てる。」
「……無実ではないのですか。」
「無実だ。フランチェスコ・チェンチを殺させたのは、他でもない、この私だ。チェンチ家は、代々ヴァチカンの会計係をしておったが、カタリ派の流れを汲む異端をも信奉しておったようじゃ。私はあの『シクストゥス聖書』については、あれは教皇一人でやったことではないと思っておった。確かに教皇は頑固で、ルネサンス期のユマニスト（人文主義者）たちに反発するあまり、逆にその影響を受けていたと言えなくはない。しかし、聖書の中に、あのような文言を挿入する人物ではない。そこで、私は当時のシクストゥス教皇の周辺を調べだした。そうしたら、フランチェスコの奴、何を怯えたのか、一族をあげてローマから逃げ出してしまった。おかしいと思い、残されたチェンチ宮を異端審問所に命じ徹底的に調べさせた。結果、チェンチ家の礼拝堂から、書き写された『マリアの福音書』が見つかっ

た。イエスの身近に居たというマグダラのマリアが、イエスの言葉を書き残したものだといい、カタリ派の信者に大事にされておったものだ。もちろん偽りであり、異端の書であることに間違いはない。これがフランチェスコ一人にとどまらず、調べていくに連れ、シクストゥス教皇の秘書を含め、教皇の周囲にいる人間や枢機卿にまで異端者が及んでいることが分かってきた。

　しかし、彼等以外に具体的な人物が特定できないばかりか、証拠がない。おおっぴらに騒げばヴァチカンの威信を傷つけることになるし、そこから『シクストゥス聖書』のことに及ばないとも限らない。そこでフランチェスコ・チェンチの逃亡先の城代を買収し、彼等の周辺を探らせることにしたのだが、そのことがフランチェスコにばれ、争ううちにやむなくフランチェスコ・チェンチを殺す羽目になってしまったという。」

「ではチェンチの残された一家を親殺しの罪で裁くのは……」

「一族こぞって異端を信奉しているように思われる。かといって、それを表面に出すことはできない。センセーショナルな事件をでっち上げ、目をそちらに向けさせる。

　派手で悲劇的なことほど人は信じやすい。その間に、ヴァチカン内部にどれほど異端が浸食しているか、一族を徹底的に調べ上げ、そのうえで親殺しの罪で死んでもらった。」

「惨いことを……」
「今、この時期、ヴァチカンはユマニストやプロテスタントたちを相手に戦っている。ヴァチカンの威信が地に堕ちれば、この世界は、巨大な闇の支配するところとなろう。もっと惨い世の中が訪れる。」
　ベラルミーノは、思った。
「教皇が私のことをあれほど嫌っていなければ、『シクストゥス聖書』のことは事前に阻止することはできたはずだ。しかし、教皇は私のことを病的なまでに毛嫌いしていた。かねてから自分の考えに何かと意見がましいことを言う私に対し、教皇は何度も怒りを爆発させ、シクストゥスが教皇職にある間、私は任務にことよせイタリアを離れるという避難措置さえとらなければならなかった。
　しかし、ことここに至った上は致し方ない。今は、ヴァチカンに巣くう異端の根を一掃せねばならない」
「では、私たちはそのために……」
「そうとも、『シクストゥス聖書』のことを嗅ぎまわるおまえたちを囮にして、この際、ヴァチカン内部にまで入り込んだ異端の根を摘んでしまおうと思った。トマス、そのために君たちには重荷を背負わせることになるだろうが、それも自分の選んだ道……ただ、どうしてもアレッサンドロ枢機卿の尻尾をおさえることができなかった。まあ、それも時間の問題だろうがな。

……で、どうであった？　これが君たちが知りたかったことのすべてだ。何か収穫があったのかな。キリスト教の闇の部分をその胸にドッサリと抱え込んで、おまえはそれでもキリスト教を信じていけるというのか。日本人とは、よけいな苦労を背負い込むのがとことん好きな人種のようだな。

……安心したまえ。シクストゥス聖書がないと分かった今、おまえたちを罰しようとは思っていない。それどころか君たちが望む教区司祭にも叙任されるようにしてやろう。かえって苦しみを背負うことになるだろうが、それも君たちの選んだ道だ……」

トマスの話に耳を傾けていた千代の亭主・九介がたまらずに口を挟んだ。
「トマス様、シクストゥス聖書が見つからなかったというなら、そこにある聖書は一体……？　トマス様はたしか……」
「チェンチ家の礼拝堂にはなかったということです。だが、シクストゥス聖書は思わぬ場所に隠されていました。私たちが暮らすコレジオ・ロマーノの図書室に堂々と置かれていたのです。」

コレジオ・ロマーノ、それはトマスらが寄宿生活を送る場所。フィレンツェへ旅立つ前、トマスは、ベラルミーノ師にこの図書室へ連れてこられ、一冊の聖書を託されたことがあった。
「シクストゥスの聖書は誤植が多すぎるため廃版になりました。次のクレメンテ教皇のとき、シクストゥス＝クレメンテ聖書として改訂版が出されました。今ここに用意したものがそうです。イエス様のご生涯を日本語に訳されるには、この版をテキストに使われるとよいでしょう。」
　そう言って託された聖書、妙にそのことが気になって仕方がなかった。ベラルミーノ師の言葉が、トマスの心の中で反響し、それが何か大きな不安となって、重たく自分にのしかかってくる。
　その声を思わず振り払おうとして、目が覚めた。
　そこはコレジオ・ロマーノのトマスらの寄宿部屋。
　トマスの目覚めるのを待ちあぐねていたかのように、ドアのところに一人の少女がこちらを見つめていた。
（チェンチ……、ベアトリーチェ・チェンチ。）
　恐怖心はなく、トマスは心の中で、その名を呼んでみた。
　ベアトリーチェは、軽く頷くと、うながすようにドアの外へと消えていった。そして、彼女に導かれるようにして着いたのが、コレジオ・ロマーノの図書室だった。

シクストゥス＝クレメンテ聖書。その聖書は、ベラルミーノ師に勧められたときのまま、閲覧台の上に置かれてあった。

トマスのもの問いたげな目に、ベアトリーチェの目が大きく頷いたかのように感じられた。

「実はシクストゥス聖書は、表紙だけを取り替えられたうえで、ベアトリーチェの手で持ち出され、彼女が捕らえられていたサンタンジェロ城の祭具室にある予備の聖書とすり替えられていたのです。それがどんな経緯からか、コレジオ・ロマーノの図書室に移され、それをあろうことか、シクストゥス聖書をこの世から消滅させようとしたベラルミーノ枢機卿本人の手で、私どもに手渡されていたのです。表紙を換えられてしまえば、もう何も分からない。私自身、ベアトリーチェの亡霊に導かれることがなければ、容易に見つけることは出来なかったでしょう。でも見つけてしまえば、あとは、翻訳のためのテキストとして日本に持ち帰らせてほしいと依頼するばかりでした。」

千代と九介の目が、目の前にあるシクストゥス聖書に釘付けとなった。

そんな二人にかまわず、トマスは話し続ける。

「話を戻しましょう。ベラルミーノ師は、師のもとを辞そうとする私に最後にこう言われました。」
「ブルーノの処刑は来年の二月に決まった。カンポ・デ・フィオーレで火炙りとする。そのときは、トマス、君にも立ち会ってもらう積もりだ」と。
「……分かってはいましたが、ひょっとしてアレッサンドロ枢機卿の働きでブルーノ様も助かるのでは、そんな思いもありました。しかし、その希望も絶たれてしまいました。
　ブルーノ様の処刑が決まったということは、それは同時にアレッサンドロ枢機卿に代表されるカトリックの革新を目指す勢力が、ベラルミーノ師に代表される保守勢力に破れたことを意味していました。ブルーノ様の処刑を機に、反動の嵐が吹き荒れるのは目に見えていました。
　しかし、アレッサンドロ様の巻き返しも激しく、クレメンテ八世猊下が一六〇五年三月に崩御されるや、メディチ家の力やフランスの力を背景にして、師は、第二三三代ローマ教皇レオ一一世として即位なされたのです。師は、フランス王妃マリー・ド・メディチの姻戚だったから、師の即位が決まるや、トスカーナ公国やフランスは喜びの渦に包まれました。トスカーナ大公も、堅物のベラルミーノより、やはりメディチ家出身の教皇のほうが扱いやすいと思ったのかも知れません。フィレンツェやフランスばかりだけではなく、ローマの市民もその寛大な性格を愛し、ローマ中、

喜びでわきかえるようでした。そして我々もまた大喜びだったのです。

　これですべてが変わる。そう思ったものです。ところが、その喜びの行幸の中であの事件は起こりました。乗られた馬の腹帯が切れ、教皇が落馬されたのです。

　以来、教皇は寝込まれるようになり、回復に向かうどころか感冒にまでかかり、遂にはお亡くなりになってしまいました。

　一六〇五年四月一日から二七日までのわずか四週間足らずのご在位でした。

　今でも私は、レオ教皇様の死は企まれたものだと思っています。馬の腹帯が切れたのも計画されたものなら、その後の病状が悪化したのも、毒を盛られたものに違いない、そう思っているのです。こうして我々の夢も消えました。レオ一一世猊下の後は、保守派の代表株とも言えるパウルス五世が即位することになったのですから。」

「ブルーノ様のお最期はどのようなものだったのですか？」

　千代が思わず言葉をはさんだ。いつしか頑なな表情にも、いつもの暖かさが少し戻ってきているように思えた。

## 30

ブルーノの処刑は一六〇〇年二月十七日と決まった。

この日、牢獄から引き出されたブルーノは、サンタンジェロ橋を渡るや、ヴィア・ディ・コーダ、つまり縄尻通りとよばれる小道を、その名前にふさわしく縛りあげられた縄尻をとられながら、カンポ・デ・フィオーレへと引き立てられていった。

現在、カンポ・デ・フィオーレ（花の広場）は、その名の示す通り、花や果物•野菜を商う露店でにぎわっているが、当時は陰惨な処刑場として恐れられ、この地で異端者の烙印を押された多くの人たちが生きながら焼かれていった。

ジョルダーノ・ブルーノは、一五四八年、ナポリ近くのノラという町に生れた。ブルーノ自身、自らのことを常に「ノラ人」と称しているように、十四の年にナポリに出て以来、ノラの町は、自らが帰るべき故郷として彼の中に定着していったようだ。

以後、ブルーノは十四歳で人文学や弁証法を習い、十七歳にはドミニコ派修道院に入る。しかしブルーノは、この修道院時代に、神学以上に記憶術や幾何学・天文学につよい興味を示し、更にはテレシオの自然学に親しみ、当時す

でに焚書となっていたエラスムスの書物まで隠れて読んだりするようになった。そして、このようなひろい探究は、キリスト教教義に対する批判的態度を早くから生み出し、修道院当局からは次第に不審の眼をもって見られるようになった。そのあげく、一五七六年、キリストの神性を否定するアリウス説を支持した疑いでローマに告発された。

時に二十八歳、これよりブルーノの十六年にわたる放浪生活がはじまる。

以後、パリで、ロンドンで、著述活動・講演活動を続け、その名声は上がっていくが、最後に舞い戻ったイタリアのヴェネツイアにおいて、異端者として告発され捕らえられるに至った。

ヴェネツイアの獄では、「修道僧の身分を脱して一哲学者として生きたい」という希望を持ち続け、法王庁が彼の思想の価値をみとめて、それにふさわしい扱いをしてくれることを期待していたようだ。それは故なき希望ではなく、その背景にはメディチ家出身のアレッサンドロ枢機卿の理解と援助があり、その活動もあって、一年後、ブルーノはローマに引きわたされることとなった。しかし、ブルーノが喜んだのも束の間のことであった。

反動宗教改革の嵐の中で、ベラルミーノ枢機卿を中心とするブルーノを弾劾する声が次第に力を得、ブルーノの釈放は思うに任せず、七年におよぶ訊問と拷問のなかで、そ

の希望も次第に萎んでいった。

この頃だ、ブルーノが日本から来たトマスという青年にあったのは。

ブルーノは、トマスにキリスト教の闇の部分を伝えながら、己の態度をも固め、ローマの牢ではもう幻想をすて、自らの哲学的態度を守り通す道を選んだ。ブルーノを告発する最後にまとめられた八ヶ条の異端には、三位一体の教義と聖餐の秘蹟とを疑ったこと、またキリストの神性を疑ったこと、人の輪廻を説き、宇宙の無限を主張したことがふくまれており、審問官はブルーノの著書の主張を前後の連関からきりはなして異端を責めたてたが、彼は「それは曲解であって、哲学というものをみとめぬことである。信仰においては自分に何の異端もない」と、教皇庁に真っ向から対立した。

広場の中ほどに、今まさに火を放たれようとする薪が堆く円形状に積まれている。その中央には、ポンペイ劇場を背にして高く立てられた一本の十字架があった。

罪状を読み上げる聖職者に、ブルーノは言った。「私に宣告を下しているあなたがたのほうが、宣告をうける私よりも、もっと怖れているのではないか」と。

そんな暴言が二度と吐けないよう、ブルーノは舌伽をかまされ、裸にされたうえで、その十字架に縛り付けられた。

そのブルーノの目の前に長い棒にくくりつけた十字架が差し出された。

ブルーノは、十字架をかかげ自分を見上げるその若い修道僧の顔を見て驚いた。

目深にかぶった修道着のフードの奥に、涙に濡れた懐かしいトマスの顔があった。

トマスは、まるでブルーノからの答えを待っているようにじっと動くことがなかった。

（トマスよ、自分をキリスト教に縛っているかぎり本当のものは見つけられない。）

トマスの心の中にはっきりとブルーノの声が響いた。ブルーノはその思いがトマスに届いたことを感じたのか、軽く首を振ると十字架から顔を背けた。

（十字架は、何の解決にもならない……）

呆然と立ちつくしているトマスを、役人が邪険に押しやると、積み上げられた薪に火が放たれた。たちまち炎は毒蛇の舌のように薪を嘗め廻り、やがて紅蓮の焔となって十字架を呑みつくし、ブルーノの肉体を取り巻くや、渦巻く煙を噴きあげながら広場の空へと登っていった。

時に一六〇〇年二月十七日、多くの識者は、このブルーノの処刑をもってルネサンスが終わったと捉えている。

## 31

　西勝寺の門前を立ち去ろうとしている、男女二つの影があった。
　男は九介、寺の門の中に向かって盛んに頭を下げている。女は千代、ただ呆然と立ちつくすのみ。そんな千代をかばうように、九介は、彼女の肩を抱えるようにしてその場から立ち去っていった。門の中に、奉行所の役人が残された。彼もまた今受け取ったばかりの「キリシタン転び証文」を懐にねじ込むと、西勝寺を離れ、西役所へと足を向けた。
　振り向けば、西勝寺の庭先あたりから焚き火でもしているのか、一本の細い煙が青空に向かって吸い込まれていく。

　その西勝寺の中庭では、トマス、いや荒木了伯が焚き火に向かって、何かを投げ込んでいる。
「シクストゥス聖書」を焼いているのだ。
　ページをちぎりとっては、火の中へとくべていく。
　その炎の中に、了伯は、ブルーノの声を聞いていた。
「キリスト教に縛られているかぎり、本当のものを見つけることは出来ない……」
　キリスト教に関わらず、仏教でも、およそ宗教という形にとらわれるかぎり、人間は本当のものを見つけることは

出来ない。そのことを了伯は、イヤと言うほど思い知らされた。しかし、そのことを盾にして、死が怖くて逃げ回っている自分がいることも否定できないのでは……。

ブルーノばかりでなく、日本でもたくさんの人が、あの炎の中に命を捨てていった。

今、千代や九介をキリスト教から転宗させたが、自分は本当に正しいことをしたと言えるのだろうか。ベラルミーノ枢機卿の言うように、何も知らなければ、自分も西坂刑場で多くのキリシタンたちと共に死ねたのかも知れない。

「シクストゥス聖書を探して見つけたものは、地獄でしかなかった。この地獄を抱えて生きていくしかないのだろうか……」

了伯の心はいつまでも晴れることがなかった。

## 32

その頃、通訳の青年を伴った藤プロデューサーが、サンタンジェロ城の事務室で係の人間と押し問答をしていた。藤は、大阪の伊牟田と清花から「康男はサンタンジェロ城で見つかるはずだ」との連絡を受け、押っ取り刀で駆けつけてみたものの、半日、探し回っても見つけることができない。そのうち閉館時間も近づき、思いあまって事務室へ

駆け込んだ。しかし、なかなか話がかみ合わず、「そんな日本人はここにはいない」「サンピエトロで行方不明になった人間が、なぜここにいると思われたのですか？」と逆に質問され、あげくに「ここへこられるより警察へ行くべきです」と反撃される始末。

その間にも閉館時間が迫ってくる。

サンタンジェロ城は、冬期は午後四時で閉まってしまうが、四月を迎えると夜の七時まで延長される。

この日、六時にチケットの販売は終了されたが、最後の見学者は、ドイツから来ているボーイスカウトの一団だった。少年たちは、入り口で注意事項を聞くや、大急ぎで薄暗いサンタンジェロの穴蔵の中へと消えていった。

大人の観光客と違い、少年たちは照明を浴びた美術品には興味がない。城壁に並べられた大砲や、中庭に据え付けられた投石機が人気の的だ。

……が、それにも増して、牢獄として機能していた巨大な迷路状の穴蔵に心を奪われた。三人組の少年たちも、ペンライトを武器に、光の届かない闇の世界に果敢に挑戦していた。

彼らは、地上へ向かう地下通路の左手に頑丈そうな扉を見つけて驚喜した。

その壁面には、左手三メートルぐらいの高さのところに鉄格子に覆われた二十センチ程度の窓状の穴が穿たれている。

「ここじゃないだろうか？」
「間違いないよ、ここに違いないよ」
　かつてサンタンジェロの地下牢独房から人骨や頭髪が数多く発見されたという。
　少年たちは思った。ここここそ悪名高いサンタンジェロの地下牢独房に違いない。少年たちは、怖いモノ見たさの誘惑に抗しきれず、扉の下の隙間にペンライトを突っ込み、その中に何があるか覗き込もうとした。
　しかし、扉が厚すぎるためほとんど何も見えない。少年たちは交互に地面に顔をこすりつけ、いろいろと角度を変えてやってみるのだが、どうしても何も見えない。
　一人の少年が扉の下の隙間に手を突っ込んでみた。
「床は乾いた土みたいだ……」
　そんなとき、後ろの少年の一人は、唐突にサンタンジェロに伝わる美貌の幽霊の話を思い出していた。サンタンジェロ城のテヴェレ川に面した入り口には、サンタンジェロ橋が架けられているが、この橋のたもとにベアトリーチェという、ローマで最も美しいという幽霊が現れるという。彼女は父親殺しの罪で、このサンタンジェロ城に幽閉され、厳しい取り調べの末、兄弟たちと共にサンタンジェロ広場で処刑された。
　時にベアトリーチェは二十二歳の若さであり、その美貌とその毅然とした最期に、ローマっ子たちは同情を禁じ得

ず、サンピエトロに運び込まれた遺骸にすがって夜中まで泣きくれたという。

人々は、無罪を訴えるベアトリーチェを死へ追いやったローマ教皇クレメンテ八世を罵り、後には、クレメンテ八世がチンチェ家の財産横領をねらった陰謀説まで登場した。

以来、このサンタンジェロにはベアトリーチェ・チンチェの幽霊が現れるといい、その話は現代に至っても、未だに後を絶たない。

「ウワーッ！」

背後の少年の叫び声に、手を突っ込んでいた少年がパニックを起こした。手が引っかかって抜けない。「ウワーッ！」この少年も叫びだした。

少年は、痛みも忘れて、手を無理やり引っこ抜き、怒ったように、振り返った。

後ろで少年が怯えたように、背後の闇を指さした。

地下の通路が緩い下りの階段になって、大きく右に曲がり下っていっている。

少年たちは、この道を上ってきた訳だが、そのちょうど曲がり角のところに壁に背をもたせかけるようにして一人の男が気を失っていた。

子供たちの叫び声に、閉館の準備をしていた守衛が駆けつけ、こうして康男の蒸発事件は終止符を打つこととなった。

サンピエトロで康男が姿を消してから三十時間あまりが経過していた。

ところで叫び声を発した少年は、康男を見つけた訳でなく、若い女性の幽霊を見たのだと言ってきかなかった。康男は康男で、若い女性に導かれるようにしてここまで来たといい、サンタンジェロの幽霊話に新しいエピソードを残すこととなった。

# エピローグ

了伯（トマス）は、異臭漂う穴蔵の中に逆さに吊られながら、いつしか割れるような頭の痛みが遠のいているのに気づいた。自分は、いったい今どこにいるのだろう。

そうだ、自分は、九介と千代の二人を転ばせたあと、自分自身は逆にキリシタンであることを再び名乗り出たのだった。かといって、またぞろキリスト教を信じるようになったわけではない。むしろ、どんな宗教にも、どんな道徳にも、もう自分を縛りたくないと思っていた。ただ自分の言葉を信じ、殉教していった人のことを考えると苦しくてならなかった。自分が間違ったことを教えたために、たくさんの人が、救いのない地獄を選んでいった。みんな、苦しみの向こうにパライゾ（天国）があると、むなしい幻想を抱いて死んでいった。そこには呪いしかなかった。恨みしかなかった。

同じことなら、自分もあの苦しみの中に落ちていこう。そうすることが自分に出来る唯一の償いのように思えたのだ。

了伯は今、そんな自分を見ていた。ぐるぐる巻きにされ、鬱血死しないよう、こめかみに刀傷を付けられ、汚物を流

し込んだ穴の中へ逆さ吊りにされている自分。そんな自分を、自分が見ている。さきほどまでの割れるような頭の痛みもなく、それ以上に、あの押しつぶされそうな心の苦しみもない。

そんな心に、湧きあがってくる一つの思い。

「トマス、神は自分の外にあるのではありません。天上にあるのでもありません。神は、自分の心の中にあるのですよ。自分の中に本当の自分があります。それを自分が隠してしまっているのです。肉体を自分と思う心が、本当の自分を隠してしまって見えなくしているのですよ。」

あれは母親だろうか。何かとてもあたたかくて、自分のすべてを包み込んでくれている。気が付くと、すべての形が消え、言葉も消え、ただ、あたたかい思いだけが残った。

穴の外では「転べ、転べ。この綱を揺すればよいのじゃ」と、がなりたてている役人たちがいる。穴の中に向かって、鍋をたたいたり、怒鳴ったり、その騒音が、穴の中に反響している。すでに一刻半も過ぎ、さすがに疲れたものか、役人たちもその場で休み、静けさが戻ってきた頃だ。一人が叫んだ。

「綱が揺れているぞ！」

「転んだ、転んだ。了伯が転んだぞ！　早くあげろ、早くあげてやれ。あの歳じゃ早くせんと死んでしまうぞ。」

この後、了伯は意識を取り戻すことなく、牢屋敷へと移された。

　その枕元には、ローマで行を共にし、帰国後、共に背教者となったミゲル――今では了順と名乗っている――が付き添っていた。

　了伯が、一時意識を取り戻したときのことだ。たまたま了順は奉行所に呼ばれていたのだが、その席へ役人が駆け込んできた。

「了伯殿に意識が戻りました。しきりに何かを訴えております。」

「了伯は何と申しておるのか？」奉行が言う。

「ハッ、それが…………」

「何と申しておるのだ！」

「ハッ、しきりに神は心の中にあった、神は心の中にあった。ミゲルにもこのことを伝えねば………と、そればかりを、」

「……狂ったのであろう。あらためての吟味は無用。そのままにすておけ。」

　そう言うと、了順に向き直り「早く行ってやれ」と声をかけた。

　了順が駆けつけたとき、了伯はすでに息絶えていた。

　時に一六四六年（正保三年）、六十七年の生涯だったという。

◇

一九六九年三月

テレビスタジオのホリゾントに絵筆をふるう伊牟田のもとを、藤プロデューサーが訪れた。

「おい、康男からだ。」

藤が、一通のエアメールを伊牟田に差し出す。

泥絵の具で汚れた手を腰の手ぬぐいで拭い、受け取ってみると、消印はローマからになっている。

「あいつ…………」

伊牟田が、分厚く折り畳まれた便せんを取り出そうとしたとき、一枚の写真がすべり落ちた。

藤がその写真を拾い上げうれしそうに伊牟田に手渡した。

康男が、サンタンジェロ橋の上で笑っている。

「なんてヤツだ、人に心配かけておいて……いい気なもんだ。」

あれから、僕は、藤さんにも伊牟田さんにも、お世話になった清花さんにさえ、何の相談もなくプロダクションを辞めてしまいました。本当に申し訳ありません。また清花さんの「一度、古野先生に会ってみたら」というおすすめにもまだ応え

られずにいます。清花さんのいうように、過去世にこだわるのでなく、今の自分の苦しみを見つめていく、それが自分の引きずっているたくさんの過去の苦しみを癒していくことになるのだということ、本当によく分かります。

自分自身のなかで、トマスのこと、またトマスに誘ってくれたベアトリーチェの亡霊のこと、そしてブルーノのこと、もう少し考えてみたかったのです。調べることが意味のないことだとは分かっているのですが、今の僕にとっては、調べることが、その人たちと語り合うことだと思えたのです。

ところで、ローマに向かう前、長崎県立図書館で一通の転び証文を見つけました。元本は西勝寺にあり、その写しだということですが、正保二年酉の日付のあと、「右　菓子屋九介　女房」の名前があげられ、最後に「南蛮転び伴天連中庵、日本転び伴天連了順、日本転び伴天連了伯」の名が保証人として掲げられていました。

僕が、どんなにびっくりしたか分かっていただけるでしょうか。みんな、妄想でも幻覚でもなかったのです。藤さんには「まだ、そんなことを言ってるのか」って怒られそうですが、一緒にコピーを同封しておきます。

それともう一つ、長崎県立図書館で見つけた「オランダ商館長日記」、ここにもトマスの最期のことが掲げられていたので、書き写しておきました。

ウイルレム・フエルステーヘンの日記
一六四六年十一月の条
十七日　正午頃通詞が来て、我らの輸入品の仕入れ地を尋ねたので、支那とオランダとが大部分の供給地であると答えた。これは支那人の来航が絶えても、支障はないか調べたのである。

予は日本に来た時から背教パーデレたちの事を知ろうと努めたが、トーマという日本人は長くローマに滞在し、法王の侍従を勤めたこともあり、前に数回キリシタンであることを自訴したが、奉行は、彼が老年のために精神錯乱したのであると考えて放置し、その後一昼夜足で吊された後、教をすてたが、心中には信仰を失わず死亡した。今は二人のみ生存しているが、一人は忠庵というポルトガル人で元当地の耶蘇(イエズス)会の長であったが、その心は黒い。他の一人は前の乙名後藤庄三郎殿（町年寄後藤庄左衛門貞朝か）の兄弟で、少しもオランダ人の不利を計ることはない。

最後に「シクストゥス聖書」についても面白い資料を見つけました。オックスフォードのボードリアン図書館にも、「シクストゥス聖書」が一部紛れ込んでおり、初代司書のトーマス・ジェームズ博士がこれを見つけたというものです。一六一一年、ジェームズ博士は「シクストゥス版聖書」と

「シクストゥス＝クレメンテ版聖書」を比較対照する書を著しました。博士は、「二人の教皇の間に食い違いがあることは紛いようもなく、それも章句の番号だけでなく、テキストの本体、そして序言と大勅書そのものまでもが異なっていること」を発見したというのです。そればかりか、ジェームズ博士はとくに注目に値する問題として、この二人の教皇は明らかに、見解の対立から闘っていると主張し、「ここにいるのは対立する二人の教皇である。シクストゥスがクレメンテと対立し、クレメンテはシクストゥスと対立している。ヒエロニムスの聖書をめぐって論争し、文書を記し、闘っている」と記しています。

以上です。

またローマから帰ったらご連絡します。

なお、同封の写真を撮ってくれた女の子（通りすがりで、何の関係もない人なのですが、念のため）、名前をベアトリーチェというそうです。ビックリですね。

本当に、ありがとうございました。

（完）

## ■ 日本側の主な登場人物 ■

トマス荒木／荒木了伯　一五七四年、荒木忠通と時子の長男として摂津に生まれる。荒木村重の謀反で両親を失い、父の友である高山右近の手で、安土のセミナリオの一期生となる。十七歳のとき、ミゲル後藤とともにローマに留学すべく日本を離れ、十九歳のとき、リスボンに到着。留学の目的は、司祭に叙階されることはもちろんだが、新約聖書の日本語訳とその出版のため、その底本となる「シクストゥス聖書」をはじめキリスト教書籍を日本に持ち帰ること。しかし､完成したはずの「シクストゥス聖書」は一冊も存在せず､その謎を追究するうち、キリスト教世界の闇に深く関わっていく。一六一五年､日本に帰ったトマスはキリスト教を捨て、キリシタン詮議役人として、六十七年の人生を終える。

ミゲル後藤／後藤了順　生没年不詳。長崎の富商であり、西洋印刷術の版元となった後藤宗印の息子。後の長崎内町乙名・後藤庄三郎の弟でもある。歴史上は、一六一四年のキリシタン大追放の際、マニラに追放され、一六一八年にマニラで司祭として叙階され、その後、日本に布教のため潜入し捕らえられ棄教したとされている。
　この物語では、トマスと共にローマに渡り、トマスと共に「シクストゥス聖書」の謎に取り組むという設定。

荒木忠通・時子／トマス荒木の両親。荒木村重の家老・荒木久左衛門が若い頃、領内の百姓の娘に生ませたのが忠通という設定。高山右近を師とも友とも慕い、その影響で夫婦でキリシタンに改宗する。主君荒木村重が信長に謀反におよぶや、息子トマスを右近に託し、自らは夫婦共に籠城戦で討ち死にする。

荒木久左衛門／元は池田久左衛門　荒木忠通の父であり、荒木村重の家老。元々は池田姓で池田勝正に仕えた池田二十一人衆の筆頭だったが、池田家の内紛後に荒木村重に臣従。村重の謀叛では有岡城を守備し、村重の尼崎移動後、荒木村重と謀り、織田軍に対し、尼崎城の村重に降伏を勧める風を装い、荒木家の主力を逃亡させた。

中浦ジュリアン／（一五六八年頃～一六三三年）　天正遣欧使節の副使。ジュリアンは洗礼名。肥前国大村領中浦村領主の子。ローマ滞在中、病に苦しむジュリアンをグレゴリオ十三世はことのほか気にかけ、単独の謁見を許したほど。そのグレゴリオ十三世の崩御に当たってジュリアンは病を押して葬儀に参列する。この箇所は史実にはない創作だが､このエピソードによって､当時のローマ市民にとってローマ教皇はどんな存在だったのかを浮き上がらせる。「ローマの人は、教皇様を信じちゃいないんだね……」

高山右近／（一五五二～一六一五）　安土桃山時代～江戸時代初頭の代表的なキリシタン大名。天正六年（一五七八年)、右近が与力として従っていた荒木村重が信長に反旗を翻した。その際、キリシタンを守るため、右近は信長に従うこととなったが、生き残った荒木家家臣とその家族の誅殺を命じられ苦しむ。親友荒木忠通の一子トマスをかくまい、安土にセミナリオが出来ると、トマスを、その院長オルガンティーノに託す。秀吉、家康の時代には禁教政策のため、明石、金沢と転々とし、一六一四年のキリシタン大追放の際、マニラへ追われ、翌年同地で没している。

末次興善・平蔵／長崎の朱印船貿易家父子。父興善は、平戸木村氏の出。秋月・博多に勢力を有する豪商末次家に養子として入り、ポルトガル貿易で賑わう長崎へ進出。同地の内町乙名としてまた朱印船貿易家として活躍。子供の平蔵の代には、長崎外町代官村山当安を陥れ、自ら外町代官職に就き、長崎内町・外町を支配下におさめる大商人になる。ヨーロッパ世界の情勢を知るべく、トマス荒木のローマ留学を経済的に支援する。

菓子屋九介・千代／九介は、村山当安から南蛮菓子の手ほどきを受け、当安の肝いりで店を開くに至った。妻の千代も、「女房なしでは店の信用も……」ということで、やはり当安の世話で、後藤宗印の娘千代をもらうこととなった。夫婦ともどもキリシタンだが、特に千代は、宗印の娘ということもあり、子供の頃からキリシタン版の印刷とも関わりを持ち、トマスを兄のように慕っている。キリシタン書物の多くを諳んじており、「生きて教えを伝えるため」とトマスから諭され、一時、心ならずも背教を装おうが、トマスから預かったローマから持ち帰った「シクストゥス聖書」が、九介の店から発見され、今度こそはと夫婦共に殉教の覚悟をかためる。

オルガンティーノ神父／（一五三三～一六〇九）　ニエッキ・ソルディ・オルガンティーノは、一五三三年、北イタリアのカストで生まれ、二十二際でイエズス会士となり、一五七〇年に来日し、一六〇九年四月に長崎で病没した。人柄が良く、日本人が好きだった彼は「うるがんばてれん」と慕われ、三十年を京都で過ごす中、織田信長や豊臣秀吉など時の権力者とも知己となり、激動の戦国時代の目撃者となった。高山右近から依頼され、四十七歳で安土セミナリオの院長となるや、トマス荒木を、その第一期入学生として受け入れる。

ギリエルモ・ペレイラ修道士／（一五四一～一六〇三）　ペレイラは生まれてすぐポルトガルはリスボンの孤児院（ペドロ・ドメネク神父の経営）に捨てられる。孤児院を経営するドメネク神父は、ポルトガル国王の命で、自ら養育する一六〇人の孤児の中から九名を選び、布教活動を手伝うためインドへ送る。ゴアとバセインとグランガノールのキリスト教学校に三名ずつが入学。そのなかに十歳になるペレイラ少年もいたが、十五歳のとき、彼はそこからさらに日本へと派遣された。日本に来て二年後（一五五八）、正式にイエズス会に入会する。語学に優れ、日本人より日本語をうまく話すと言われているが、ラテン語にも通じ、トマスにラテン語の手ほどきをし、「ローマで叙階されパードレになる」という自らのかなわぬ夢をトマスに託す。

## ■ イタリア側の主な登場人物 ■

アレッサンドロ枢機卿／本名はアレッサンドロ・オッタビアーノ・デ・メディチ。後のレオ十一世（一五三五年～一六〇五年）。一七世紀初めのローマ教皇。教皇位をめぐりベラルミーノ枢機卿と争ったが、トスカーナ大公国のメディチ家とは遠縁に当たり、マリア・デ・メディチを妻としていたフランス王国のアンリ四世の後援を受けて教皇位についた。しかし選出のわずか二十六日後に世を去った。彼が教皇の座に就けたのは、トスカーナ大公国大公のフェルディナンド・デ・メディチの影響力が大きい。この物語では、シクストゥス聖書を探すトマス荒木を助け、サンタンジェロ城に幽閉されている哲学者ブルーノとの出会いや、フィレンツェのエレオノーラとの出会いを用意する。

シクストゥス５世／本名は、フェリーチェ・ペレッティ・ダ・モンタルト。（一五二〇年～一五九〇年）　一六世紀後半のローマ教皇で、教皇領の治安回復、教皇庁の財政立て直しに辣腕をふるい、公共事業に惜しみなく投資して都市ローマを現代に近い形に整備した。批判も多いが、残した業績の大きさでは歴代教皇随一である。日本から来た天正遣欧使節の少年たちの「イエス様の生涯を日本語で表したい」という言葉に触発され、その元となるラテン語聖書の改訂を神からの声のようにとらえ、ほぼ単独で「シクストゥス聖書」を完成させる。

ジョルダーノ・ブルーノ／（一五四八年～一六〇〇年）　イタリア出身の哲学者、ドミニコ会の修道士。それまで有限と考えられていた宇宙が無限であると主張し、コペルニクスの地動説を擁護したことで有名。キリストの神性を否定し、異端であるとの判決を受けても決して自説を撤回しなかったため、カンポ・デ・フィオーレで火刑に処せられた。この物語では、失われた「シクストゥス聖書」について、トマス等にサンタンジェロの牢獄から示唆を与える人物。メディチ家の「インクナブラ」という結社とも通じ、キリスト教の闇の部分についても把握しており、トマスに「真実は、宗教にとらわれている限りつかむことはできない」と言い残し、焼き殺されていく。

ベアトリーチェ・チェンチ／（一五七七年～一五九九年）　イタリアの貴族フランチェスコ・チェンチの娘として生まれ、家族共謀して不道徳な父を殺したとして処刑される。ローマ市民は彼女の無罪を盛んに訴えるが聞き入れられず、サンタンジェロ橋で末の弟一人を残してことごとく残酷な処刑方法で殺される。以後、サンタンジェロ橋に現れる美貌の幽霊として有名。この物語では「シクストゥス聖書」とも深く関わり、ヴァチカンにとって最大の異端と言われたカタリ派キリスト教を信奉する一族となっている。

ノストラダムス／ミシェル・ド・ノートルダム（一五〇三年～一五六六年）　ルネサンス期フランスの医師、占星術師、詩人。また料理研究の著作も著している。「ノストラダムスの大予言」の名で知られる詩集を著したが、彼の予言は、現在に至るまで多くの信奉者を生み出し、様々な論争を引き起こしてきた。彼が異端審問所からの呼び出しを逃れシシリーを旅していたとき、フランシスコ会士フェリーチェ・ペレッティ（後のシクストゥス五世）と出会い、彼が将来、ローマ教皇になることを予言する。この予言から、この物語は始まるとも言える。

ロベルト・ベラルミーノ枢機卿／ロベルト・フランチェスコ・ロモロ・ベラルミーノ（一五四二年～一六二一年）　イタリア出身のイエズス会司祭で、ローマ・カトリック教会の枢機卿。カトリック改革に最も功労のあった枢機卿の一人。一九三〇年、聖人および教会博士に列せられる。ガリレオ裁判でガリレオを裁いたことでも有名だが、ジョルダーノ・ブルーノをも裁き火刑に処している。シクストゥス五世には嫌われ、彼の在位中は、避難を余儀なくされている。シクストゥスの死後、教皇在位中の労作「シクストゥス聖書」を誤植が多いという理由で回収し、「シクストゥス・クレメンテ聖書」を大慌てで発行している。また彼の主要著作である『異端反駁信仰論争』は有名で、キリスト教の教義論争に関してこの書にとってかわるほどの著作はいまだに現れていないと言われる。

エレオノーラ／エレオノーラ・デッリ・アルビッツィ（一五四三～一六三四年）　フィレンツェで隆盛を極めたアルビッツィ家の令嬢として生まれる。しかしメディチ家の隆盛と前後してアルビッツィ家は衰退に向かい、エレオノーラが生まれた頃は、フィレンツェの名家としてのみ命脈を保っている。十四歳のとき、トスカナ公国のコジモ一世に見初められ愛人となるが、その

後、ゴシップ封じのため不良貴族カルロに嫁がされる。そのカルロからもメディチ家のピエロとの浮気を理由に、姦通の罪を犯した者が入れられるという女子修道院に幽閉され、九十一歳で没す。

フランチェスコ1世／(一五四一〜一五八七年)　トスカーナ大公。コジモ一世とエレオノーラ・ディ・トレドとの子。 神聖ローマ皇帝フェルディナント一世の娘ヨハンナと結婚したが、妻が存命中から愛人ビアンカ・カッペッロをそばにおき、ジョヴァンナの急死後ビアンカと再婚した。政治からも遠ざかり、晩年は、別荘や実験室にこもりがちになり、フランチェスコが実験室で毒薬を製造し、ビアンカがそれを使用しているとまで市民に悪評が広まったことさえある。一五八七年、弟フェルディナンドがフランチェスコの別荘を訪れていたときに夫妻は死亡したという。この死に関してマラリアの説や毒殺の疑念もあったが、最近になってヒ素による毒殺であると公表された。真犯人はいまだ不明である。

ビアンカ・カッベロ／（一五四八年〜一五八七年）　トスカーナ大公フランチェスコ一世・デ・メディチの二度目の妃。ヴェネツィアの裕福な貴族であるカッペッロ家出身で、美女の誉れ高く後期ルネサンスの花と称される。十五歳で、ピエトロ・ボナヴェンチュリというサルヴィアーティ家に仕えるフィレンツェ人と恋仲になり、一五六三年十一月にフィレンツェへ駆け落ちするが、メディチ家のフランチェスコ一世に見初められ、愛人として迎えられる。フランチェスコには既にジョヴァンナという后妃がいたが、彼女が死ぬと、ビアンカが晴れて后妃として迎えられた。一般には悪女のように言われるが、権力者に振り回される女性の哀れさを身にしみて感じており、同じ境遇のエレオノーラの良き理解者でもあった。

コジモ一世／（一五一九年〜一五七四年）初代トスカーナ大公。メディチ傍系であり、勇敢な傭兵隊長として知られた「黒隊長」ジョヴァンニと妻マリーアの子。ルネサンス期の女傑として知られるカテリーナ・スフォルツァの孫に当たる。一五三七年、フィレンツェ公アレッサンドロ（ローマ教皇クレメンス七世の庶子）が暗殺された後、十八歳のコジモがフィレンツェ公を継ぐ。ハプスブルク家の支援のもと、フィレンツェの中央集権体制を確立した。今日、我々が目にするフィレンツェを造りあげた英雄だが、晩年は女性に狂い、亡き妻が名付け親になった十四歳のエレオノーラさえ自分の愛人にしてしまい、その後はエレオノーラの従姉妹カーミラ・マルテッリに心が移り、エレオノーラは不良貴族に嫁がされる。

老コジモ／（一三八九〜一四六四）　コジモ・デ・メディチ　ルネサンスの都フィレンツェを支配する豪商。大商人ジョヴァン・デ・ビッチの息子。コジモの時代、一時メディチ家は、アルビッツィ家を中心とした寡頭支配層に国外追放されていたが、翌年逆にアルビッツィ派が追放されて、コジモが復帰し、市の実権を掌握する。彼は民衆とも結びつき、都市の商・産業の発展に尽くし、芸術を愛好してドナテッロやフィリッポリッピを援助し、プラトンアカデミアを設立して、ルネサンス文化の発展にも尽した。死後「祖国の父」という称号が与えられた。

## ■ フランス側の主な登場人物 ■

聾唖のトマス／トゥールーズ伯レイモン七世の双子の子供の一人。一方は姉のジャンヌ、そして一方が弟のトマス。しかしトマスは三歳になっても口がきけず、生まれついての聾唖者であることが判明し、その時点で農家へ預けられる。当時、南フランスはカタリ派キリスト教が盛んで、フランス王国とヴァチカンは共同して、カタリ派撲滅のためアルビジョア十字軍を派遣する。この戦いで敗れたレイモン七世は、娘ジャンヌをフランス国王ルイ九世の弟アルフォンスに嫁がせるばかりか、トマスをもパリの修道院に預けるよう命ぜられる。その後、トマスは第二次アルビジョア十字軍の時、カタリ派に身を投じることとなる。

トゥールーズ伯レイモン七世／（一一九七年～一二四九年 ）　西はピレネー山脈の麓から東は地中海沿岸のコート・ダジュールに及ぶ南フランス一体を支配下に治める大領主。支配地域の広さもさることながら、この地は、地中海貿易の交易品を北欧につなぐ重要な位置を占めており、その経済的な繁栄がフランス王国に対抗させるだけの力を持たせていた。フランス王国としては、南フランスの制圧なくしてはフランスの統一はありえない。またヴァチカンは、この地にはびこる強大な異端カタリ派キリスト教を撲滅しなければならない。この二つの目的が、凄惨なアルビジョア十字軍の遠征につながっていく。

エスクラルモンド／カタリ派の女性指導者の一人。フォワ公爵レイモン・ロジェの妹でジュルダン侯の未亡人。聾唖のトマスの理解者であり友となる。モンセギュール城陥落に当たっては、救慰礼を受け、火焙りになる道を選ぶ。トマスに「マリアの福音書」を託す。

ルイ九世／（一二一四年～一二七〇年）　フランス王国カペー朝第九代の国王でルイ八世の子。死後、カトリック教会より列聖され Saint が称され、ここから、サン•ルイと呼ばれるようになった。ブルボン家の先祖でもあり、同家の王の多くがルイを名乗るのも彼に由来すると思われる。内政に力を入れ長期の平和を保った。彼の治世の間、フランス王国は繁栄し、国内外を問わず争いを収めるよう努力したためヨーロッパの調停者と呼ばれ、高潔で敬虔な人格から理想のキリスト教王と評価されている。カタリ派の討伐では、紛争後の南フランスを統治する必要から、トマスを密偵としてカタリ派に潜入させ、その宗教と文化を調べさせる。

## ■ 現代の主な登場人物 ■

康男／夜間大学に通いながら、大阪のＣＭプロダクションで制作進行として働いている。ローマロケのスタッフに決まった頃から、不思議な幻覚に悩まされ、ローマロケ中にも幻覚が再発し、サンピエトロ寺院で失踪してしまう。失踪している間、一六世紀～十七世紀を生きたトマス荒木の人生を追体験することとなる。

伊牟田／康男と同じプロダクションの美術部で働く。康男の年上の友人であり相談相手。元は絵描きを志望していたが、妻の清花と結婚するため、その夢を断念。ヨーロッパ美術に造詣が深く、霊感の強い妻の清花と共に、日本にあって康男の失踪事件を解決しようとする。

清花／父親の宗教狂いで家族が崩壊し、荒れた高校時代を送るが、担任の古野吉祥先生を知ることで立ち直る。生活のためストリッパーをしていたが、伊牟田に見初められ結婚。結婚後は､持ち前の感受性の強さもあって､見えない世界への感性を高めていく。康男の失踪では、意識の世界から康男の行方を探る。

藤信次／テレビ草創期からのプロデューサー。金遣いの荒さが災いし、東京から逃げるようにして大阪のＣＭプロダクションにやってくる。康男を可愛がり､「あいつは､俺が仕込まないと、この世界では食っていけない」と、自分がプロデュースする仕事には必ず康男を付ける。ローマロケでは、康男の失踪後、ローマに残り、日本の伊牟田と連絡を取りながら、康男の行方を追う。

著者紹介／桐生敏明（きりう・としあき）

1948年生まれ。政府刊行物サービスステーション在職中より「オーダーメイド出版」を提唱し、商業性よりも伝える意義を重視した出版活動を展開。阪神・淡路大震災の体験記『避難生活から学ぶ心の震災防備』（2001）を皮切りに、200本近い書籍を世に送り出す。主な編集協力作品に『アフガニスタンの失われた刺繍』、『天国へのマーチ』（映画化企画）、『十一夜物語』、『アフガニスタンの失われた刺繍』、『中国唐代鎮墓石の研究』、『サンドブラスト竹内洪作品集』、『鰊来たか』、『PureHeartエッセー集』（乙武洋匡編）などがある。

現在は「UTAブック」レーベルにて、精神世界をテーマとする自主出版を継続。電子書籍のストリビューターとしても活動しながら、自身のライフテーマを物語として綴る創作に取り組んでいる。

著書に『孤児たちのルネサンス』、『時を超えて伝えたいこと』、『光のなかへ』、『末次平蔵と村山等安』、『貿易関係者のキリシタン迫害』など。

孤児たちのルネサンス　－トマスの物語－

初版発行　2010年2月24日

著　　者　　桐 生 敏 明
装　　幀　　桐 生 敏 明
発　　行　　編集工房 DEP
奈良県北葛城郡広陵町馬見北4丁目14-7
TEL 0745-55-8522　FAX 0745-55-8440
印刷・製本　　株式会社 モリモト印刷